福崎町埋蔵文化財調査報告 31

林谷遺跡

―高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書―

2024 年 3 月

福崎町教育委員会

あ　い　さ　つ

福崎町は古くから交通の要衝として栄え、周囲を豊かな山林に囲まれ、中央部を清流市川が流れており、その東西それぞれに市街地が形成されてきました。

平成27年度から高岡･福田地区ほ場整備事業に伴い、調査を実施してまいりました。それによって、市川西岸の高岡にも新たな遺跡が確認され、特に奈良時代の集落が多数あることがわかりました。徐々に高岡・福田地区の状況が明らかになってきています。

このたび、平成元･3年度に実施した林谷遺跡の発掘調査成果をまとめ、報告書を刊行致しました。広くご活用いただき、みなさまにとって郷土の歴史・文化への理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり地元関係者をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

令和６年　３月

福崎町教育委員会
教育長　髙橋　渉

例　言

1．本書は高岡・福田地区ほ場整備事業に伴って調査を実施した兵庫県神崎郡高岡字林ノ谷・社ケ一に所在する林谷遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、平成29年度から試掘確認調査を実施し、令和元・３年度に本発掘調査を行った。調査は兵庫県中播磨県民センターの依頼を受けて福崎町教育委員会が実施した。
3．経費は試掘確認調査については国庫補助金を充て、本発掘調査は事業主体者が負担し一部国庫補助金を充てた。
4．本書に使用した方位は基本的に磁北で、標高は福崎町設定の基準点を使用している。
5．令和元年度の発掘調査は前半を株式会社マツダ建設に、後半を株式会社安西工業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。令和３年度は調査・測量・撮影を株式会社マツダ建設に委託した。
6．本書に掲載した図のうち遺跡位置図は福崎町発行の都市計画図（1/10,000）を、調査区配置図は福崎町都市計画図（1/1,000）を編集したものである。
7．執筆編集は樋口・梶・福永・原井川・常陰の協力を得て渡辺が行った。
8．本報告に係る図面、写真、遺物等は、福崎町教育委員会にて保管している。
9．調査・整理作業において、多くの方々や機関にご指導・ご助言・ご協力をいただきました。感謝します。地元桜区の方々、調査に参加いただいた方々、工事関係者の皆様には感謝します。

本　文　目　次

Ⅰはじめに
1　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・1
2　分布試掘確認調査の経過と結果・・・・・・・1
3　本発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・5
4　整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・6
5　周辺の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・6
Ⅱ　調査結果
1　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・9
2　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Ⅲ　出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Ⅳ　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・23

図　目　次

図 1　福崎町・林谷遺跡の位置・・・・・・・・・・2
図 2　試掘確認調査・本発掘調査位置図・・・・・・3
図 3　試掘確認調査実測図・・・・・・・・・・・・4
図 4　林谷遺跡の位置と周辺の遺跡・・・・・・・・7
図 5　落とし穴集成図・・・・・・・・・・・・・・24
図 6　1区平面図・西壁土層断面図・・・・・・・・25
図 7　1区遺構実測図
(SK01~07・SX01~03・SD01）・・・・・・26
図 8　2区平面図・北壁土層断面図・・・・・・・・27
図 9　2区遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・28
図 10　3区平面図・西壁土層断面図・・・・・・・・29
図 11　3区遺構実測図 (1)・・・・・・・・・・・・30
図 12　3区遺構実測図 (2)・・・・・・・・・・・・31
図 13　4区遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・32
図 14　4区西壁土層断面図・・・・・・・・・・・・33
図 15　4区遺構実測図 (1)（SH01）・・・・・・・・34
図 16　4区遺構実測図 (2)
(SH01 カマド・土器出土状況)・・・・・・・35
図 17　4区遺構実測図 (3)（SB01・SB02）・・・・・36
図 18　4区遺構実測図 (4)（SB03~SB05）・・・・・37
図 19　4区遺構実測図 (5)
(SA01・02・SX01~02・SD 01・SK01~03)・・・38
図 20　5区東半上層平面図・・・・・・・・・・・・39
図 21　5区東半上層遺構図・・・・・・・・・・・・40
図 22　5区西半暗渠平面図・・・・・・・・・・・・41
図 23　5区東半下層遺構図・・・・・・・・・・・・42
図 24　5区下層平面図・・・・・・・・・・・・・・43
図 25　5区北壁中央・東壁断面図・・・・・・・・・44
図 26　5区遺構実測図 (1)（SH02）・・・・・・・・45
図 27　5区遺構実測図 (2)（SH04）・・・・・・・・46
図 28　5区遺構実測図 (3)（SH05）・・・・・・・・47
図 29　5区遺構実測図 (4)（SH06）・・・・・・・・48
図 30　5区遺構実測図 (5)・・・・・・・・・・・・49
図 31　5区遺構実測図 (6)（SB07・SB08）・・・・50
図 32　5区遺構実測図 (7)（SB09・SB11）・・・・51
図 33　5区遺構実測図 (8)（SB10・SB12）・・・・52
図 34　5区遺構実測図 (9)（SX03・SK04）・・・・53
図 35　出土遺物実測図（1)・・・・・・・・・・・・54
図 36　出土遺物実測図（2)・・・・・・・・・・・・55
図 37　出土遺物実測図（3)・・・・・・・・・・・・56
図 38　出土遺物実測図（4)・・・・・・・・・・・・57
図 39　出土遺物実測図（5)・・・・・・・・・・・・58

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯と経過

福崎町では高岡・福田地区においてほ場整備事業が計画された。事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である観音堂遺跡・宮ノ前遺跡・前田遺跡・林谷遺跡・狐塚遺跡が存在するが、それ以外の遺跡の存在も想定されたので、計画策定段階から埋蔵文化財取り扱いの協議がなされた。通常の進め方で事業用地内の分布調査を実施し、その結果などから試掘確認調査対象地を確定し試掘確認調査を行い、遺構面が保全されない部分について本発掘調査を実施することとした。

調査はすべて福崎町教育委員会が主体となって行った。進捗実施にあたっては、事業主体である兵庫県中播磨県民センター姫路土地改良センターならびに福崎町農林振興課・土地改良区・地元と協議しながら実施した。調査にあたっては多くの方々の協力を得ました。感謝いたします。

２．分布試掘確認調査の経過と結果

分布調査は平成 27 年度から開始したが、当該地域の分布調査は平成 29 年度 2 月から 5 月にかけて行った。福崎町作成の図（1,000 分の 1）を利用し、筆ごとに採集点数をカウントした。調査では分布調査成果に地形も考慮して、遺跡範囲を囲った。調査は玉田誠司・樋口　碧・渡辺　昇・梶　智美が担当した。分布調査成果をもとに試掘確認調査を行った。平成 28・29 年度に 5 期に分けて調査を実施した。当該遺跡部分は北工区を対象とした平成 29 年度に行った。耕作物の都合で麦作部分は 9 月に行い、10 月に稲作部分を行った。詳細は福崎町文化財調査報告 17・21 で報告しているので、参照いただきたい。

林谷遺跡周辺部分だけを略記すると、49G ～ 69G が該当する。9 月 27 日（水）28 日（木）10 月 3 日（火）の 3 日間で試掘確認調査を実施した。南側の尾根下の平地部は№. 56 ～ 59 でピット・落ち込みなどを検出し明瞭な遺構面を確認した。56G は耕土･床土･オリーブ褐シルト質極細砂（礫混じりと礫なしがある）・黄褐極細砂（地山）の 6 層から成り、地山面で遺構を検出している。遺構面はあるものの南側ならびに東側に地形が下がっており、包含層は認められなかった。洪水堆積も認められ、堆積土も厚くなっていた。遺跡範囲は今回調査を行った 4・5 区南側までで、西側も№. 61 では遺構面が確認されておらず、№. 59 の西部分までが遺跡の範囲と思われる。東側は谷部で遺構面は確認できず、北側も尾根を削って耕作地に広げていることから耕土直下が地山になっており、今回調査を行った範囲から北には広がっていない。

尾根部の調査では№. 62 ～ 66 で落ち込み･土坑などの遺構が検出されている。耕土･床土･オリーブ褐シルト質極細砂の下は地山である明黄褐シルト質極細砂になっている。第 3 層のオリーブ褐シルト質極細砂がない部分もあり、№. 66 の水田では東側が低くなっている。№. 66 の北側に設定した№. 67 や№. 68 では谷地形で深くなっており、地山が確認できなかった。西池を作る前は深い谷になっていたようである。遺跡の広がりは東側ならびに北側は今回調査した地点を限りとし､西側･南側には遺跡が延びていると考えられる。№. 64 の南側造成時にサヌカイトの石器などが採集されていることから、今回調査した落とし穴と同時期の縄文時代の遺跡が尾根上に広がっていたと推測される。

林谷遺跡の範囲は北・東と南東半はほぼ限定できるが、西から南西部にかけては明確でない。県道を越えて遺跡が延びているかどうかは不明である。七種川沿いの低い水田になることから、大きくは広がっていないと思われる。

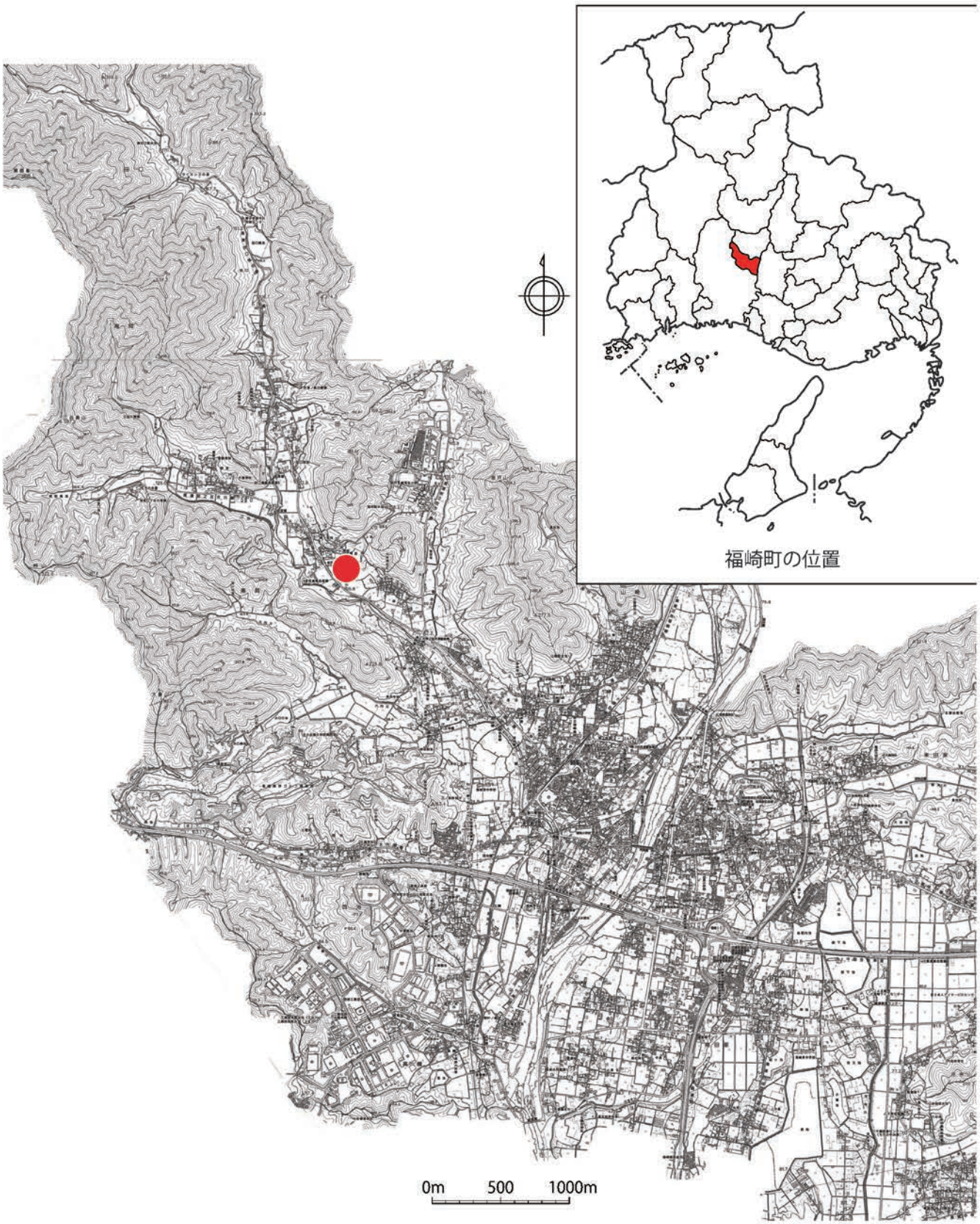
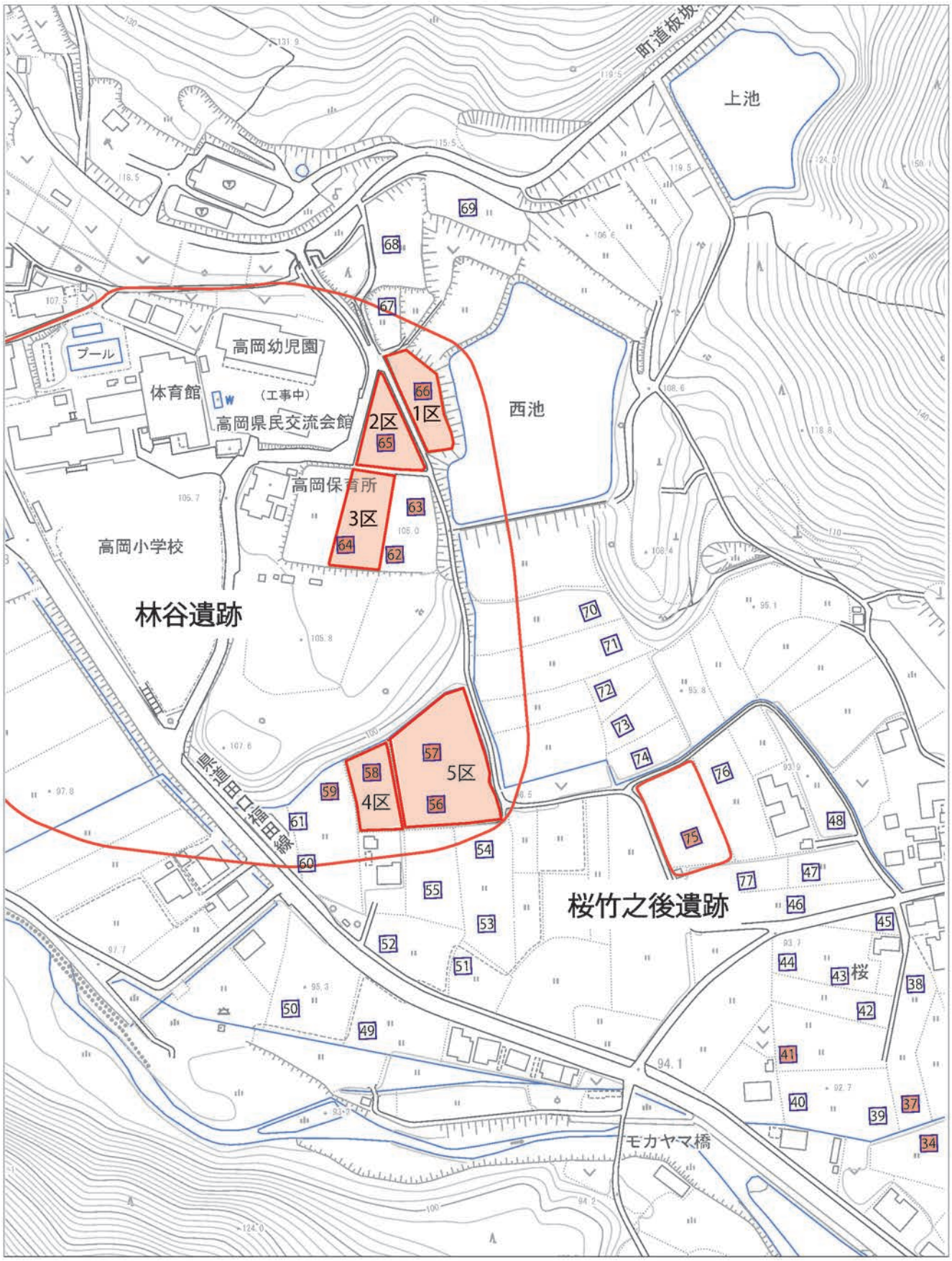


図１　福崎町・林谷遺跡の位置



試掘確認調査　試掘確認調査遺構あり　本発掘調査

図２　試掘確認調査・本発掘調査位置図

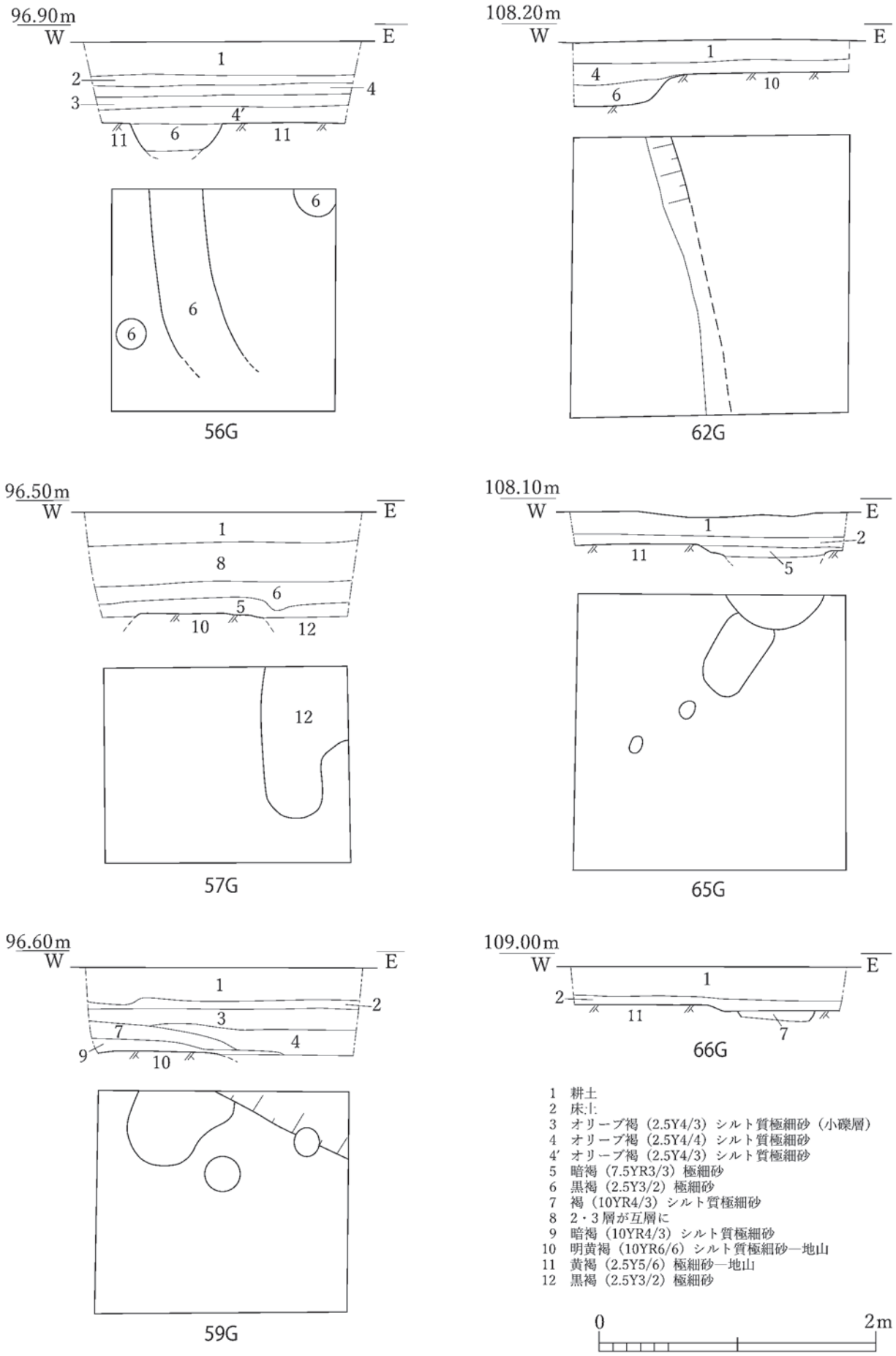


図3　試掘確認調査実測図

平成 29 年度調査体制

調査主体　福崎町教育委員会
教　育　長　高寄十郎
社会教育課長　大塚久典
社会教育課副課長　福永知美
社会教育課主事　樋口　碧
埋蔵文化財専門員　渡辺　昇
整理作業員　梶　智美
整理作業員　福永明子

調査風景

3.　本発掘調査の経過

調査の方法

調査対象地は耕作地で主に水田であるが一部休耕地もあった。試掘確認調査の結果で調査範囲を決め、掘り下げは重機を用い、精査等においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。令和 2 年度は次年度も耕作を行うことから、埋戻し作業も行った。

調査経過

試掘確認調査の結果、本調査が必要とされた地点について令和元年度と令和 3 年度に本発掘調査を実施することとなった。本体工事の進捗に合わせ林谷遺跡の北側部分（1～3 区）が急ぐことから、分けて調査を行った。両年度とも兵庫県中播磨県民センターと福崎町教育委員会で委託契約を交わした。令和元年度の発掘調査工事は前期を株式会社マツダ建設に、後期を株式会社安西工業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。令和 3 年度は発掘調査・撮影・測量を株式会社マツダ建設に委託した。

令和元年度の調査は前期と後期に分けて発注した。前期は狐塚遺跡 1～3 区から着手し、次に林谷遺跡 1～3 区の調査を行った。令和元年 7 月 1 日（月）～ 11 月 7 日（水）の間で実働 36 日間を費やして行った。調査面積は 2,008 ㎡である。後期は林谷遺跡 4 区として 552 ㎡を調査した。ドローンと足場からの全景写真撮影・実測・断割り作業ののち、来季も耕作を行うことから埋戻し作業も行い調査を終了した。

令和 3 年度の調査は桜遺跡 3 区、桜東畑遺跡に引き続いて実施した。令和 3 年 7 月 19 日（月）～ 9 月 23 日（木）の実働 36 日間を費やして行った。林谷遺跡 5 区で調査面積は 1,540 ㎡である。令和 3 年度は本体工事が実施されることから埋戻し作業は行っていない。

令和 2･3 年度調査体制

調査主体　福崎町教育委員会
教　育　長　髙橋　渉
社会教育課長　松田清彦
社会教育課副課長　森　公宏
社会教育課係長　藤原　元
社会教育課主査　長谷川幸子
社会教育課主査　樋口　碧
埋蔵文化財専門員　渡辺　昇
整理作業員　梶　智美
整理作業員　福永明子

調査風景

整理作業員　原井川奈美
整理作業員　常陰ひとみ

4. 整理作業の経過

試掘確認調査・本発掘調査と並行して随時整理作業も実施した。土器洗浄や遺構図の調整などの作業は令和元・3年度に行ったが、それ以降の作業と報告書刊行は令和5年度に実施した。経費は発掘調査と合わせて兵庫県中播磨県民センターと委託契約を交わして実施した。

調査風景

1次調査・2次調査ともに高岡小学校と地元有志には現地見学会を実施したが、地元中心で開催したことから広く町民の方々に見ていただくことができなかった。1次調査資料については、令和3年1月16日～3月14日に福崎町立神崎郡歴史民俗資料館にて開催された令和2年度企画展「令和元年度埋蔵文化財発掘速報展」で紹介し、遺物・写真パネルを展示し、解説会も行った。2次調査資料も同様に令和4年度福崎町立神崎郡歴史民俗資料館企画展「発掘された福崎2021」で展示解説を行った。

令和5年度調査体制

調査主体　福崎町教育委員会
教育長　髙橋　渉
社会教育課長　木ノ本雅佳
社会教育課課長補佐　鷲尾進吾
社会教育課文化財係長　長谷川幸子
社会教育課主査　樋口　碧
埋蔵文化財専門員　渡辺　昇
整理作業員　梶　智美
整理作業員　福永明子
整理作業員　原井川奈美
整理作業員　常陰ひとみ

展示風景

5. 周辺の環境

林谷遺跡は福崎町高岡字林ノ谷周辺に所在する。福崎町域は市川の両岸に分かれて展開しており、市川の支流が流れ開析された谷を形成している。南側には隔絶はないが、他の3方向は地形的に隔絶しており、旧香寺町など旧神崎郡南半を含んだ地域が盆地となっている。林谷遺跡が存在する市川西岸の高岡は七種川によって開析された谷に位置し、尾根部は地質構造では丹波帯に属している。南側の中国自動車道沿いに断層があり、東西方向の交通路となっている。最大支流の七種川に流れ込む河川に大内川があり、大内川沿いに断層が存在するようである。谷地形は河川によって開析されたもので谷底平野になっており、周辺部は段丘である。林谷遺跡・前田遺跡・雨田遺跡は中位段丘にあたり、桜東畑遺跡などは低位段丘に存在する。

福崎町では旧石器時代からの遺跡・遺物が確認されているが、市川西岸では縄文時代からの遺跡

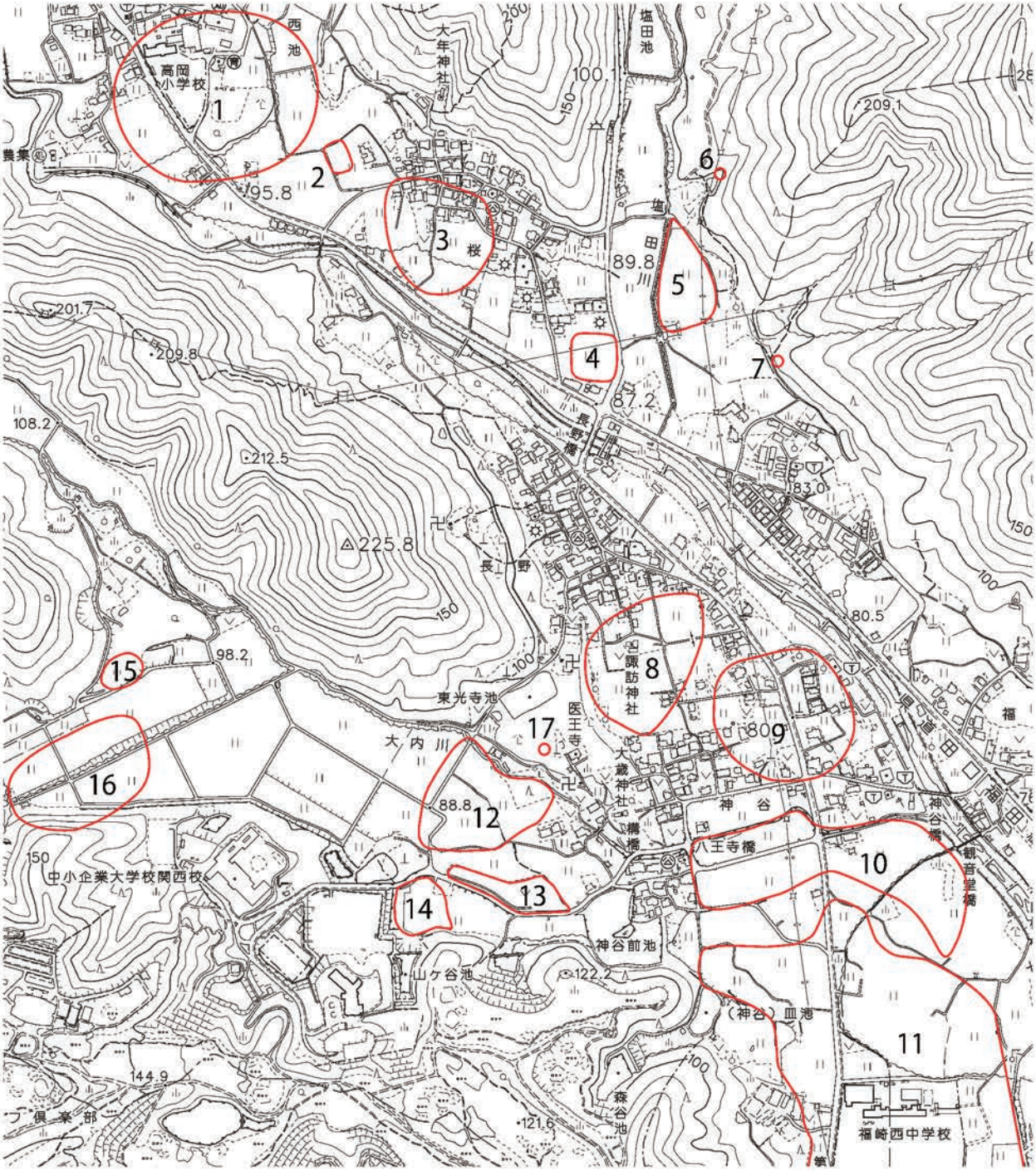


図４　林谷遺跡の位置と周辺の遺跡

1	**林谷遺跡**	2	桜竹之後遺跡	3	桜遺跡
4	桜東畑遺跡	5	狐塚遺跡	6	塩田山東２号墳
7	塩田山東古墳	8	長野諏訪神社周辺遺跡	9	下々通遺跡
10	観音堂遺跡	11	宮ノ前遺跡	12	神谷ヤブノハナ遺跡
13	前田遺跡	14	長野多イ谷遺跡	15	雨田遺跡
16	矢口遺跡	17	神谷古墳		

が知られている。高岡地区では桜の林谷遺跡で、石匙などの石器が採集されていたが、今回報告の調査で落とし穴が検出されている。弥生時代の遺跡も市川西側は明確でない。駅前の中溝遺跡で中期の溝が、山崎の朝谷遺跡で後期の土器棺が出土している。終末期の土器が宮ノ前遺跡・福田東田黒遺跡・西治下代ノ下モ遺跡や福田町田、馬田スガキで採集されている。西治下代ノ下モ遺跡では古墳時代になると集落を形成する。後期に製塩土器を保有している点も注目される。古墳は福崎町内で確認されているが、古相の古墳は高橋にある。高橋古墳群で早い段階に鉄剣が出土したことで知られている。箱式石棺を主体部とする6基以上の小円墳で構成される。今のところ福崎で最も古い古墳と考えられている。同種の古墳は東岸の妙徳山遺跡や大善寺裏山古墳の箱式石棺があるが、時期は明確でない。次の時期の古墳は相山古墳であるが、西岸では山崎所在の大塚古墳である。30 m前後の円墳で、長さ12 mを超す大型の横穴式石室を主体部としている。土器棺を出土した地点の隣接地に朝谷古墳群が築かれる。大塚古墳に続く時期の大型の石室を保有する1号墳（狐塚）が残存している。福田には東大谷古墳・宮山古墳・上垣内古墳・小山古墳の横穴式石室を主体部とする古墳があり、高岡には塩田山東2号墳・塩田山東古墳（桜谷古墳）・五郎が谷古墳が、山崎には馬ウ子古墳群や石棺出土古墳（山崎古墳群とされるが位置不明）、西治には三昧谷古墳群・数可ノ古墳、高橋には佐本古墳が存在する。馬ウ子古墳は谷奥部の逼塞したところに構築されている。山崎古墳群からは高室石で作られた石棺が出土している。それ以外にも複数の古墳があったとされるが、残存せず明確なことはわからない。神谷の医王寺にある神谷古墳がそれに続く7世紀に入る時期の古墳である。石室の高さが低くなり石室長が長くなっている。空間的には狭くなっており、末期の様相を示している。古墳時代の集落跡は前述した西治下代ノ下モ遺跡以外に今回報告する林谷遺跡や観音堂遺跡・宮ノ前遺跡で確認されている。市川東側では加治谷藪下五反畑遺跡をはじめ多く確認されている。

大塚古墳

奈良時代の遺構は矢口遺跡の掘立柱建物だけであったが、今回のほ場整備事業に伴う最近の調査によって高岡の各遺跡で調査されている。桜遺跡では近接した2時期の建物が並び、桜東畑遺跡では6棟の建物が検出された。桜東畑遺跡では工房跡と思われる同時期の竪穴建物も調査されている。製塩土器が各遺跡で出土していることが大きな特徴で、桜東畑遺跡では焼塩を行ったかと思われる焼土坑が確認されている。さらに鍛冶遺構も今回の林谷遺跡や神谷ヤブノハナ遺跡で確認され、鉄づくりも行っていることが判明した。遺物は全遺跡で確認されており、中世の遺物も同様に各地で広範に出土・採集されている。

桜東畑遺跡　焼塩遺構

Ⅱ　調査結果

１．調査の概要

調査は北側から１区とし、尾根部を１～３区、山裾部分を４・５区として実施した。工事進捗に合わせて北側から調査を実施し、１～４区を令和元年度に、５区を令和３年度に調査を行った。基本的に１面で行ったが調査区によっては２面の調査を行ったところもある。上面の遺構の大半は鋤溝などの耕作痕であるが５区のように中世の遺構を検出したところもある。

尾根部の調査では落とし穴が多く確認され、縄文時代の遺構群と考えられる。形状は楕円形が多いが円形・隅円長方形・不定形もある。中央に杭跡が確認できた土坑も多くある。上面には鋤溝が一部確認され、近世かと思われる井戸や新しい廃棄土坑も見られた。

山裾の調査区では古墳時代から近世に至る遺構を検出している。円形住居は形状からは古墳時代初頭以前と思われるが、時期を明確に示す遺物が出土していない。飛鳥時代にかけての切りあい関係があることから明確にできなかった。古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴建物と奈良時代の掘立柱建物・鍛冶炉が確認されている。中世に下る掘立柱建物とさらに新しい中世末の門跡、近世以降の耕作痕を調査した。

2.　遺構

1区

遺跡北端に位置する調査区で、面積は550㎡である。遺構残存部（谷部以外）の基本層序は第1層耕土、第2層にぶい黄褐シルト質極細砂、第3層が地山である黄褐シルト質極細砂である。第2層は層序としては大きく1層としたが、色調や礫包含の有無などに微妙な変化があり、細分しているところもある。

調査区北東部と西側に旧河道（谷部）が認められ、その間に遺構は残存している。検出した遺構は、溝・落ち込み・土坑・ピット・流路である。遺物は弥生時代後期から近世のものが出土しているが、少量である。西側旧河道（SR01）埋没後に築かれた遺構も3基あり、これらは新しい時期の遺構である。

溝（SD01）は1条検出している。調査区中央北側に位置しており、北東谷部（SR02）に切られており､南側にあるSX03を切っている。幅0.6～1.1ｍで長さ6.5ｍを測る。最も深いところで0.6ｍあるが平均的には0.4ｍ前後である。西側が浅く東側に流れている。断面形状は中央が深いレンズ状を呈している。

落ち込み（SX）は3基調査している。SX01は調査区中央に位置する不定形で大形の落ち込みで最大長5.1ｍを測る。中央部が最も深いが比較的平坦な形状で、中央で0.2ｍである。埋土は地山の2次堆積土で礫を含んでいる。SX02は南側の旧河道SR01の肩部に位置している。不定形の最大長1.55ｍ、深さ0.3ｍの落ち込みである。遺物は出土していないが北西肩部から炭が検出されている。SX03は調査区中央にあり、SD01に切られている。検出長4.4ｍで、それ以上の大きさである。検出幅は1.2ｍで深さは0.1ｍと浅い。

土坑は7基検出している。形状は円形・楕円形・不定形と変化がある。SK01は隅円三角形の平面形状で、底面は平坦で炭・焼土がやや多く含まれる。底や肩部に被熱の痕跡は認められない。最大長0.75ｍで深さ0.1ｍである。SK02は長さ0.8ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.15ｍの不定形のプランで断面は半球状で、上面に焼土が存在する。SK03は長さ1.5ｍ、最大幅1.05ｍ、深さ0.1ｍの中央が窪んだ不定形で逆台形の断面になっており、尾根筋に直交するように築かれている。SK04は長さ1.75ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍの不定形で浅く底面は平坦である。SK05は長さ1.8ｍの不定楕

円形の深さ 0.1 mで西側が深く掘り下げられている。1.2 m × 0.8 mの楕円形で、深さ 0.45 mを測る。断面形状は逆台形で東側肩部には地山土が崩落しており、埋土はオリーブ褐シルト質極細砂である。SK06 は長さ 1.2 m、幅 0.9 m、深さ 0.15 mの楕円形プランで底は平坦である。SK07 は東壁沿いで検出し一部調査区外に延びている。長さ 1.2 m、検出幅 0.9 m、深さ 0.4 mの不定円形で断面形状は逆台形である。尾根筋にあることと深さから SK05 とともに落とし穴の可能性を考えている。

2 区

1 区と農道を隔てた南西部に位置する 623 ㎡の調査区である。層序は基本的には 1 区と同じであるが色調はやや異なっている。谷部分は堆積土が増えている。南西部分の広い範囲が谷地形か旧河道で遺構面は残存しておらず、調査区の東半分に遺構面があり遺構を検出した。土坑・溝・ピットを確認している。

溝（SD01）は 1 条検出している。調査区中央を北西方向から南東方向へ直線に延びている。SK10 で途切れているが 29 mの長さがあり、西側へ続いており、幅は 0.2 ～ 0.3 mである。旧水田の溝の可能性が高い。

落ち込み（SX01）は調査区北西隅にある最大長 1.9 mの円形であるが、調査区西側に延びている。深さ 0.2 mで底は凹凸になっている。南側肩部だけ埋土が異なっている。

土坑（SK）は 20 基調査した。楕円形のものが多く、長方形・不定形のプランがある。SK02 は隅円三角形に近い不定形で南西辺は 0.5 mあり、最大長は 0.8 mを測る。残存度は悪く、部分的に残り 0.1 mと浅い。底は平坦でなく中央が高くなり、底にピットが認められる。径 0.1 mで深さ 0.3m である。杭跡であろう。SK03 は楕円形で長径 0.95 m、短径 0.5 mで深さは最大で 0.1 mである。SK04 は不定長方形で東西 1.2 m、南北 1.05 mを測り、底は平坦で深さ 0.3 mある。東肩部は地山が崩落したと思われる明黄褐細砂が堆積している。埋土上層はにぶい黄褐シルト質極細砂が、下層には明黄褐シルト質極細砂である。下層からは木片が出土している。底面中央に径 0.3 m、深さ 0.2 mの円形ピットが見られた。SK05 は長方形プランで長辺 1.7 m、短辺 0.8 m、深さ 0.1 mを測る。SK06 は不定形で最大長 0.55 m、深さ 0.2 mを測る。SK07 は SK06 の南西に隣接しており、最大長は 0.4 mである。SK08 は不定長方形で長辺 0.9 m、短辺は北側が 0.5 mで膨らんでおり、南側が 0.4 mである。断面は底が緩やかに弧状を呈している。深さは 0.15 mと浅く、弧状部分には地山土の 2 次堆積になり上層は灰黄褐層である。SK09 は不定楕円形で SK10 を切っている。長径 2.3 m、短径 1.35 m、深さ 0.25 mを測る。SK10 はやや歪な長方形プランである。長辺 2.0 m、短辺 1.5 m、深さ 0.25 mで底面は平たく底面中央に最大径 0.4 m、深さ 0.2 mのピットを有している。SK11 は最大径 0.9 mの円形を呈し深さ 0.6 mで断面は半球形で底は丸い。SK12 は最大長 0.6 m、深さ 0.15 mである。SK13 は楕円形プランで長径 2.6 m、短径 1.7 mで断面逆台形の深さ 0.25 m である。SK14 は最大長 0.6 m、短径 0.3 m、深さ 0.15 mである。SK15 は径 0.74 mの円形で深さ 0.15 mである。断面はレンズ状で中央が少し深く堆積している。底には炭層があり、その上に炭・焼土を多く含む褐灰極細砂層が広がり、中央部分のみ地山客土が見られる焼土坑である。床面は強くは焼けていない。SK16 は楕円形で長径 2.05 m、短径 1.25 m、深さ 0.25 mを測る。底は平坦で南東隅に最大長 0.7 mの不定円形の土坑が付設されている。深さ 0.15 mで底に焼土があり、上に炭層が堆積していた。焼土坑で埋土上層にも炭が混じっていた。SK17 は長さ 0.5 m、幅 0.2 m、深さ 0.15 mの長楕円形である。SK18 は南北 1.1 m、東西 0.9 mの歪な円形で深さ 0.45 mを測る。断面は逆台形で底は平坦である。SK19 は最大長 0.4 mで深さ 0.1 mを測る。SK20 は最大長 0.5 mで深さ 0.1 mを測る不定形である。

3 区

2 区南側の水田で面積 670 ㎡である。基本層序は耕土・床土の下に褐シルト質細砂、黄褐シルト質細砂、黄褐シルト質極細砂で、すべて堆積層で確実な地山は検出していない。東西に谷地形があり、そこには堆積層が続いているが、中央部分は黄褐シルト質極細砂上面で遺構を検出している。

検出した遺構は土坑・落ち込み・井戸・ピットである。

土坑（SK）は 28 基確認している。SK01 は北壁沿いにあり最大長 1.25 m、検出幅 0.5 mで深さ 0.15 mである。SK02 は最大長 0.3 m、深さ 0.15 mを測る不定円形である。SK03 は長径 1.2 m、短径 1.1 m、深さ 0.1 mで底は平坦である。SK04 は SK05 に切られており、幅 0.95 m、検出長 1.1 m、深さ 0.15 mを測る。不定長方形で底は丸い。SK05 は最大幅 1.1 mで長さ 1.9 mの楕円形である。SK06 は東壁沿いにあり最大長 1.05 m、幅 0.9 mの長方形かと思われる。深さ 0.2 mで底は平たい。SK07 は楕円形で長径 1.25 m、短径 0.7 m、深さ 0.15 mで底は僅かに丸い。SK08 も楕円形で長径 1.0 m、短径 0.55 m、深さ 0.1 mで底は平たい。SK09 は比較的大形の土坑で、隅円の台形で上辺 1.0 m、下辺 1.6 m、高さ 2.05 mを測る。深さは 0.1 ～ 0.2 mで底は平坦であるが凹凸がある。SK10 は楕円形で長径 1.05 m、短径 0.55 m、深さ 0.1 mを測る。SK11 は不定形で最大長 0.9 m、幅 0.5 m、深さ 0.15 mを測る。SK12 は隅円長方形プランで長辺 0.95 m、短辺 0.7 mで深さ 0.2 mである。断面は丸く中央より南側が深くなっている。中央に径 0.25 mの円形ピットが見られ、0.2 mの深さがある。SK13 は不定形で最大長 0.8 m、幅 0.7 m、深さ 0.15 mを測り、底は丸い。SK14 は楕円形で長径 0.8 m、短径 0.55 m、深さ 0.1 mで底は丸い。SK15 は楕円形で長径 1.35 m、短径 0.55 m、深さ 0.1 mで底は平たい。SK16 は 2 つの土坑が繋がっており、最大長 1.0 m、幅 0.4 mを測り、深さは北側が 0.15 mで底は平たく、南側が 0.1 mで底は丸い。SK17 は隅円方形で 1 辺 0.8 m、深さ 0.1 mで底は平坦である。中央に径 0.2 mの深さ 0.05 ～ 0.1 mの浅いピットがある。SK18 は隅円長方形で長辺 0.85 m、短辺 0.5 mで深さ 0.1 mである。中央やや西よりに径 0.2 m、深さ 0.15 mのピットがある。SK19 は楕円形で長径 1.1 m、短径 0.7 m、深さ 0.15 mで底は平たい。SK20 も楕円形で長径 0.95 m、短径 0.65 m、深さ 0.35 mで断面は逆台形で底は平坦でなく南側が深くなっている。中央やや南に径 0.2 m、深さ 0.15 mのピットがある。SK21 は卵形の平面形で長径 1.2 m、短径 0.8 m、深さ 0.4 mで断面は逆台形で底は平たい。中央に径 0.2 m、深さ 0.15 mのピットがある。SK22 は径 0.65 m、深さ 0.1 mで中央からやや西側に径 0.3 m、深さ 0.15 mのピットがある。SK23 は不定楕円形で最大長 1.5 m、最大幅 0.7 m、深さ 0.3 mで断面は逆台形である。SK24 は不定円形で径 0.85 m、深さ 0.3 mで底は丸くなっている。SK25 は楕円形で長径 1.0 m、短径 0.6 m、深さ 0.35 mで断面形状は逆台形であるが、底は丸みを持つ。SK26 も楕円形で長径 0.7 m、短径 0.45 m、深さ 0.35 mで底は平たいが北側の方が深くなっている。SK27 は東肩部が崩落しており、径 0.65 m、深さ 0.25 mで底は丸く中央に径 0.2 m、深さ 0.15 mのピットがある。SK28 は最大長 0.85 m、最大幅 0.6 mの不定方形で深さ 0.5 mを測る。底は平坦で中央からややずれて径 0.15 m、深さ 0.3 mのピットを有する。

落ち込み（SX）は 3 基ある。SX01 は調査区東壁沿いにあり、東側調査区外に延びている。最大長 5.7 m、最大深さ 0.4 mで西から東へ低くなっている。谷地形の上端部分の可能性が高い。SX02 と SX03 は近代の遺構で電柱などが埋められていた。

井戸（SE01）は北西部谷地形の肩部附近で確認された素掘りの井戸で径 1.3 mの円形であるが正円ではなく一部歪んでいる。深さは 2.3 mあり、水平堆積をしていた。埋土は還元状態でなかったが、形状から井戸とした。時期も明確ではないが、周辺に SX03 などの新しい遺構があり近代以降と思われる。

4区

丘陵下の平地部分の東側調査区である。調査面積は552㎡である。基本層序は第1層耕土、第2層床土、第3層暗褐極細砂、第4層褐極細砂、第5層が地山であるにぶい黄褐シルト質極細砂である。

検出した遺構は竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・落ち込み・溝である。

竪穴住居（SH01）は調査区中央南寄りで検出している方形住居である。北東部をSX01に、北西部をSK03に切られている。逆に南東部に延びるSX02を切っている。南西辺3.1 m、北西辺3.6 m、北東辺は残存部3.0 mで復元すると3.5 mで、南東辺は推定で3.1 mを測り、最大の深さは0.25 mである。南東辺は切られていることから明確ではないが緩やかに弧を描いているように思われる。他の3辺は直線に近い。床面には10基のピットがあるが、後世の柱穴も含まれている可能性が高い。SX01内のピットもどちらの時期に入るか断定しにくいが、埋土の僅かな差からSH01に帰属すると考えている。4本柱の上屋構造と思われる。東の柱穴が最も大きく径0.3 m、深さ0.3 mを測る。中央付近だけ南北に深く掘られている。他の柱穴は0.2 m未満で深さ0.3 mである。柱間の心々間距離は同一ではなく差異がある。南西辺は3.2 m、北西辺は3.0 m、北東辺は2.8 m、南東辺は2.9 mと方形でなく歪になっている。平面形態は南東柱穴だけ楕円形になり最大長0.6 mで南側に大きくなっている。他は径0.3 mを測る円形で、深さは0.2 m前後である。ほぼ中央にもピットがあり、最大長0.6 mを測る歪な隅円方形の平面プランを持ち、深さ0.25 mを測る。北西辺中央に竈が築かれている。壁より北側に0.4 m張り出した最大幅1.3 m、長さ1.8 mを測る。壁と礫下との高低差は0.3 mである。平面形は外側が広いイチジク形で、北西辺上内側に長さ0.5 m、厚さ0.2 mの礫を据え、その内側に長さ0.8m、幅0.6 m、深さ0.15 mの楕円形の土坑を掘り下げる。その土坑から南は1段高くなり0.1 mの深さの掘り込みが0.3 m延びる。この部分には深く下げられた土坑中層の焼土・炭混じりの暗赤褐層が延びていることから、焼成後に掻き出した層であろう。暗赤褐層の上には焼土層があり、北側礫下部分だけ炭が堆積している。礫は強く被熱しており、礫の下からは土師器甕破片が出土している。

掘立柱建物（SB）は5棟確認した。SB01は調査区北側で検出した2間×2間の側柱建物である。主軸方向はN30°Wである。SB02は調査区東側で検出した側柱建物で東側調査区外へ延びている。南北2間であるが1間が3 mと柱間が広い。東西は1間しか調査しておらず、2.8 mを測る。主軸方向はほぼ南北を向いている。SB03は調査区中央で確認し、SH01を切り北側の一部と空間を共有している。南北2間、東西3間の側柱建物である。主軸方向はSB02と同じくほぼ南北を向いている。柱穴は最大0.4 mで柱痕跡は0.2 m前後であるが、大きな柱痕跡は0.25 mを測る。深さも南西隅の柱穴で0.5mになる。SB04とSB05は調査区南西に位置し、切り合い関係のある住居である。SB04は南北3間で東西3間以上の側柱建物で主軸方向はN26°Wである。SB05は南北3間で東西4間以上の側柱建物で主軸方向はN35°Wである。前後関係は主軸方向からSB04の方が古いかもしれないが確実ではない。柱穴の切り合いや建て替えは認められない。

落ち込み（SX）は2基調査している。SX01は調査区中央にあり、SH01を切っている。南西コーナーはSK04に切られている。南北4.34 m、東西3.66 mの長方形プランで、底面は平坦で深さ0.2 mでピットなどの付属施設は確認されなかった。ピットを検出しているが、SB03の柱穴で、他のピットもSX01に伴う遺構とは断定できない。底面の一部に薄く暗褐層が認められるが、埋土は褐極細砂で一気に埋まっている。先代の遺物もやや多めに混じるが出土遺物から鎌倉時代の遺構と思われる。SX02は調査区中央西側に位置しており、SH01に切られた遺構である。SH01深度より深いことから床面に遺構が残っており、全体のプランは確認できる。不定形の楕円形プランをしており、最大長5.7 mで最大幅3.3 mを測る。

土坑（SK）は4基確認している。SK01は北東部分に位置しSB01に切られている。最大長0.9

mの楕円形で深さ0.15 mを測る。SK02は北壁沿いにある不定形の土坑で調査区北側に延びている。最大幅2.65 mで検出長3.0 mである。深さは最大0.3 mで西側の方が深くなっており、底は平坦でなく凹凸がある。埋土に礫が入っている。SK03はSH01北西隅を切っている南北に長い長方形の土坑である。幅1.1 m、長さ2.35 m、深さ0.15 mを測る。SK04はSX01南西コーナー部に位置する楕円形の土坑で、SX01を切っており、切り合い関係から最も新しい遺構である。長径2.05 m、短径1.1 m、深さ0.2 mを測る。

溝は1条検出している。SD01で弧状を呈しており、SX01に切られている。幅0.25～0.3 mで、長さ0.8 mを測る。壁溝の可能性も残るが断定できない。

5区

遺構面は2面あり、東半のみ上下2面の調査を行った。検出した遺構は、竪穴建物・掘立柱建物・柵・落ち込み・溝・土坑・ピット・旧河道・耕作痕である。遺物は弥生時代中期から近世のものが出土しているが、大半は奈良時代の遺物である。

層序は耕土・床土の下に、にぶい黄褐シルト質中砂、黄褐シルト質中砂、黒褐シルト質中砂が堆積し、地山である黄褐シルト質細砂になっている。地山上の黒褐層は弥生時代～古墳時代の包含層である。東半上面の遺構は第3層上面で確認し、それ以外はすべて地山面で検出した。北側から南東部分には床土の下に黒褐円礫層が存在する。ある時期の七種川の洪水堆積層である。

〈上層の遺構〉

調査区東半のみで調査した。掘立柱建物・柵・ピット・旧河道・焼土坑・耕作痕を検出した。遺構番号は第1次調査の4区から続けている。上層の面積は960 ㎡である。耕作痕は全体に及んでいるが、北側で明瞭に検出した。東西方向を基本とするが、一部斜め方向の鋤溝も見られた。面的に調査していないが、西半調査区南側でも鋤溝を検出している。

掘立柱建物（SB06）は東半中央で検出した。北東部分は旧河道で削平されたか検出されなかった。東西2間、南北3間の側柱建物である。東西4.8m南北6.0mを測る。主軸方向はN4°　Wとほぼ南北を向いている。

柵（SA03）は大形のピット2基が2.8mの間を取って東西方向に並んでいる。径0.8mと大きく深さも0.6mと深く底面に礎板となる石材を敷いている。重量感のある柱が載っていたと思われ、2基のピットの延長上や直交方向に同様のピットが確認されていないことから、掘立柱建物とは思われないので柵としたが、礎板の石材があり上屋構造に重量感があることを考慮すると門かと思われる。主軸方向はSB06と同じN4°　Wである。

旧河道（SR01）は調査区東半中央を南北に流れている。北側は狭く南側は幅を広げている。中央付近から屈曲し幅を広げており、部分的に分流した細い流れも生じている。旧河道には前代の遺物も包含している。南端近くでは弥生中期の赤色顔料が塗布された台付壺も出土している。

焼土坑は北壁で検出した。最大幅1.6 mで深さ0.3 mを測る。坑内には炭が充満している。遺物は出土していない。他にも調査区南東部と中央部で焼土を検出している。焼土だけで土坑など遺構は確認していない。南東部のものは隣接して炭も認められた。焼土は厚さ0.12mあり、最大幅は0.65 mを測る。

旧河道後に全体に耕作地になったようで、東西方向の鋤溝が見られた。特に地形の高い北側は明瞭に検出できたが全体に及んでいる。他にピットと溝を確認しているが、溝は旧河道が分流したものと思われる。ピットは性格不明である。

〈下層の遺構〉

竪穴建物（SH）は5棟確認した。SH02は北東隅で検出し、旧河道によって削平されている。

壁溝とピットが残っている程度で残存状態は悪い。特に南西部と北東部は旧河道で削平され残存していない。１辺６ｍの方形プランで主柱穴は４本柱である。SH03 も旧河道で大きく削平され、壁溝の一部しか残っていない。１辺 3.5 ｍと小型の住居である。SH04 ～ 06 は調査区北西部で検出した切り合い関係のある建物である。SH06 が古く、他の２棟に切られている。SH04 は短辺 4.1 ｍ、長辺 5.7 ｍを測る長方形プランである。西壁沿いのみ壁溝が存在する。北壁中央に炉があり、４本柱と思われる。中央西寄りに大形の焼土坑がある。東西 1.8 ｍ、南北 1.3 ｍの楕円形で中央部分に亀甲状を呈し強く被熱した厚い焼土層が認められる。SH05 は東西 6.5 ｍ、南北 6.3 ｍの正方形に近いプランである。深さは最大で 0.2 ｍしか残っていない。炭化材を検出しており、焼失住居である。SH06 はやや歪であるが径９ｍの大形円形建物である。最大の深さ 0.1 ｍと残存状態は悪い。主柱穴は明確でないが、中央部分にピットが認められないことから弧状に８本あったのではないかと思われる。北側に方形の張り出しがある。壁溝は１周巡っていないが、南側の一部のみ確認された。中央北西部に焼土坑がり、不定形で最大長 3.2 ｍを測る。全体に焼けているが、２基の箱型炉が築かれている。小鍛冶炉と思われる。

掘立柱建物（SB）は７棟調査した。SB07 は調査区北東部で検出した２間×３間の総柱建物である。主軸方向は N5°　E で、東西 4.2 ｍ、南北 3.8 ｍを測る。総柱であるが、中央の２本は細めである。大きな建替えはないが柱痕跡が２か所ある柱穴が１基あるので小規模な建替え（修理）はあったようである。SB08・09 は中央南側で確認した。SB08 は東側が旧河道によってか、元の水田の境に位置していることから東側水田面の際に削平されたかで、東側が残存していない。主軸方向は N25°　E で他建物とは異なっている。側柱建物で、検出した規模は東西 2.4 ｍ、南北 4.8 ｍを測る。SB09 は SB08 の西側にある N24°　W の主軸方向を持つ側柱建物である。２間×２間で東西 4.0 ｍ、南北 3.8 ｍを測る。

SB10 は主軸方向が N30°　W の側柱建物で大形である。南北４間で 9.6 ｍ、東西３間 7.2 ｍである。SB11 は SB10 の西側にあり、主軸方向も N24°　W であることから同時期と思われる。南北 5.4 ｍの３間、東西６ｍを測る２間の側柱建物である。SB12 は調査区北側に延びている東西３間の東西棟と思われる側柱建物である。北側は山裾に旧河道があり削平されている可能性が高く、山裾までの距離が迫っていることから、南北２間であろうと思われる。残存長は１間 2.2 ｍである。東西梁行は 6.6 ｍを測る。主軸方向は N24°　W で SB09 と同じ主軸を持つ。SB13 は調査区中央近くで確認された東西２間×南北３間の側柱建物である。東西 3.4 ｍ、南北 6.4 ｍで主軸は N4°　W である。

旧河道（SR）は調査区東半中央を南北に流れている。上層で確認した旧河道と同一で下層で新たに検出した河道もある。平面的に別なので SR02 ～ 04 としたが、SR01 中層の一部を含めて同時期の旧河道と思われる。SR01 下層は古墳時代以前で、中層は奈良時代、上層は奈良時代以降であろう。中層だけは時期幅があり、掘立柱建物の前後に流路が存在していた。

落ち込み（SX03）は調査区中央で SB10 の南西部に位置する。最大幅 1.7 ｍで長さ 5.5 ｍを測る溝状の落ち込みである。深さは 0.15 ｍと浅い。

土坑（SK04）は SX03 の延長上にある最大長 1.3 ｍの不定形の土坑である。遺物も出土せず、性格は不明である。

鍛冶炉（SU）は SH06 の床面で検出したが、後世の遺構と考えている。調査時は竪穴建物に伴う遺構と考えて南炉と北炉としたが、遺構の形状やその後の観音堂遺跡の炉跡の例などから奈良時代の遺構と考えている。竪穴建物の堆積土がほとんどなく切り合い関係は明らかにできないものの、住居・鍛冶炉という遺構の性格から判断した。

鋤溝を南西部で検出したが、下層面で検出したが上層の遺構である。主軸方向も東半上層と同じく東西方向の鋤溝である。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物はコンテナ 14 箱と多くはない。SH01 からまとまって出土した以外の遺物量は少なめである。土器が大半で、石器・金属器が 1 点ずつ出土している。土器は須恵器・土師器・陶器で製塩土器も出土している。

SH01 出土土器（1 ～ 29）

1 ～ 10 は須恵器で、1 は杯蓋で天井部は丸く体部は内湾する。端部は生乾き時に触ったのか波状で歪になっている。自然釉付着。2 ～ 8 は杯身で、2 ～ 5 には立ち上がりがある。2 は自然釉がかかり胎土に小石粒を含んでいる。受部は内湾し、立ち上がりは内傾ぎみだが僅かに外反する。ﾛｸﾛﾅﾃﾞ強くやや歪である。3 は底面が平たく未調整である。重ね焼き痕が認められる。立ち上がりは低く外反する。受部は短く外傾し端部丸い。4 は緑色の自然釉がかかっており、立ち上がりは外反する。底面にはヘラ記号（一）が認められる。5 は焼成が甘く、2 次焼成を受けている。受部外面に煤が付着している。立ち上がりは短く外反し端部丸く尖る。6 は立ち上がりのない杯 G である。不安定な平底から体部内湾し端部は直立気味に尖る。変化点に甘い稜を有し端部は薄い。逆に底部の器壁は厚い。7 は内湾する体部で口縁部は残存していない。口径の大きさからは立ち上がりのある杯 H と思われる。外面に自然釉が付着している。8 は杯部の高さが低く口径が大きいことから高杯の可能性がある。内湾し端部丸い。9 は壺で口縁部は外傾し端部丸い。肩部は丸く体部は内湾する。内面はﾛｸﾛﾅﾃﾞで粘土紐の継ぎ目を残す。器壁は厚く石粒を少量含む。10 はやや大きめの口縁部である。口縁部は外傾し端部外に開き角張る。器台か皿かと思われる。

11 ～ 29 は土師器で、11 ～ 14 は高杯である。11 は杯部筒部上部のみ僅かに残っている。中空の筒部でﾕﾋﾞ成形によって杯部と接合している。杯部は浅く端部は丸く納める。外面は 2 次焼成を受けている。12 も内湾する杯部で端部は尖り気味である。器表は剥離しており、小石粒を含んでいる。筒部の接合は 11 と同じ技法でﾕﾋﾞ痕が顕著に残っている。13 も同様の技法で接合したと思われるが、杯部底面に刺突痕が見られる。形態も内湾する杯体部で砂粒含むなど共通している。14 は一部を欠くが完形に近い。杯部は内湾し端部丸い。筒部は裾広がりになり接合部が細くなり、内面に絞り目が見られる。裾部は水平に近く端部丸く納める。筒部と杯部との接合部は指圧痕が多く見られ、砂粒多く含む。15 は内湾する体部で端部内傾し尖る鉢である。下膨れで外面に黒斑が認められる。粘土紐の継ぎ目があり、小石粒多く含む。2 次焼成を受けている。16 は把手付きの鉢で内湾する体部で丸底である。口縁部は内湾し端部尖る。把手は断面円形で先端を欠いているが先が湾曲して尖るタイプであろう。17 ～ 23 は甕である。17 は小形で内湾する球形の体部で短く内湾する口縁部である。外面は縦方向のﾊｹ整形で内面はﾕﾋﾞ成形である。口縁部内面はﾊｹ整形ののちﾖｺﾅﾃﾞ仕上げである。2 次焼成を受けている。18 は最大腹径が下にある内湾する体部で口縁部は外傾し端部丸い。粘土紐の継ぎ目明瞭に残り、内面はﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ調整で、外面はﾊｹ整形である。19 は内湾ぎみで端部尖る。丁寧なつくりで外面は細かいﾊｹ整形で口縁部はﾖｺﾅﾃﾞ仕上げである。20 は外傾する口縁部で端部角張りぎみで強いﾖｺﾅﾃﾞである。21 は内湾する口縁部で中央部分が厚くなっている。強いﾖｺﾅﾃﾞで外面に凹凸が認められる。端部は内側に尖らせた端面になっている。22 は強く被熱した内湾する体部から外反する口縁部になる。口縁部はﾖｺﾅﾃﾞで端部は丸い。体部外面は縦方向のﾊｹ整形である。23 は緩やかに内湾する体部でﾕﾋﾞ成形ののち外面は縦方向のﾊｹ整形で、内面は横方向のﾊｹ整形を施す。口縁部は外傾し端部丸くﾖｺﾅﾃﾞで仕上げる。24 ～ 28 は甑である。24 は内湾する口縁部で端部角張る。ﾕﾋﾞ成形ののちﾅﾃﾞ仕上げで、砂粒多く含む。口縁端部下面が強いﾖｺﾅﾃﾞによって浅く凹んでいる。25 は僅かに内湾する体部でﾕﾋﾞ成形ののち内面はﾍﾗｹｽﾞﾘ、外面はﾊｹ整形である。端部は丸く砂粒を多く含む。26 は底部で内湾し端部丸い。ﾕﾋﾞ成形のの

ち内面はﾍﾗｹｽﾞﾘ、外面はﾊｹ整形である。27 は器高の低い甑で 1 対の把手を有する。器高中央に平面形は三角で外反し端部が尖る把手がある。底面は平坦と思われ、端部は丸く確認されるが蒸気孔の形状は不明である。ﾕﾋﾞ成形ののち外面は縦方向のﾊｹ整形、内面はﾍﾗｹｽﾞﾘが施される。口縁端部は角張り、端部周辺もﾖｺﾅﾃﾞで仕上げる。28 は把手部でﾕﾋﾞ成形によって体部に付け斜め不定方向のﾊｹ整形を加える。把手自体もﾕﾋﾞ成形で平面は三角で外反する。28 もやや長めである。29 は竈で接合部はないが、大形で口径 21 ㎝、裾部径 39.4 ㎝、器高 35.3 ㎝に復元される。径の割に比較的器高のある製品である。裾端部は角張り、口縁は丸く、体部は内湾し粘土紐が明確である。特に内面は顕著である。口縁から 10 ㎝下に断面台形の突帯が付加されている。庇は残存していないが、端部に庇下端を貼り付けた状態が見られ一般的な庇が存在していたと思われる。外面は縦方向のﾊｹ整形で上部は不定方向に整形を繰り返している。内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭である。

SH02 出土土器（30）

土師器甕口縁部で端部丸い。ﾖｺﾅﾃﾞ仕上げで、外面は強く施されたことにより器表に凹凸がある。磨滅顕著である。

SH04 出土土器（32 ～ 42）

32 ～ 39 は須恵器である。32 ～ 35 は杯身で､32 の底部は不安定な平底で体部にかけて内湾する。ﾛｸﾛﾅﾃﾞで底面は未調整である。立ち上がりは短めで外反し端部尖る。受部は内湾ぎみに上方へ延びる。33 は立ち上がりのない内湾する体部で端部丸い。歪んでおり、外面火襷状になっている。34 は体部途中で僅かに屈曲し変化する。ﾛｸﾛﾅﾃﾞで端部丸い。35 は僅かに内湾する底部で体部は外傾する。口縁部は残っていないが、立ち上がりの残る杯 H と思われる。36 は杯蓋で天井部平坦で口縁部外傾し端部丸い。37 は杯身で高台を有する杯 B である。低い端部が内外に肥厚する断面台形の高台で、底面は平たく、体部内湾する。38 は丸底の壺底部で、外面は全体に自然釉が付着している。小石粒も多く付いている。39 は平瓶で口縁部を欠いている。肩部は丸くなり稜線は持たない。底部は下膨れの丸底で器壁厚めである。

40 ～ 42 は土師器である。40 は内湾する甕口縁部で端部内側に尖らせている。内面は細かいﾊｹ整形で強く焼けている。くの字口縁であるが内外ともに明瞭な稜線は持たない。41 は磨滅著しい内湾する口縁部で端部丸い。プロポーションから器台の上台と思われる。2 次焼成を受けている。42 は脚台部で製塩土器であろう。脚台Ⅲ式で内湾する脚台で中実になっている。

SH05 出土土器（43）

土師器甕口縁部で僅かに外反し端部角張り、1 条の沈線を有する。内面は粗いﾊｹ整形からﾖｺﾅﾃﾞ仕上げである。頸部外面はﾕﾋﾞ成形の痕跡が残る。

SH06 出土土器（31・44 ～ 47）

31 は須恵器杯身で内湾する体部から口縁部である。底は僅かしか残っていないが、平底に近いと思われる。重ね焼きの痕跡が残っている。

44・45 は須恵器で、44 の器種は不明だが蓋と思われる。径 3 ㎝の大きなつまみで、上面は平坦である。天井部は内湾し段状の変化点を持って口縁部に延びている。ﾛｸﾛﾅﾃﾞである。45 は杯で内湾する体部から口縁部で端部尖る。重ね焼きの痕跡残りシャープなつくりである。46・47 は製塩土器で、口縁端部を丸く仕上げている。ﾕﾋﾞ成形で一部ﾅﾃﾞ調整を加える。小石粒や砂粒多く含み、器表の剥離が見られる。口縁端部は肥厚し、体部は内湾する。46 の口縁部の形状は内傾するが、47 は直立ぎみで上方向に延びる。

SB 出土土器（48 ～ 53）

48 は SB01 出土の大きめの土師器皿で不安定な平底で内湾し端部丸い。ﾕﾋﾞ成形ののち口縁部はﾖｺﾅﾃﾞで仕上げる。49 は SB02 出土の須恵器杯 A である。平底から体部は内湾し端部反り気味で

丸く納める。重ね焼きの痕跡が認められる。50 は SB05 出土の管状土錘で半分程度残存している。中央部の幅が広く端部が細くなるもので黒斑が見られる。51 は SB07 出土の須恵器杯 A 底部である。ﾛｸﾛﾅﾃﾞで底部未調整である。平底から外傾する体部になる。52 は SB10 出土の須恵器杯 B で、器壁の色調は赤褐色で器表とは異なっている。高台は断面方形で外側に開いている。底面は平たく体部は外傾し端部尖り気味である。砂粒が比較的多く含まれる。53 は SB11 出土の土師器杯もしくは椀底部で磨滅著しいが回転台土師器と思われる。平底から内湾する体部で、2 次焼成を受けている。

SA01 出土土器（54）

土師器甕口縁部で磨滅している。くの字口縁で頸部稜線は甘い。端部は角張り、端面に 1 条の凹線を有する。外面はﾀﾀｷ成形からﾅﾃﾞ調整である。

ピット出土土器（55 ～ 68）

掘立柱建物に復元できなかったピットから出土した遺物である。55・56 は P7 出土の土師器皿でﾕﾋﾞ成形である。55 はﾖｺﾅﾃﾞ仕上げで、56 はﾅﾃﾞ調整である。56 は大形で 2 次焼成を受けている。57 は須恵器椀口縁部で重ね焼きの痕跡が残っている。内面には須恵器片か粘土塊が付着しており、有機質も付着している。内湾し端部肥厚し角張っている。58 は製塩土器で外傾し端部丸く、端部下が厚くなっている。ﾕﾋﾞ成形で小石粒多く含んでいる。59 ～ 61 は須恵器椀でﾍﾞﾀ高台の糸切り底である。59 はﾛｸﾛﾅﾃﾞ強く器表の凹凸が顕著である。体部内湾し口縁端部は丸く、重ね焼きの痕跡が残る。60 のﾍﾞﾀ高台は少し高く体部内湾する。61 は重心が低く下膨れの内湾する体部である。62 は須恵器杯蓋天井部で口縁部を欠く。天井部はﾛｸﾛｹｽﾞﾘを施しており、平坦すぎることから皿などの底部の可能性もある。63 は須恵器杯 A で平底から体部は外傾する。重ね焼きの痕跡が残る。64 は土師器杯身で平底から体部は外傾し口縁部は僅かに反って丸く納める。ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ仕上げである。65 は体部の破片であるが、稜線を有していることから須恵器稜椀と思われる。胎土は特に精良というわけではない。66 は土師器椀底部で低いﾍﾞﾀ高台である。赤色顔料を塗布している。67 は小形の須恵器杯身で、内湾する体部で端部外側に尖らせている。68 も須恵器杯身口縁部で端部丸く、重ね焼きの痕跡が残る。

SX01 出土土器（69 ～ 81）

69 ～ 71 は須恵器で、69 は古墳時代の高杯杯部である。外傾し端部は丸く、2 条の凹線を持っている。自然釉が付着している。70 は強いﾛｸﾛﾅﾃﾞで外面に凹凸ができている椀である。外傾し端部近く肥厚し端部丸く、重ね焼きの痕跡が見られる。71 は捏鉢で内湾する体部から口縁部上方へつまみ上げている。魚住焼で重ね焼きの痕跡が残る。14 世紀で器高が低いことから後半と思われる。

72 ～ 78 は土師器で、72 は小皿である。ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ調整している。73 は甑口縁部と思われ、直立ぎみである。端部は角張り、内面は少し凹んでいる。粘土紐の継ぎ目が見られ、外面は縦方向のﾊｹ整形である。内面の器表が剥離しているが、ﾊｹ整形かと思われる。74 ～ 78 は甕で、74･75 は、くの字口縁で口縁部外傾し端部角張る。砂粒多く含み表面磨滅している。内外面ともにﾊｹ整形と思われるが剥離のため明らかではない。76 ～ 78 は中世に下るもので、口縁端部が肥厚している。砂粒多く含み口縁部はﾖｺﾅﾃﾞである。77 は体部外面平行ﾀﾀｷ成形で煤付着しており、鍋の方が良いかもしれない。

79 ～ 81 は陶器で、79 は備前焼甕口縁部で端部折り曲げて肥厚し、ﾛｸﾛﾅﾃﾞである。80 も折り曲げて端部肥厚させる無釉陶器である。81 は輪高台付きの底部で内湾する甕である。高台は外側に開き端部尖る。石粒多く見られ、作りも丁寧とは言えない。

SK01 出土遺物（82 ～ 86、S1）

82 ～ 84 は土師器小皿である。ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ調整を加えている。83 は体部が屈曲するての字

口縁の皿である。84 も体部中央で変化するが稜線は持たず、端部肥厚し丸い。85・86 は須恵器捏鉢で、85 は口縁部で端部内側につまみ上げて端面になっている。重ね焼きの痕跡が見られ、焼成甘く生焼けである。体部は僅かに外反する。残存部端が僅かに変化しているので片口付近の口縁部と思われる。86 は底部で不安定な平底で体部内湾する。S1 は砥石で裏面は台との接合面の滑り止めとなる刻みが施されている。粘板岩で斜め方向にも擦り目が見られる。薄くなっており、長期間使用されたものであろう。

SR01 出土土器（87・88）

87 は弥生後期初頭の甕口縁部である。外反し端部肥厚する。端面に 3 条の凹線が施される。ﾖｺﾅﾃﾞで頸部は明瞭な稜線を持たない。砂粒多く含む。88 は奈良時代の須恵器杯 A で、平底で体部内湾ぎみに延びる。外面は火襷が見られる。

SR02 出土土器（89 ～ 91）

89 は奈良時代の須恵器杯 A 底部で不安定な平底である。外傾する体部から口縁部は反りぎみに尖る。重ね焼きの痕跡と火襷が見られる。90 は須恵器椀口縁部で内湾し端部丸い。ﾛｸﾛﾅﾃﾞで砂粒含む。91 は高台を有する椀で、体部内湾し口縁部は僅かに外反し端部下はﾛｸﾛﾅﾃﾞによって凹んでいる。輪高台は外側に開き端部丸い。内面は堆積時の有機質が付着している。

SR03 出土土器（92 ～ 105）

92 は弥生土器無頸壺で高杯同様の筒部が付加されるもので裾部は残存していない。筒部は本体に付けており中空で直線的に延びる。口縁部は水平に折り曲げて形成し、端部は角張り 1 条の凹線が見られる。体部は直線的に外へ広がり接合面でもある明瞭な稜線を持って内湾気味の体部下半に続く。93 ～ 95 は土師器杯で赤色顔料を塗布している。93 は内湾する体部で端部は外側に反っている。砂粒含み他の 2 点に比べて胎土は粗い。94 は内湾ぎみで端部丸い。95 は未調整の平底から内湾する体部に続く。96・97 は須恵器杯 A で平底から体部は外傾する。底部と体部の稜線は甘く、色調が異なる。96 は濃い目の灰色で稜線に一部ﾍﾗｹｽﾞﾘを施す。97 は灰黄色である。98・99 は須恵器蓋で 98 は屈曲する口縁部で端部肥厚する。99 は天井部平坦で内湾する。100 は須恵器杯 B で平底から体部との明瞭な稜線を有さずに外傾する体部になり、口縁部は外反し端部丸い。高台は外へ開き、端部両側に肥厚し中央が凹線状に凹んでいる。外面に淡い釉がかかっており、高台部にも付着している。101 は須恵器杯 B で外に開く断面方形の高台が付く。102 は土師器杯底部で平底から外反する体部に続く。器壁は薄く、ﾐｶﾞｷが見られる。103・104 は製塩土器でﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ調整している。磨滅顕著である。105 は土師器甕でくの字口縁である。頸部外面に明瞭な稜線を有さない。外面にはﾕﾋﾞ成形が残り、体部には縦方向のﾊｹ整形が施される。口縁端部は上方へつまみ上げて端面になっている。

包含層出土遺物（106 ～ 127、F1、S2）

106 ～ 111 は奈良時代の須恵器である。106 は蓋で天井部は内湾し端部は下方につまみ上げている。107 は杯で口縁部周辺はﾛｸﾛﾅﾃﾞが強い。108 は皿で底部は大きく平底でﾍﾗ切りである。体部は内湾し口縁部は外反し端部尖っている。重ね焼きの痕跡が認められる。109 は杯口縁部で外傾し端部丸い。色調は白っぽい。110 は内湾する体部から丸い端部になり、重ね焼きの痕跡が残る杯である。111 は稜椀と思われる。稜線部分の体部破片で、口縁部へは僅かに外反する。径は大きくはない。

112 ～ 115 は土師器で、112 は平底の椀底部で体部は外反する。底面にﾍﾗ記号の可能性もある弧線が 2 本底部から体部にかけて見られるが、工具痕かもしれない。粘土紐の継ぎ目は明瞭でﾕﾋﾞ痕跡が認められ、砂粒含む。113 はﾕﾋﾞ成形された把手部である。平面形は歪で外反し先はあまり尖らない。甑の把手と思われる。上面は皿状に丁寧に仕上げるが、下面は強いﾅﾃﾞ成形が見られるなど未調整に近い。114 は甕口縁部で頸部の稜線は有さない。ﾕﾋﾞ成形で頸部を作り端部周辺はﾖｺﾅﾃﾞ

仕上げである。端部は角張り下方につまみ出している。体部内面はﾍﾗｹｽﾞﾘによって稜線を作っており、小石粒を含んでいる。115 はほぼ完形のﾖｺﾅﾃﾞで仕上げられた器高の低い小皿で、平底でﾍﾗ調整を加えている。外面は赤い色調を呈している。

116 ～ 123 は中世の須恵器である。116 ～ 118 は突出平底で糸切り底の椀で、116 は粗い糸切りで中央にﾍﾗ痕跡が認められる。体部は内湾し、底部内面はﾕﾋﾞ痕跡が残る。搬入品の可能性がある。117 も体部は内湾しﾕﾋﾞ成形である。118 は体部内湾し中央部で変化点を有し、そこに沈線を持ってそこから強いﾛｸﾛﾅﾃﾞを口縁部にかけて施している。口縁端部は外反し丸く納める。重ね焼きの痕跡が残り砂粒含む。119 は甕底部で平底から体部外反する。ﾕﾋﾞ成形からﾛｸﾛﾅﾃﾞであるが、外面は歪で粘土紐の継ぎ目やﾕﾋﾞ痕跡が残る。120・121 は捏鉢口縁部で重ね焼きの痕跡が残る。120 は内側につまみ出し、121 は内外に肥厚する端部を持つ。ﾛｸﾛﾅﾃﾞで 120 は内湾し、121 は内傾する。122 は底部であるが古代の杯かもしれない。123 は捏鉢底部で平底から体部内湾する。

124 は瓦質鍋で端部角張り内側に尖らせている。表面磨滅している。125 は灰釉椀で内湾する体部に外傾する高台が付く。

F1 は鉄器で器種は明確にできないが、断面方形の板状で先は片側に尖っている。刃先は明瞭でなく鈍い。時期は不明で鏨などであろうか。以下は写真だけであるが、S2 は蛇紋岩製の敲き石と思われる。片側が尖っており、頭部に凹みが 2 ヶ所認められ使用痕と思われる。全体に擦痕が認められるが、石材が軟質であることからローリング痕の可能性もある。126・127 は縄文土器片で磨滅している。126 は表裏縄文かと思われ、127 は刺突文状の施文が見られる。

製塩土器

表１　土器観察表

番号	種別	器種	遺構	法量（ｃｍ）				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
1	須恵器	杯蓋	4区　SH01下層	11.6	残3.9			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
2	須恵器	杯	4区　SH01　床面北肩	10.5	3.3		6.8	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
3	須恵器	杯	4区　SH01床面	(10.0)	3.1		(8.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
4	須恵器	杯	4区　SH01	(12.0)	残3.3		(8.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ヘラ記号あり
5	須恵器	杯	4区　SH01	12.3	4.05		8.8	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
6	須恵器	杯	4区　SH01南半上層炭より上	(12.0)	残4.0		(5.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
7	須恵器	杯	4区　SH01南半炭層		残3.0		(8.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
8	須恵器	杯もしくは高杯	4区　SH01南半炭層	(17.5)	残3.4			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
9	須恵器	壺	4区　SH01	(11.0)	残12.9			ﾊｹﾒ、ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
10	須恵器	器台もしくは皿	4区　SH01床面　SH01床面北肩	(30.6)	4.5		(8.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
11	土師器	高杯	4区　SH01　土器2	(14.8)	残4.5			ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
12	土師器	高杯	4区　SH01床面	15.1	残4.7			ﾊｹﾒ、ﾕﾋﾞｵｻｴ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
13	土師器	高杯	4区　SH01床面北肩	16.0	残5.8			ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ	ﾊｹﾒ	刺突痕あり
14	土師器	高杯	4区　SH01	15.4	12.3		12.6	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	絞り目あり
15	土師器	鉢	4区　SH01下層	(18.0)	6.2		(10.2)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
16	土師器	把手付鉢	4区　SH01	(13.8)	残8.1			ﾊｹﾒ		
17	土師器	甕	4区　SH01	(12.4)	残8.2			ﾊｹﾒ		
18	土師器	甕	4区　SH01	(13.6)	残10.6			ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ	
19	土師器	甕	4区　SH01埋土	(16.0)	残6.8			ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
20	土師器	甕	4区　SH01埋土	(20.0)	残4.4				ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	
21	土師器	甕	4区　SH01	(19.0)	残4.6				ﾊｹﾒ	
22	土師器	甕	4区　SH01床面南半	(15.2)	残4.9			ﾖｺﾅﾃﾞ ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
23	土師器	甕	4区　SH01	(18.0)	残10.0			ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ、ﾕﾋﾞｵｻｴ	
24	土師器	甑	4区　SH01北半炭層SH01床面	(20.0)	残7.5			ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
25	土師器	甑	4区　SH01カマド下層	(25.0)	残19.8			ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
26	土師器	甑	4区　SH01下層		残9.2		(13.0)	ﾊｹﾒ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
27	土師器	甑	4区　SH01床面北肩	(20.8)	10.1		(14.0)	ﾊｹﾒ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
28	土師器	甑把手	4区　SH01南半上層		4.3×6.1			ﾕﾋﾞｵｻｴ、ﾊｹﾒ		
29	土師器	竈	4区　SH01		残35.3	13.3	39.4	ﾊｹﾒ		
30	土師器	甕	5区　SH02	(22.0)	残2.3			ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	
31	須恵器	杯	5区　SH06	(12.0)	3.8		(8.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
32	須恵器	杯	5区　SH04東半	(13.4)	残3.2		(6.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
33	須恵器	杯	5区　SH04　土坑1	(14.0)	2.9		(8.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
34	須恵器	杯	5区　SH04床面	(13.0)	残2.6			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
35	須恵器	杯	5区　SH04東半		残1.8		(12.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
36	須恵器	杯蓋	5区　SH04床面	(11.8)	1.0			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
37	須恵器	杯	5区　SH04西半		残2.0		(9.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
38	須恵器	壺	5区　SH04床面　SH04中央炉		残5.9		(8.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
39	須恵器	平瓶	5区　SH04東半		残10.9		(14.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	2条の凹線
40	土師器	甕	5区　SH04東半	(11.2)	残4.4			ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	
41	土師器	器台	5区　SH04	(12.0)	残1.9					
42	土師器	製塩土器	5区　SH04東半		残1.9		(5.8)	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ	ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ	
43	土師器	甕	5区　SH05東半	(19.0)	残2.2				ﾊｹﾒ	沈線
44	須恵器	蓋	5区　SH06		残1.65		(4.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
45	須恵器	杯	5区　SH06壁溝	(12.0)	残2.5			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
46	土師器	製塩土器	5区　SH06炉周辺	(11.2)	残5.2					
47	土師器	製塩土器	5区　SH06　P6	(12.0)	残6.0			ﾕﾋﾞｵｻｴ		
48	土師器	皿	4区　SB01	(10.8)	2.7		6.5	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
49	須恵器	杯	4区　SB02	(13.0)	3.0		(8.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
50	土製品	土錘	5区　SB05　P51	長残2.5	厚み1.0					
51	須恵器	杯	5区　SB07　P1		残1.4		(11.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
52	須恵器	杯	5区　SB10　P61	(15.0)	残4.5		(12.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
53	土師器	杯もしくは椀	5区　SB11　P58		残2.1		(10.0)	ﾖｺﾅﾃﾞ		
54	土師器	甕	4区　SA01　P32	(30.0)	残5.5			ﾀﾀｷ		1条の凹線
55	土師器	皿	4区　P7	(12.0)	残2.15		(6.0)		ﾕﾋﾞｵｻｴ	
56	土師器	皿	4区　P7	(14.6)	2.7		(8.0)			

番号	種別	器種	遺構	法量（cm）				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
57	須恵器	椀	4区　P83	(15.0)	残2.45			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
58	土師器	製塩土器	4区　P44	(10.6)	残6.1			ﾕﾋﾞ成形	ﾕﾋﾞ成形	
59	須恵器	椀	5区　西半P1　P57	(13.4)	4.3		(5.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
60	須恵器	椀	5区　P1		残2.3		(7.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
61	須恵器	椀	5区　東半下面P2		残1.8		(6.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
62	須恵器	杯蓋	5区　東半上面P4		残0.8			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
63	須恵器	杯	5区　東半上面P4		残2.1		(11.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
64	土師器	杯	5区　P4	(13.4)	2.6		(8.2)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
65	須恵器	稜椀	5区　東半上面P5		残1.8			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
66	土師器	椀	5区　P41		残0.8		(6.0)			
67	須恵器	杯	5区　P74	(9.0)	残3.1			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
68	須恵器	杯	5区　P78	(16.0)	残2.5			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
69	須恵器	高杯	4区　SX01南半	(12.0)	残3.9			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	2条の凹線
70	須恵器	椀	4区　SX01南半	(17.0)	残3.0			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
71	須恵器	捏鉢	4区　SX01	(23.4)	残7.8			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
72	土師器	皿	4区　SX01埋土北半	(10.0)	残1.65				ﾕﾋﾞｵｻｴ	
73	土師器	甑	4区　SX01北半	(21.0)	残6.0			ﾕﾋﾞｵｻｴ、ﾊｹﾒ	ﾕﾋﾞｵｻｴ	
74	土師器	甕	4区　SX01北半	(18.0)	残5.3			ﾊｹﾒ		
75	土師器	甕	4区SX01南半炭層より上	(22.0)	残4.6			ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	
76	土師器	甕	4区　SX01南半	(21.4)	残4.25			ﾖｺﾅﾃﾞ		口縁に凹線
77	土師器	鍋	4区　SX01	(21.8)	残7.45			ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ		
78	土師器	甕	4区　SX01南半	(23.0)	残2.75			ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
79	備前焼	甕	4区　SX01埋土北半	(22.8)	残3.2			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
80	陶器	鉢	4区　SX01南半	(23.0)	残3.1					
81	信楽焼	甕	4区　SX01		残9.0		(11.0)	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
82	土師器	皿	4区　SK01	(8.0)	1.5		(4.2)			
83	土師器	皿	4区　SK01	(11.8)	残2.15					
84	土師器	皿	4区　SK01	(11.8)	残2.0		(6.2)		ﾕﾋﾞｵｻｴ	
85	須恵器	捏鉢	4区　SK01	(23.0)	残3.4			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
86	須恵器	捏鉢	4区　SK01		残2.2		(9.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
87	弥生土器	甕	5区　SR01　底	(20.0)	残3.4			ﾖｺﾅﾃﾞ		3条の凹線
88	須恵器	杯	5区　SR01		残1.4		(12.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
89	須恵器	杯	5区　SR02	(13.6)	3.0		(9.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
90	須恵器	椀	5区　SR02	(14.9)	残4.1			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
91	土師器	椀	5区　SR02旧河道	(15.4)	6.4		(8.6)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
92	弥生土器	壺	5区　SR03	(11.0)	残10.7			ﾍﾗﾐｶﾞｷ		口縁に1条の凹線
93	土師器	杯	5区　SR03支流	(13.6)	残3.2			ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
94	土師器	杯	5区　SR03	(13.0)	残2.9					
95	土師器	杯	5区　SR03		残2.5		(13.0)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
96	須恵器	杯	5区　SR03	(15.0)	2.9		(12.0)	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
97	須恵器	杯	5区　SR03	(16.6)	2.8		(13.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
98	須恵器	杯蓋	5区　SR03	(17.0)	残1.3			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
99	須恵器	杯蓋	5区　SR03		残1.2			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
100	須恵器	杯	5区　SR03	(15.8)	6.1		(10.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
101	須恵器	杯	5区　SR03		残2.3		(12.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
102	土師器	杯	5区　SR03		残1.3		(10.0)	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ	
103	土師器	製塩土器	5区　SR03	(10.0)	残4.05			ﾕﾋﾞｵｻｴ	ﾕﾋﾞｵｻｴ	
104	土師器	製塩土器	5区　SR03	(13.0)	残4.3			ﾕﾋﾞｵｻｴ	ﾕﾋﾞｵｻｴ	
105	土師器	甕	5区　SR03	(30.0)	残4.9			ﾊｹﾒ		口縁に凹線あり
106	須恵器	杯蓋	5区　面精査		残1.5		(17.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
107	須恵器	杯	4区　機械掘削	(12.0)	残3.0			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
108	須恵器	皿	5区　西半機械面精査	(15.0)	1.6		(11.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
109	須恵器	杯	5区　面精査	(17.0)	残4.2			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
110	須恵器	杯	5区　西半機械面精査	(16.0)	残2.3			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
111	須恵器	稜椀	5区　北東部機械面精査		残2.8			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
112	土師器	椀	5区　東半下面P3		残2.2		(6.6)			

番号	種別	器種	遺構	法量（cm）				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
113	土師器	甑把手	4区　人力精査							
114	土師器	甕	4区　機械掘削	(30.8)	残5.1			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
115	土師器	皿	5区　西半機械面精査	7.7	1.2		5.7	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	
116	須恵器	椀	3区　土層　清浄中		残2.5		(6.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
117	須恵器	椀	5区　面精査		残1.9		(6.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
118	須恵器	椀	5区　暗渠　面精査	(16.5)	残6.3		(8.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
119	須恵器	甕	5区　南東部　面精査		残8.5		(14.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
120	須恵器	捏鉢	4区　機械掘削	(18.0)	残3.5			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
121	須恵器	捏鉢	5区　西半機械面精査	(24.4)	残3.7			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
122	須恵器	杯	5区　西半機械面精査		残1.3		(9.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
123	須恵器	捏鉢	5区　南東部面精査		残1.5		(8.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
124	瓦質土器	鍋	4区　人力精査	(21.0)	残4.6					
125	陶器	椀	5区　東半下面面精査		残2.6		(6.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	
126	縄文土器		5区　東半下面　面精査							
127	縄文土器		5区　西半機械面精査							
F1	鉄製品	鏨	1区	長さ6.4×幅1.6×厚み0.3～0.9						
S1	石製品	砥石	4区　SK01	長さ12.2×幅3.8×厚み0.9						
S2	石製品	敲き石	5区　SR01	8.4×6.4						

SH01 土師器集合写真

Ⅳ　おわりに

林谷遺跡は令和元・3年度に本発掘調査を行った。調査面積は4,100㎡とさほど広くはないが多大な成果を得た。丘陵部と山裾の水田部では時期差があり、遺跡の性格が異なる。丘陵部の時期は出土遺物がほとんどないことから明確にできないが、縄文時代の遺跡で落とし穴を中心とする土坑群などを検出している。山裾は主に古墳時代から奈良時代の集落で、竪穴建物6棟・掘立柱建物13棟・柵2列・落ち込み2基・鍛冶炉2基・溝2条などを調査した。遺物は土師器・須恵器・製塩土器と台石である。

丘陵部の調査では落とし穴と考えられる土坑群が注目される。上部を削平されているものが多いので確実なことは言えないが、底に逆茂木と考えられるピットが認められる土坑と、ある程度の深さのあるものを落とし穴としたものの一覧が表2で21基を検出している。平面形は楕円形・円形が大半であるが隅円方形のものもある。21基中12基が底面にピットを有している。ピットの径は0.1～0.37 mで、深さは最深0.25 mである。調査区の地形は尾根部であるが、南北方向の尾根で東西は傾斜し、特に東側は急な谷部になっている。落とし穴の位置が尾根上に並んでいることは他遺跡と同様である。ただ偶然かもしれないが、底面にピットを有する土坑は尾根上よりも一段下がった斜面部に多いことが指摘できる。

平野部の調査では古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴建物を検出している。SH06は突出部を有する大形の円形住居である。形態からは弥生時代後期を指向するが、該当する遺物が出土していない。古墳後期から奈良時代の竪穴建物に切られていることから、床面の残存状態は良好とは言えない。さらに建物の切り合い関係のない部分でも鍛冶炉が検出されており、この2基の鍛冶炉は奈良時代と思われるので、SH06の床面は保全されず遺物を保有していないものと考える。そのことから出土遺物は新しい時期であるが後世のもので、SH06は弥生時代後期まで遡る住居と想定している。SH01～SH05は古墳時代後期から飛鳥時代にかけての竪穴建物である。SH01は北西辺中央に作り付けの竈を築いている。焼成部は不定楕円形で竈本体肩部には石材を積んでいる。

SH04は長方形プランの4本柱で2つの炉を有している。北西辺中央と床面中央に炉を築いている。中央炉は楕円形土坑縁辺部に溝を掘り込み強く焼けている。被熱状況などは大中遺跡や美乃利遺跡の住居に類似している。鉄生産などの工房の可能性が高いと考えている。

掘立柱建物は13棟調査した。柱穴から遺物が出土しているのは少数である。SB02とSB07出土が杯Aで、奈良時代中頃と思われる。主軸方向はSB02が南北を向き、SB07もN5°Eと南北に近い。この主軸を持つ建物はSB03・SB06・SB13でこの5棟が古段階の建物と思われる。それに対してN24°W前後を主軸とするSB04・SB09・SB11・SB12の4棟が次の段階で、さらに西へN 30°WとなるSB05とSB10がその次の時期である。SB04とSB05は平面的に切り合い関係がある。SB01は遺物から新しい建物で平安時代であろうか。SB06は上面で検出しているが、大きな時期差はないと思われる。

今回検出した遺構で特記されるのが鍛冶炉であろう。SH06床面上で検出された奈良時代の2基の炉跡で、箱型炉である。長方形プランで断面は方形で底に炭層が存在する。北炉の方が幅は広いが形状・堆積状況は似ており、鍛冶炉と思われる。南東に位置する桜東畑遺跡で焼塩遺構が検出され、奈良時代の塩の再分配に関与したと考えられ、それに加えて鉄生産を高岡で行っていたことになる。

表２　林谷遺跡１区～３区落とし穴状遺構一覧

調査区	遺構番号	平面形	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	底面ピット			底面ピット
						長径（m）	短径（m）	深さ（m）	
1区	SK05	楕円	1.8	0.8	0.45				無し
	SK06	円形	1.11	0.92	0.92				
	SK07	円形	1.2	-	0.21				
2区	SK02	円形	0.85	0.62	0.07	0.14	0.10	0.20	有り
	SK04	円形	1.20	0.98	0.20	0.37	0.28	0.21	
	SK10	楕円	0.94	0.78	0.20	0.24	0.20	0.15	
	SK18	隅丸方形	1.17	0.93	0.88				無し
3区	SK09	楕円	0.86	0.86	0.21				無し
	SK12	楕円	0.90	0.67	0.20	0.20	-	0.25	有り
	SK17	円形	0.88	0.80	0.16	0.20	0.20	0.20	
	SK18	楕円	0.82	0.55	0.02	0.20	0.20	0.25	
	SK19	楕円	1.08	0.68	0.12				無し
	SK20	円形	1.00	0.68	0.20	0.20	0.20	0.01	有り
	SK21	円形	1.20	0.88	0.46	0.20	0.20	0.12	
	SK22	円形	0.80	0.69	0.25	0.25	0.24	-	
	SK23	楕円	1.52	0.62	0.30				無し
	SK24	円形	1.01	0.88	0.28				
	SK25	楕円	1.08	0.65	0.38				
	SK26	楕円	0.80	0.51	-	-	-	-	有り
	SK27	円形	0.64	0.57	0.27	0.19	0.19	0.07	
	SK28	楕円	0.90	0.60	-	0.18	0.18	-	

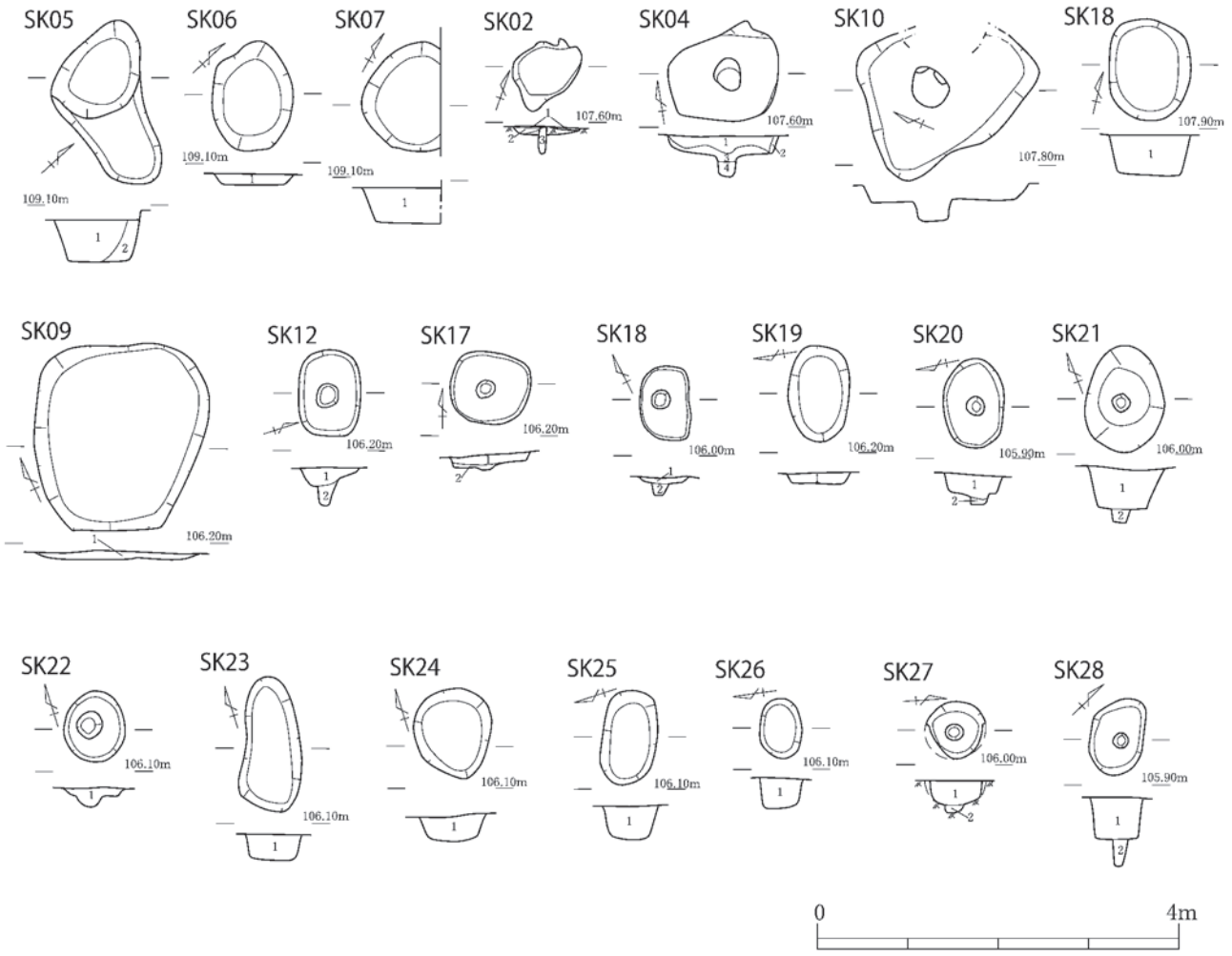


図５　落とし穴集成図

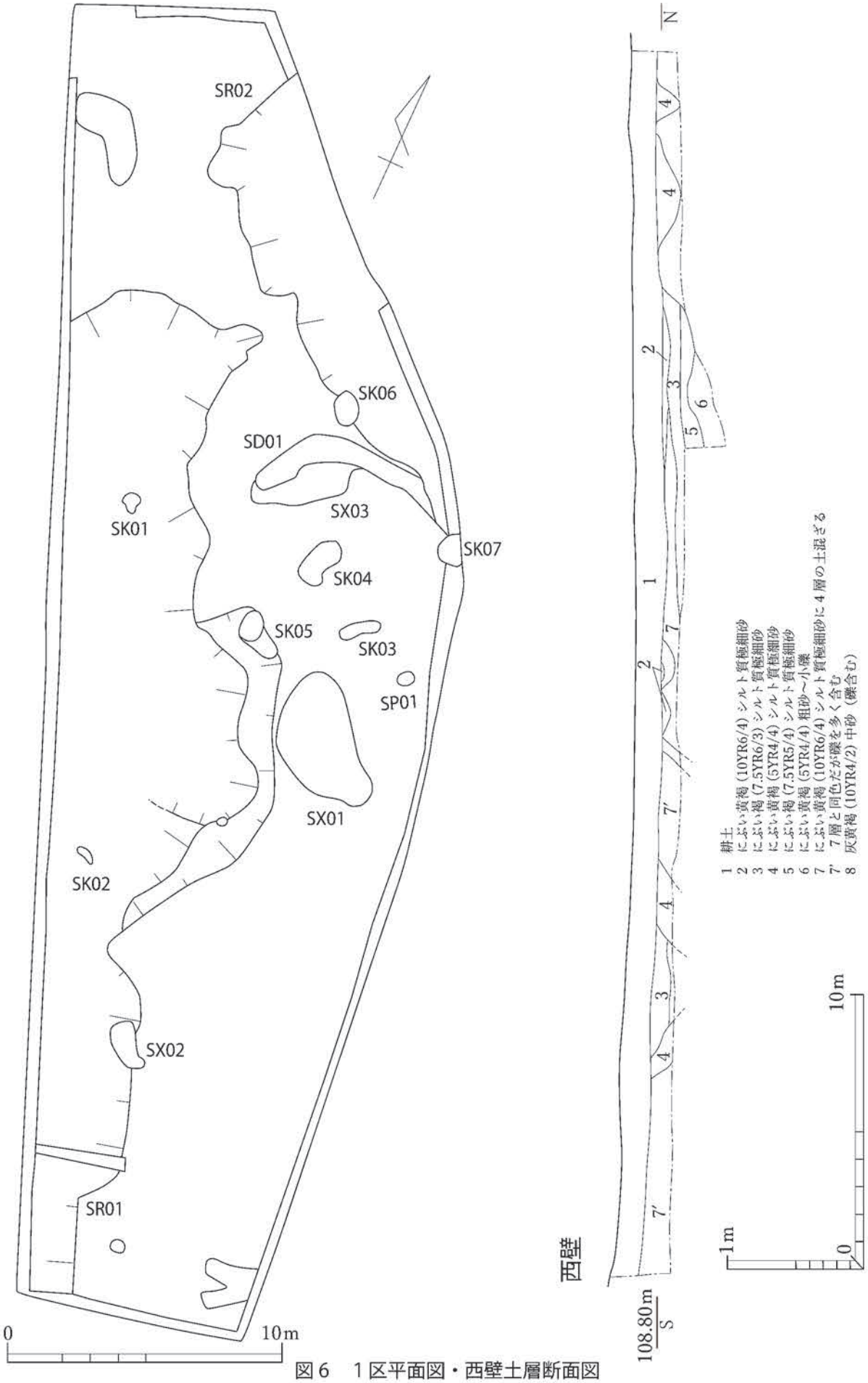


図6　1区平面図・西壁土層断面図

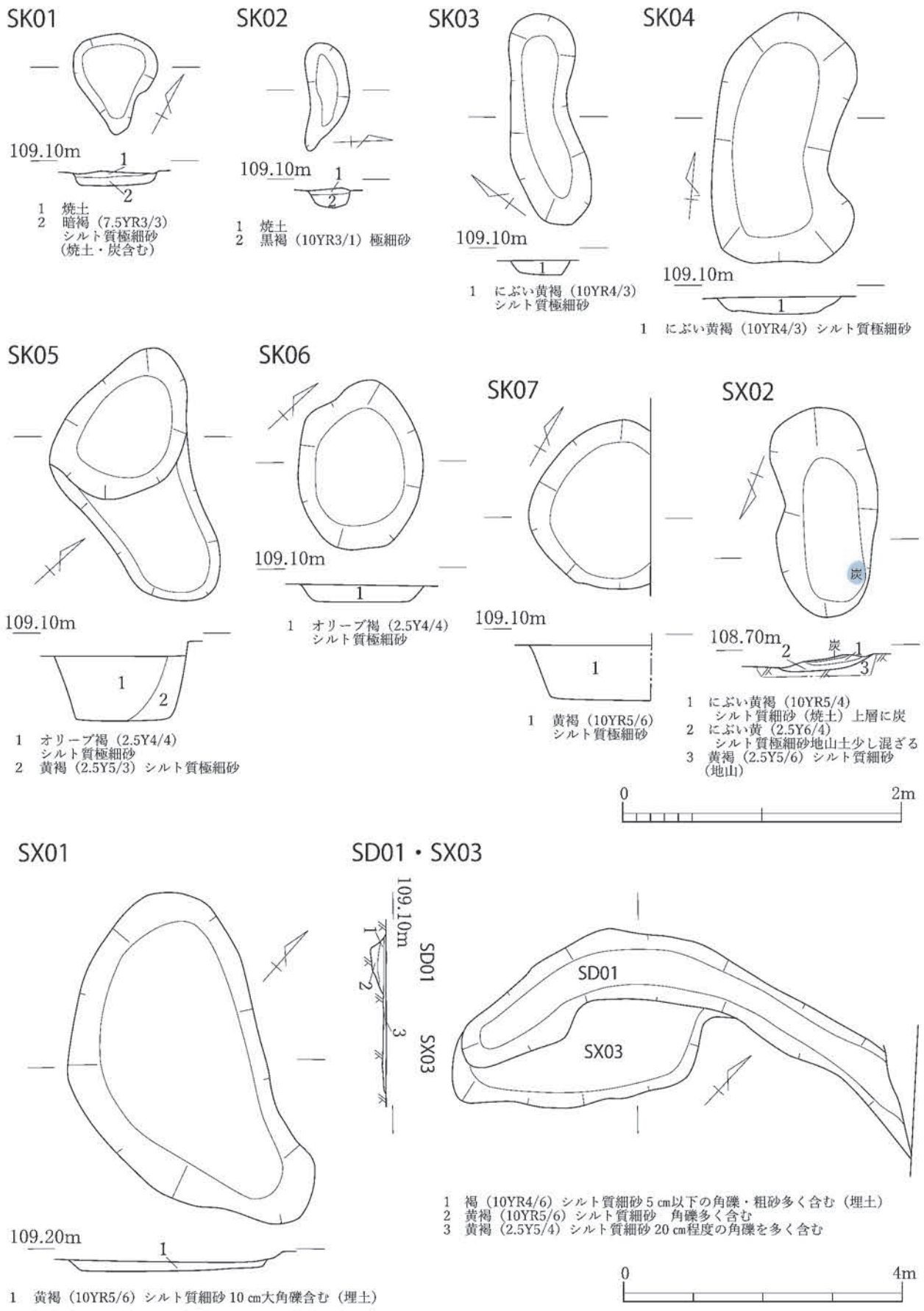


図７　１区遺構実測図（SK01 ～ 07・SX01 ～ 03・SD01）

北壁断ち割り

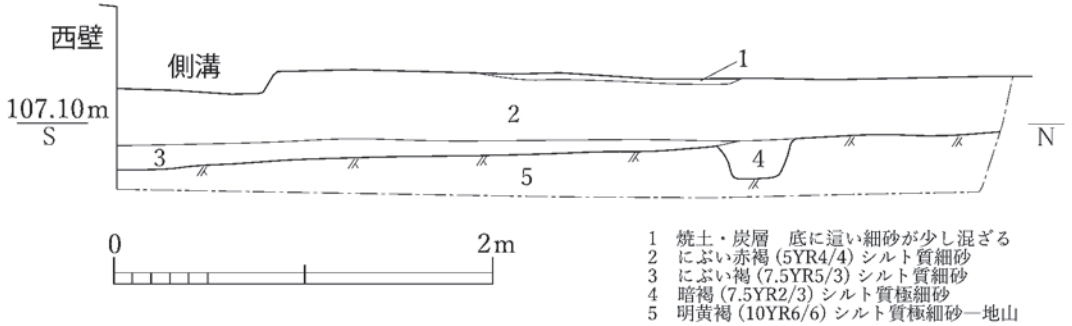


図８　２区平面図・北壁土層断面図

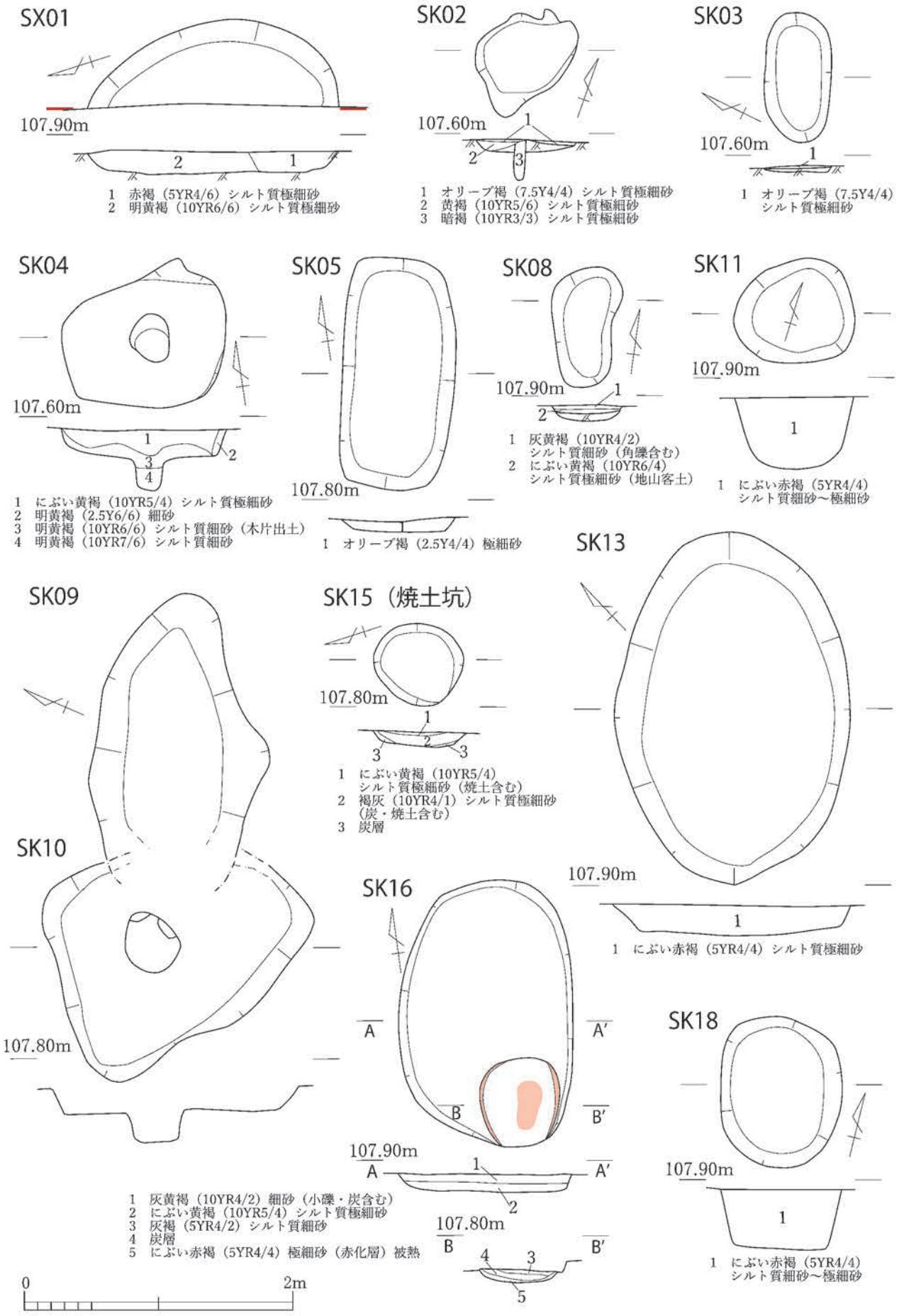

SX01
107.90m
1 赤褐（5YR4/6）シルト質極細砂
2 明黄褐（10YR6/6）シルト質極細砂
SK02
107.60m
1 オリーブ褐（7.5Y4/4）シルト質極細砂
2 黄褐（10YR5/6）シルト質極細砂
3 暗褐（10YR3/3）シルト質極細砂
SK03
107.60m
1 オリーブ褐（7.5Y4/4）シルト質極細砂
SK04
107.60m
1 にぶい黄褐（10YR5/4）シルト質極細砂
2 明黄褐（2.5Y6/6）細砂
3 明黄褐（10YR6/6）シルト質細砂（木片出土）
4 明黄褐（10YR7/6）シルト質細砂
SK05
107.80m
1 オリーブ褐（2.5Y4/4）極細砂
SK08
107.90m
1 灰黄褐（10YR4/2）シルト質細砂（角礫含む）
2 にぶい黄褐（10YR6/4）シルト質極細砂（地山客土）
SK11
107.90m
1 にぶい赤褐（5YR4/4）シルト質細砂～極細砂
SK09
SK10
107.80m
SK15（焼土坑）
107.80m
1 にぶい黄褐（10YR5/4）シルト質極細砂（焼土含む）
2 褐灰（10YR4/1）シルト質極細砂（炭・焼土含む）
3 炭層
SK13
107.90m
1 にぶい赤褐（5YR4/4）シルト質極細砂
SK16
A
A′
B
B′
107.90m
1 灰黄褐（10YR4/2）細砂（小礫・炭含む）
2 にぶい黄褐（10YR5/4）シルト質極細砂
3 灰褐（5YR4/2）シルト質細砂
4 炭層
5 にぶい赤褐（5YR4/4）極細砂（赤化層）被熱
107.80m
SK18
107.90m
1 にぶい赤褐（5YR4/4）シルト質細砂～極細砂
0
2m

図９　２区遺構実測図

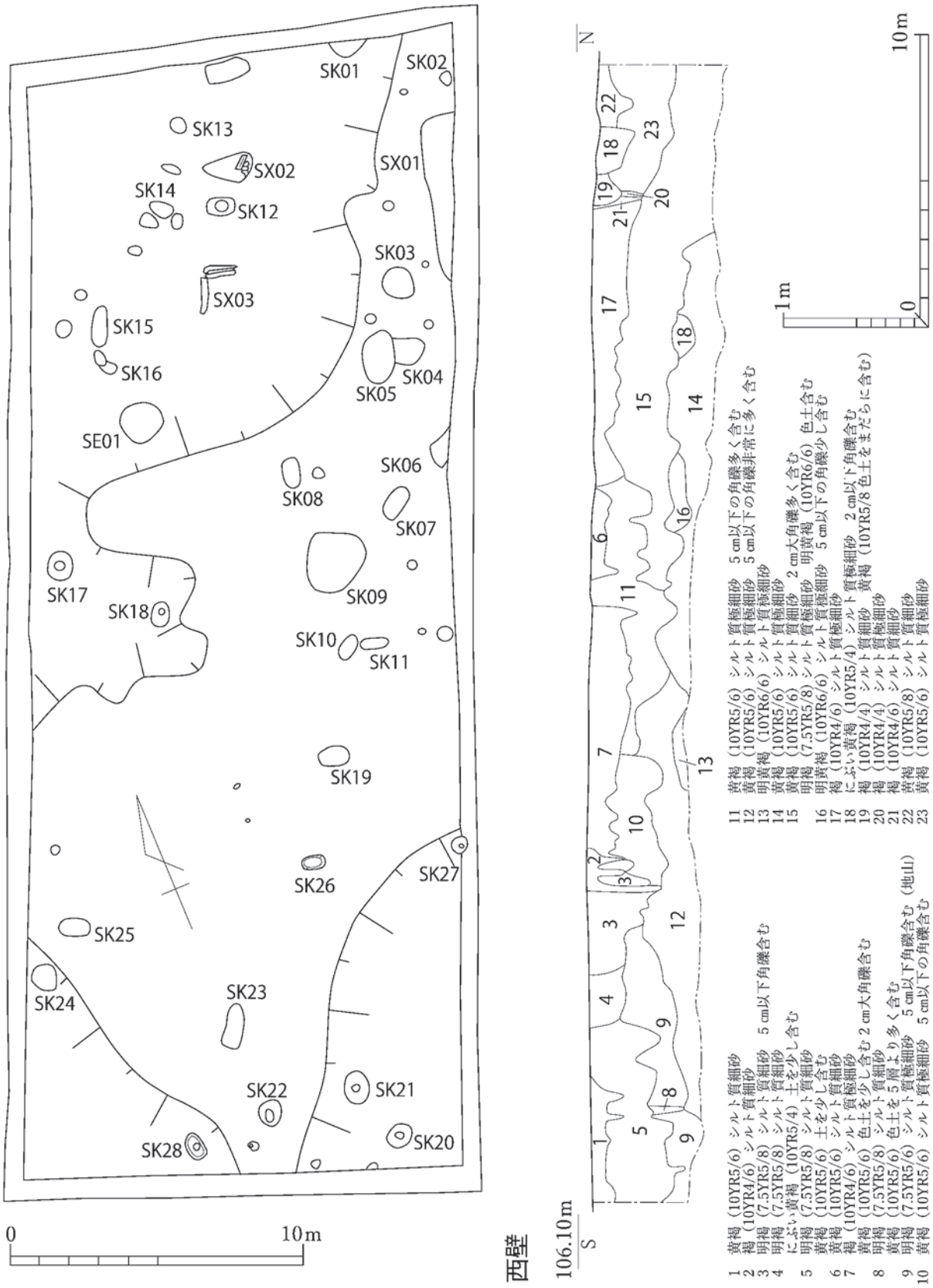


図 10　3 区平面図・西壁土層断面図

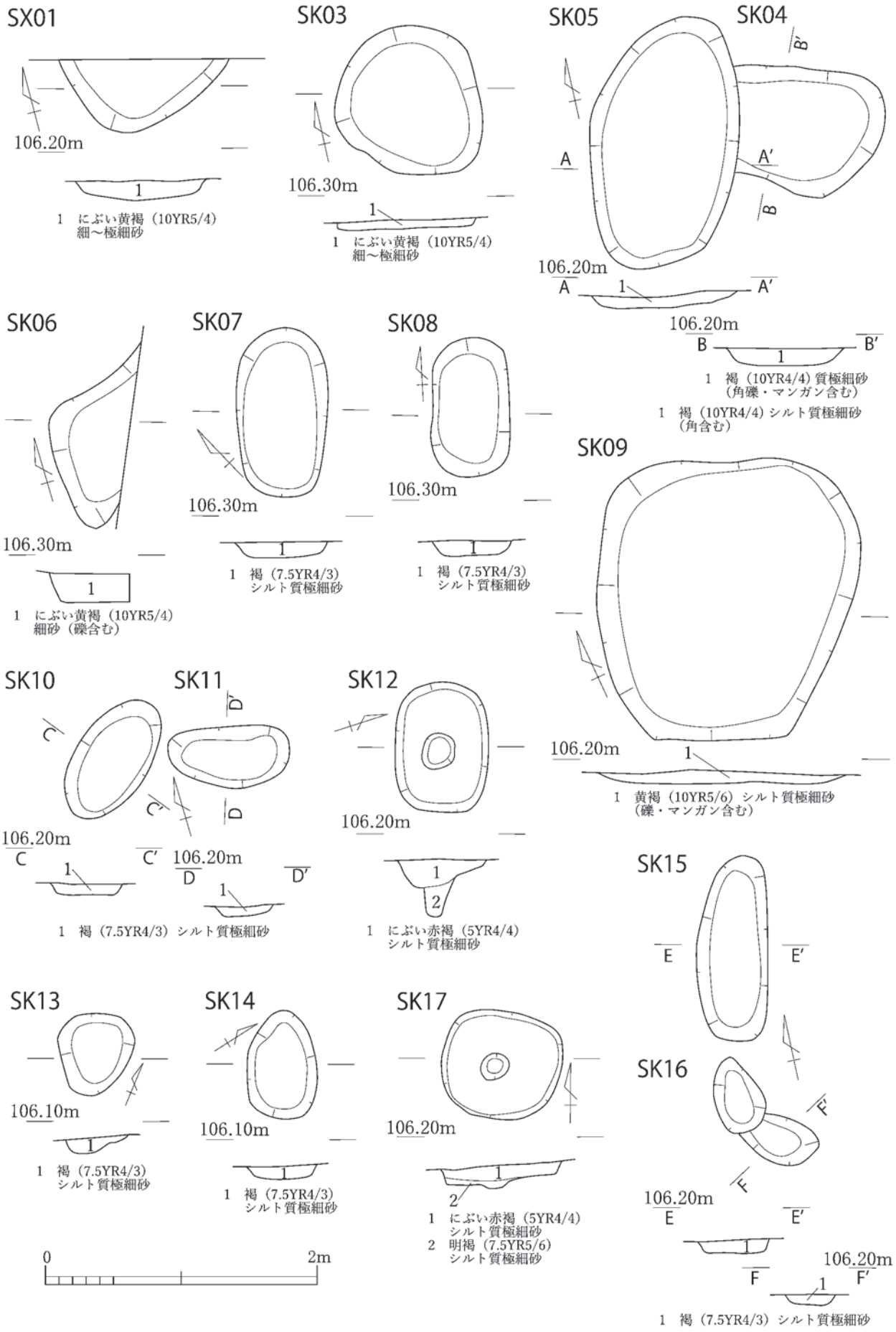


図 11　3 区遺構実測図（1）

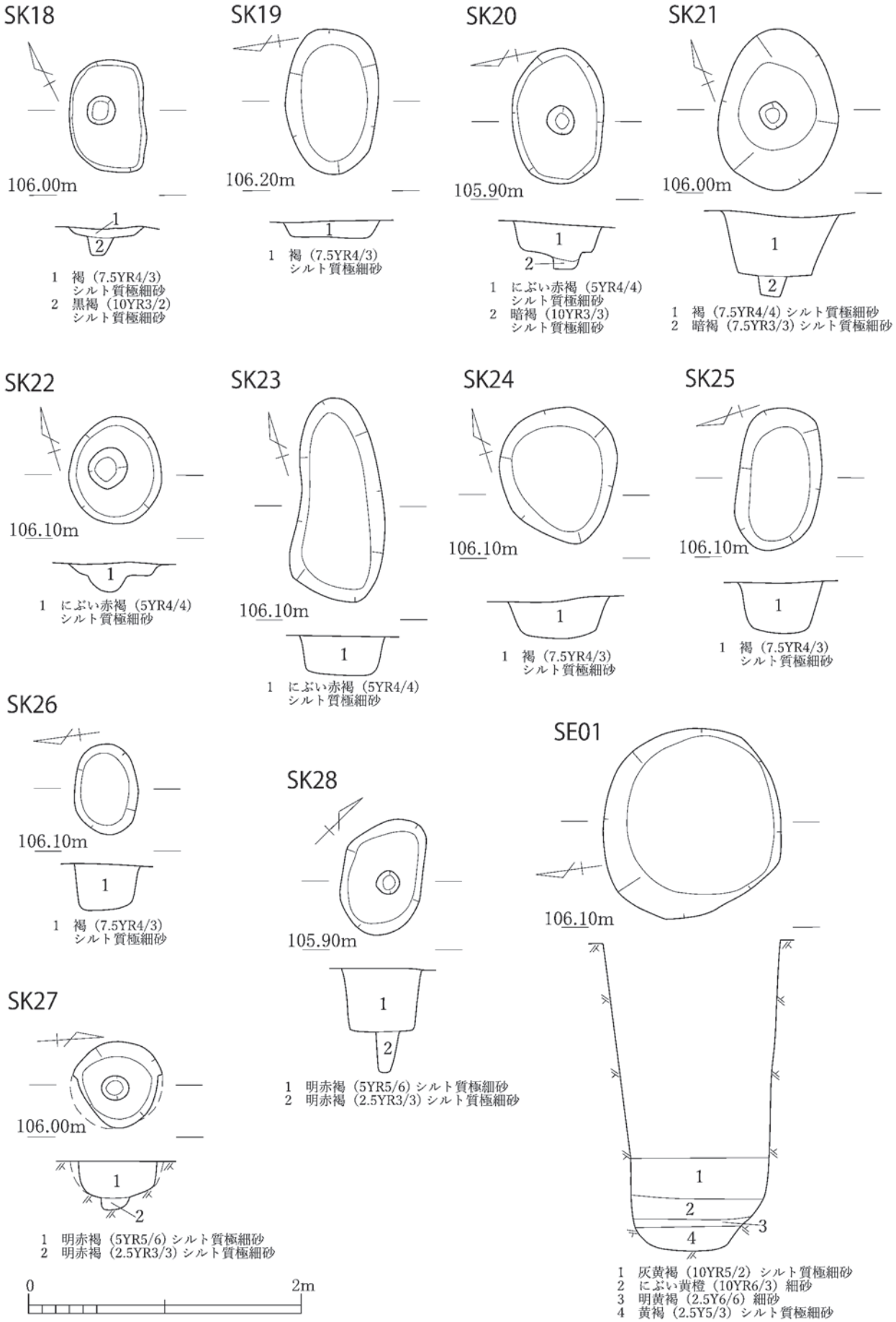


図 12　3 区遺構実測図 (2)

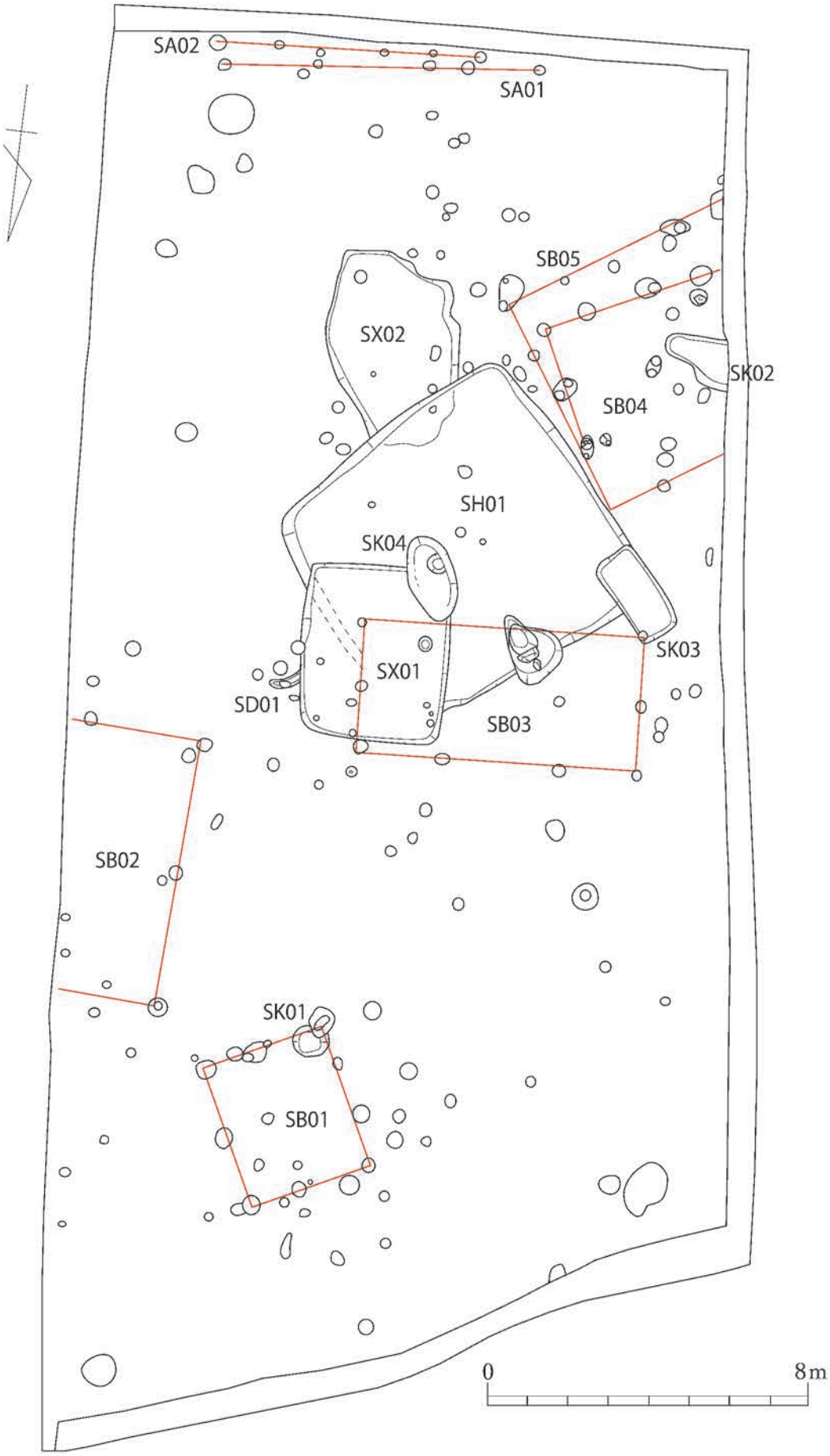
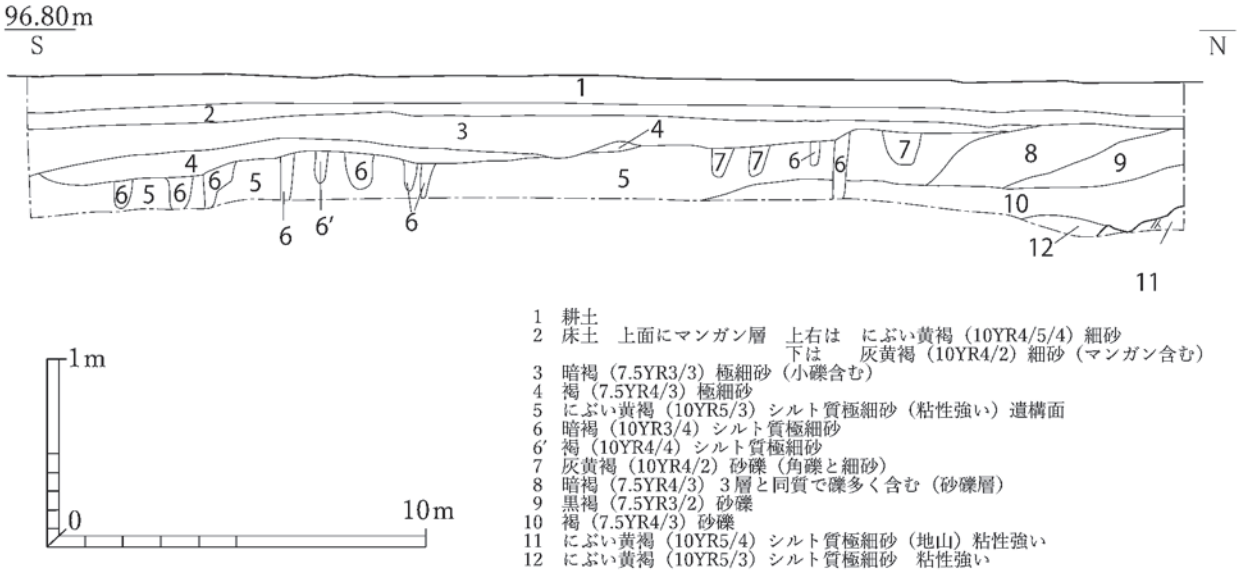

SA02
SA01
SB05
SX02
SK02
SB04
SH01
SK04
SK03
SX01
SD01
SB03
SB02
SK01
SB01
0
8m

図 13　4 区遺構平面図

4区西壁



1　耕土
2　床土　上面にマンガン層　上右は　にぶい黄褐（10YR4/5/4）細砂
　　下は　　灰黄褐（10YR4/2）細砂（マンガン含む）
3　暗褐（7.5YR3/3）極細砂（小礫含む）
4　褐（7.5YR4/3）極細砂
5　にぶい黄褐（10YR5/3）シルト質極細砂（粘性強い）遺構面
6　暗褐（10YR3/4）シルト質極細砂
6′　褐（10YR4/4）シルト質極細砂
7　灰黄褐（10YR4/2）砂礫（角礫と細砂）
8　暗褐（7.5YR4/3）3層と同質で礫多く含む（砂礫層）
9　黒褐（7.5YR3/2）砂礫
10　褐（7.5YR4/3）砂礫
11　にぶい黄褐（10YR5/4）シルト質極細砂（地山）粘性強い
12　にぶい黄褐（10YR5/3）シルト質極細砂　粘性強い

図 14　4区西壁土層断面図

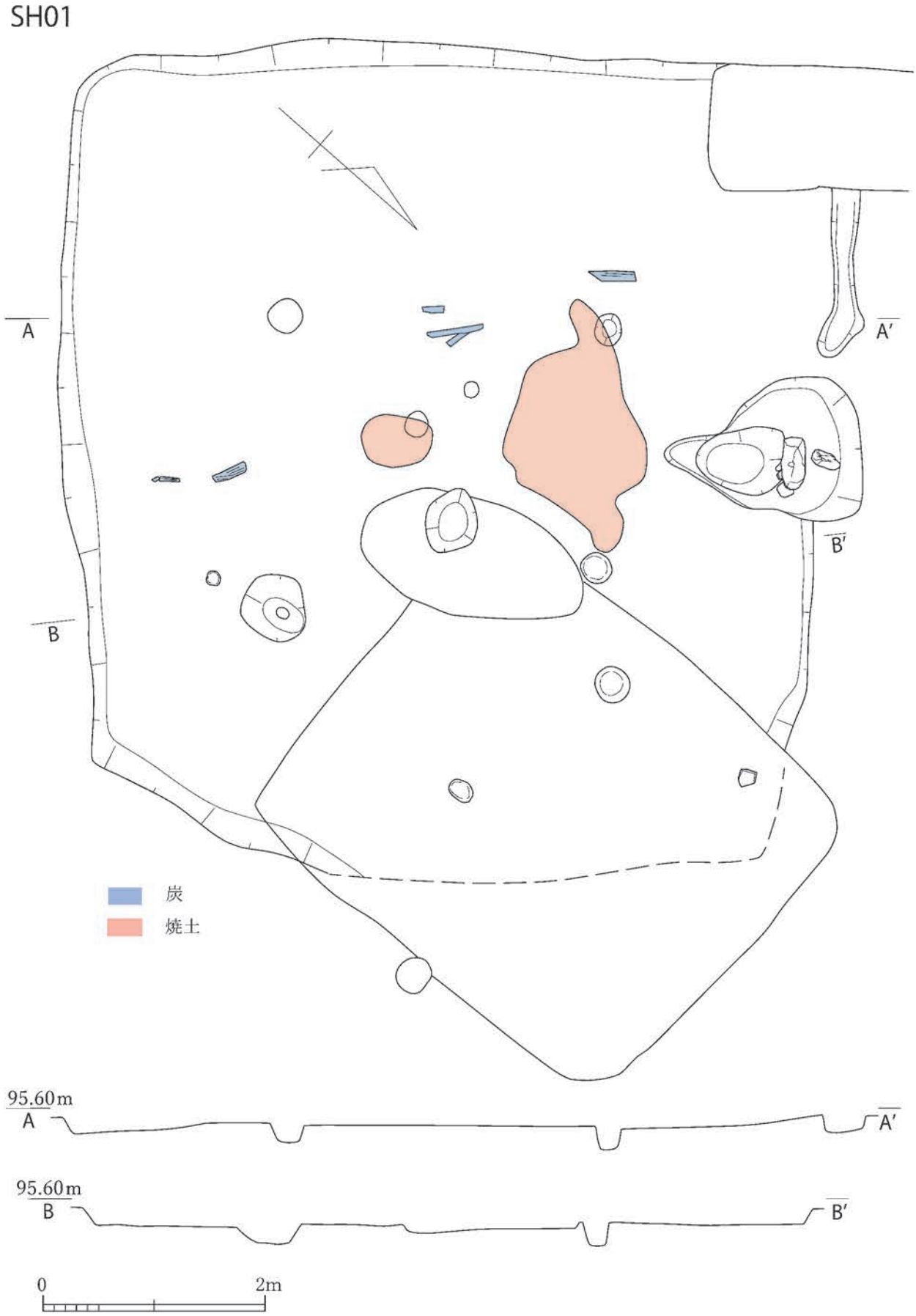
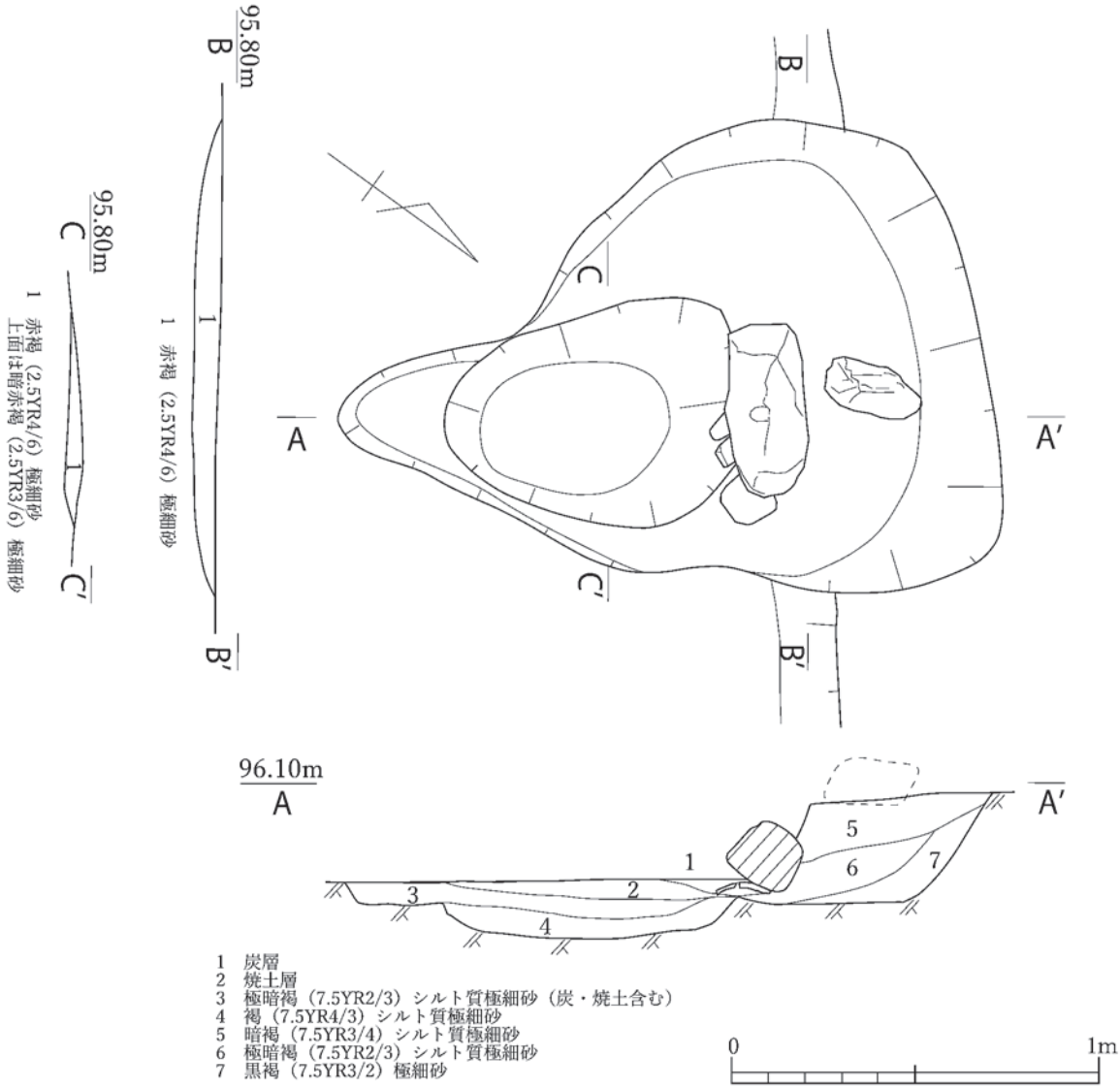


図 15　4 区遺構実測図（1）（SH01）

SH01 カマド



土器出土状況

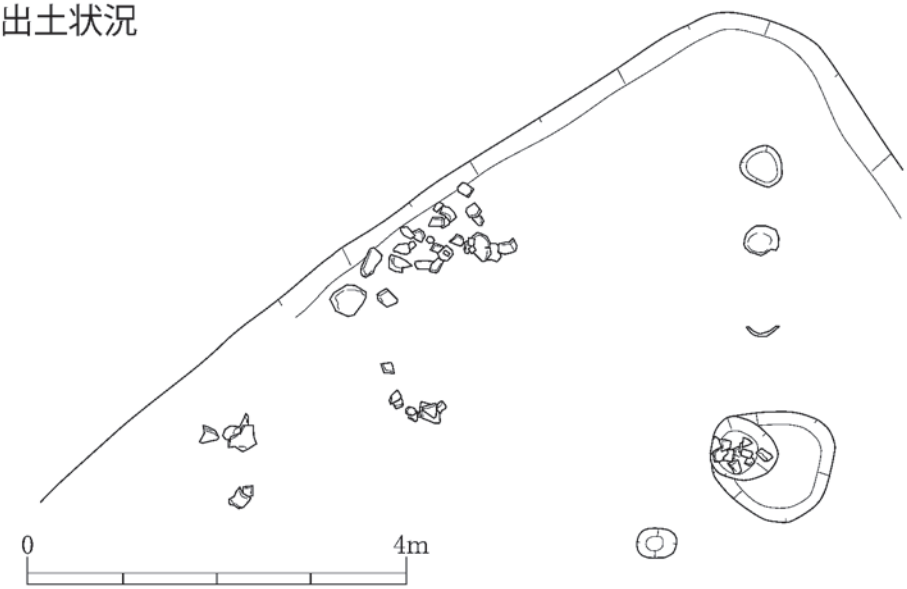
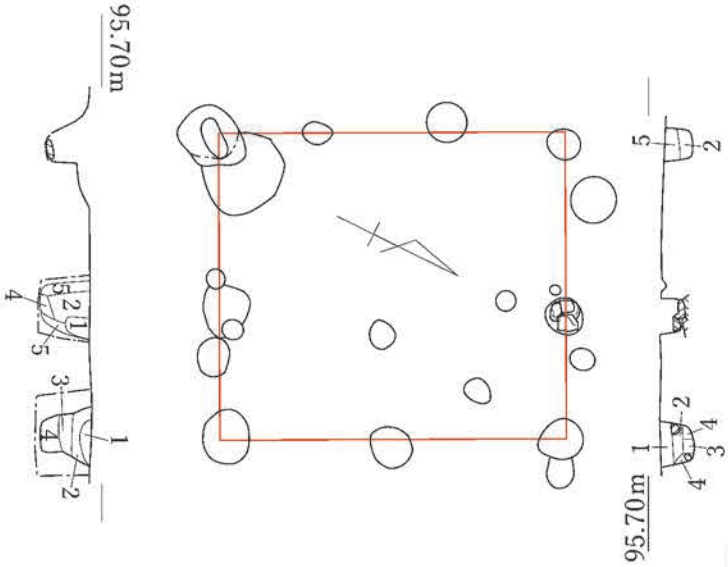


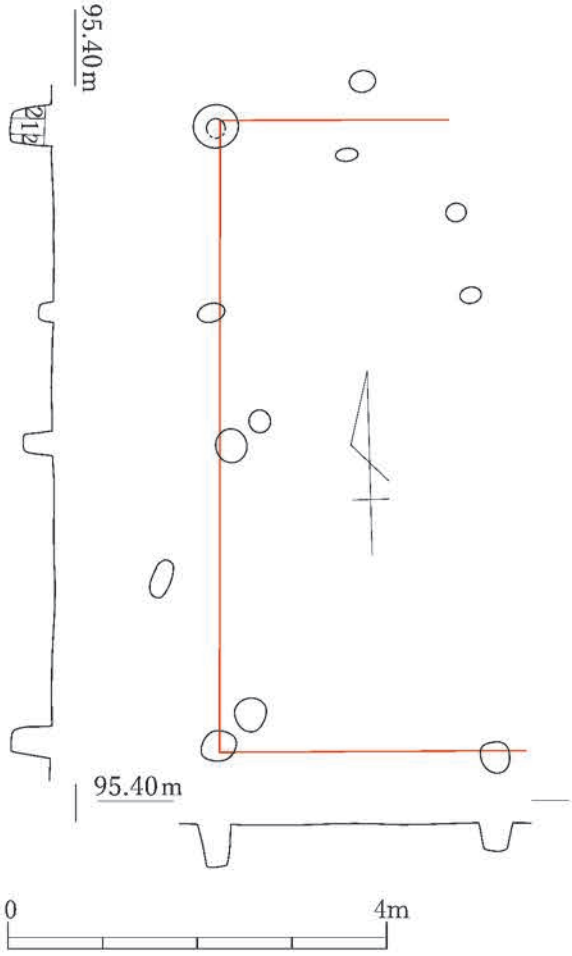
図 16　4 区遺構実測図（2）（SH01 カマド・土器出土状況）

SB01



1　暗褐（10YR3/3）シルト質細砂　2㎝大角礫多く含む
2　暗褐（10YR3/4）シルト質細砂　2㎝大角礫多く含む
3　褐（10YR4/4）シルト質細砂　細礫含む
4　にぶい黄褐（10YR4/3）シルト質細砂　細礫含む
5　2の土に褐（10YR4/4）まだらに含む

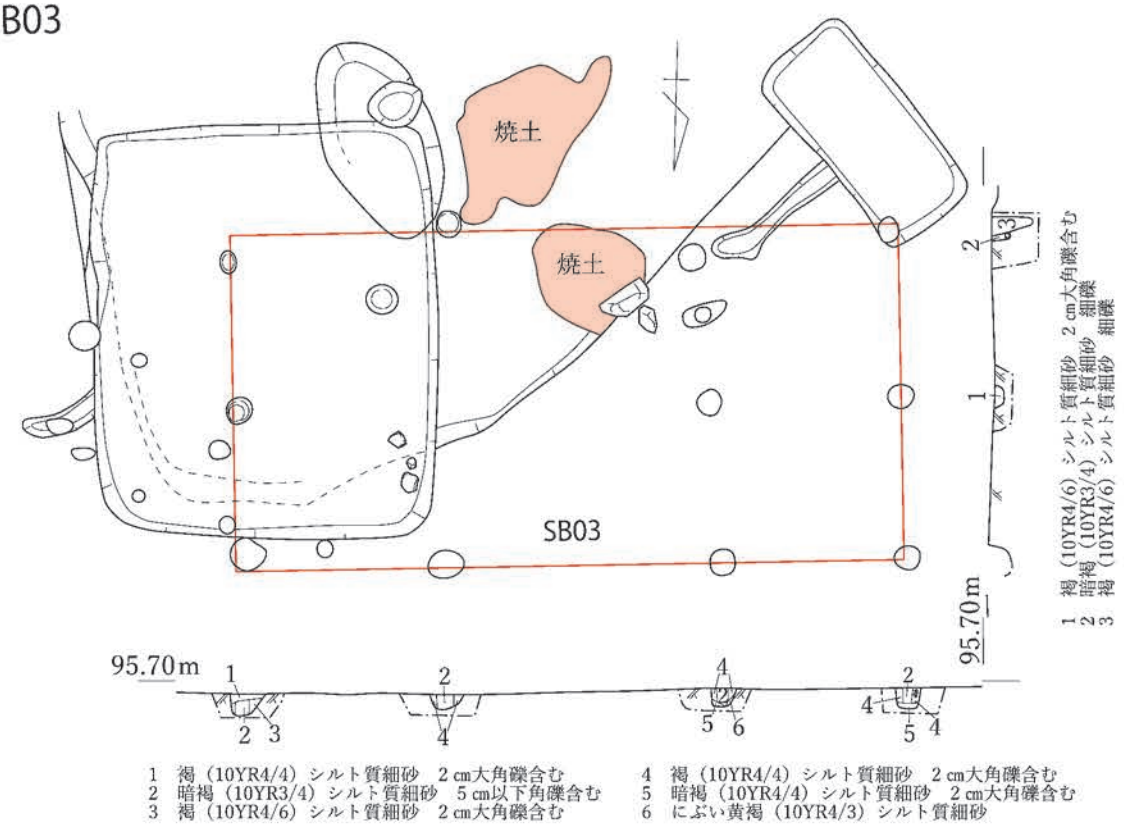
SB02



1　黒褐（10YR3/1）シルト質極細砂
2　暗褐（10YR3/3）シルト質極細砂

図 17　4 区遺構実測図（3）（SB01・SB02）

SB03



SB04・SB05

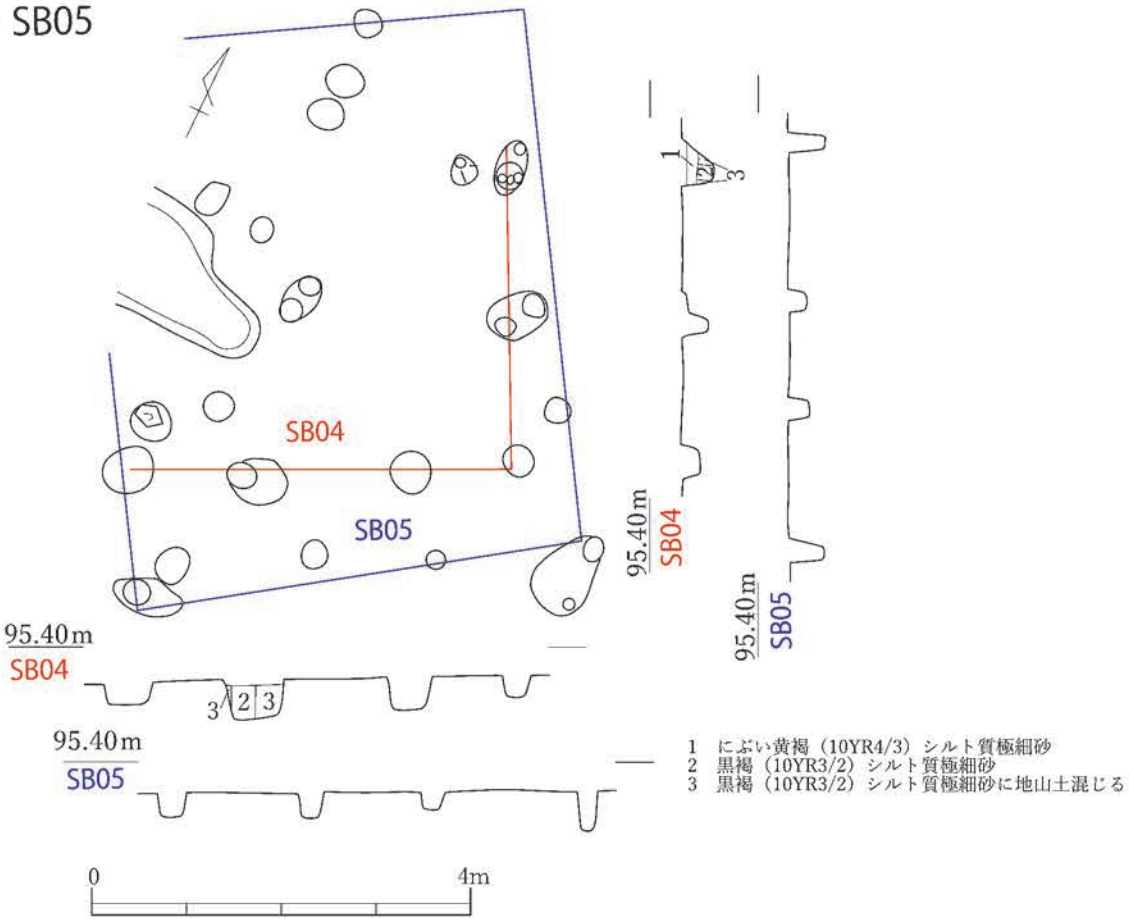


図 18　4 区遺構実測図（4）（SB03 ～ SB05）

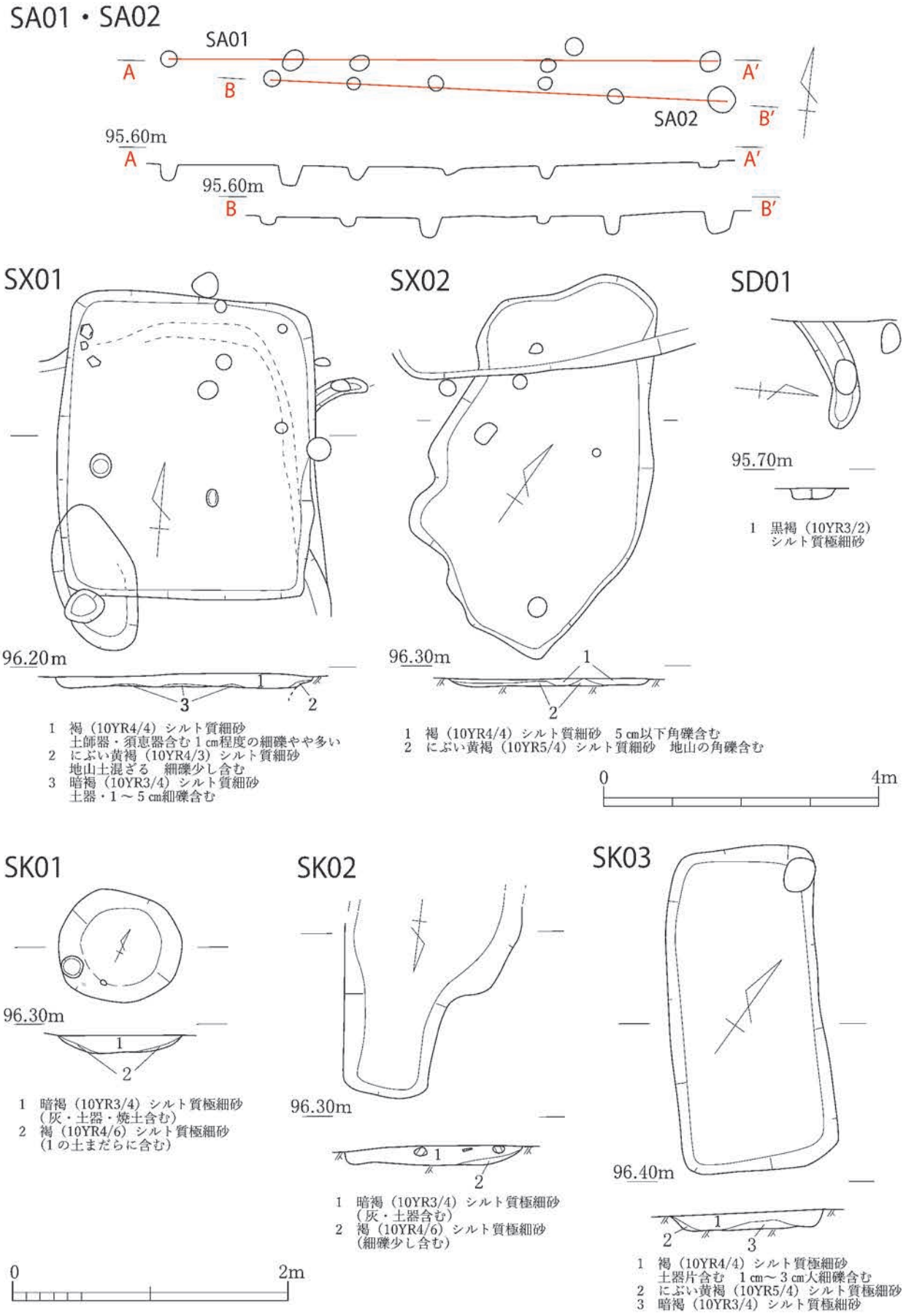


図 19　4 区遺構実測図（5）（SA01・02・SX01~02・SD01・SK01~03）

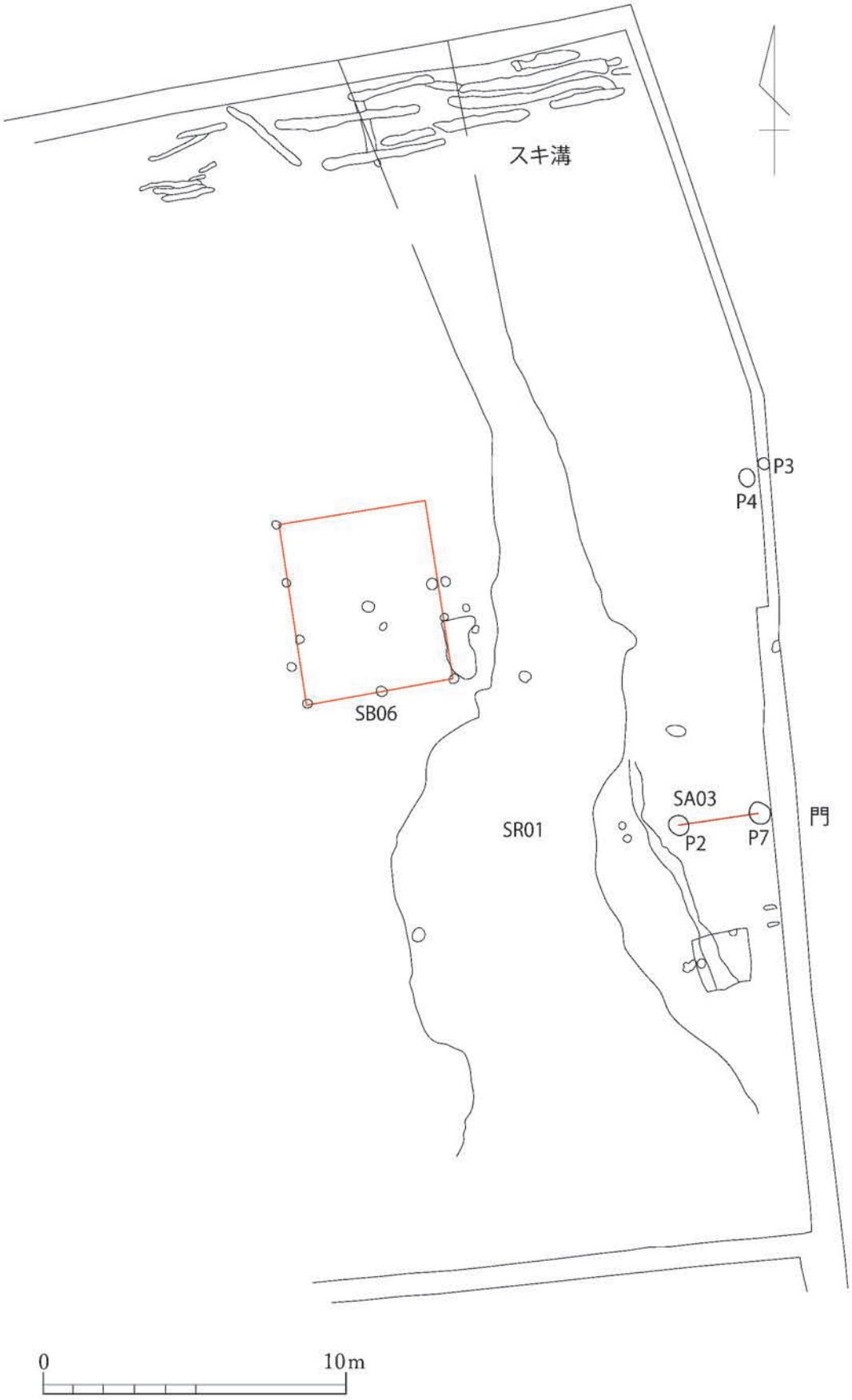
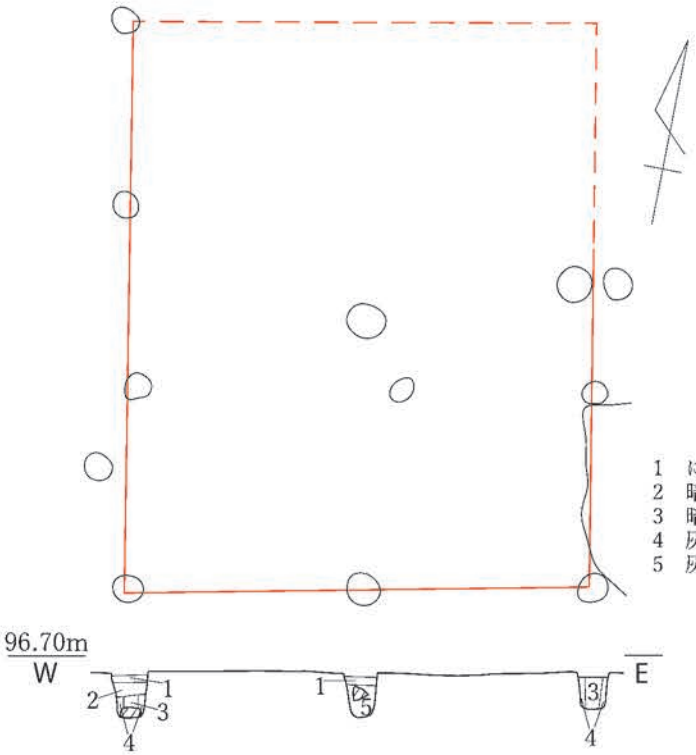


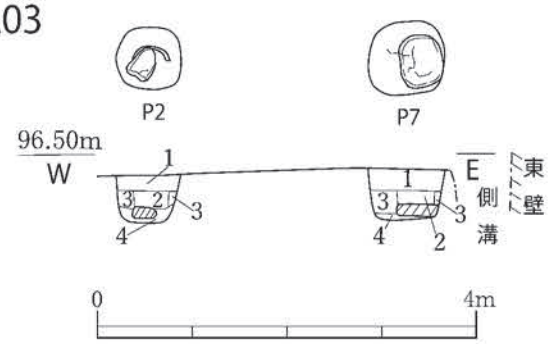
図 20　5 区東半上層平面図

SB06



1　にぶい黄褐（10YR4/3）シルト質極細砂
2　暗褐（10YR3/3）シルト質極細砂
3　暗褐（10YR3/4）シルト質極細砂
4　灰黄褐（10YR4/2）シルト質極細砂（地山土混じる）
5　灰黄褐（10YR5/2）細砂（２層・地山土混じる）

SA03



1　にぶい黄褐（10YR4/3）シルト質極細砂
2　灰黄褐（10YR5/2）シルト質極細砂
3　褐（10YR4/4）シルト質極細砂と
　　にぶい黄褐（10YR5/4）シルト質極細砂
4　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂

P4・P3

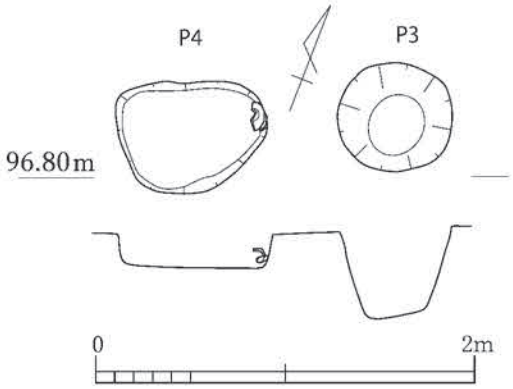


図 21　5 区東半上層遺構図

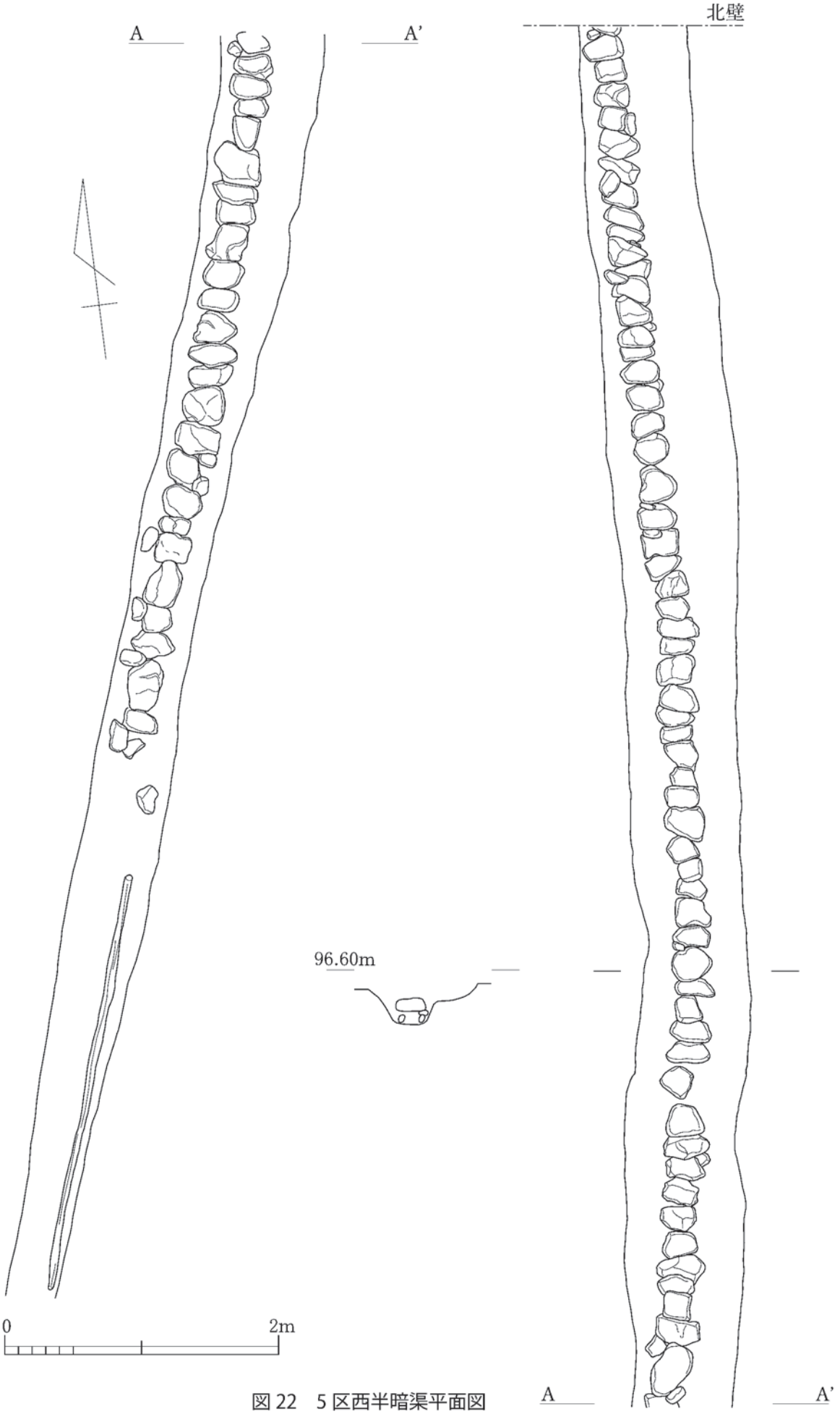


図 22　5 区西半暗渠平面図

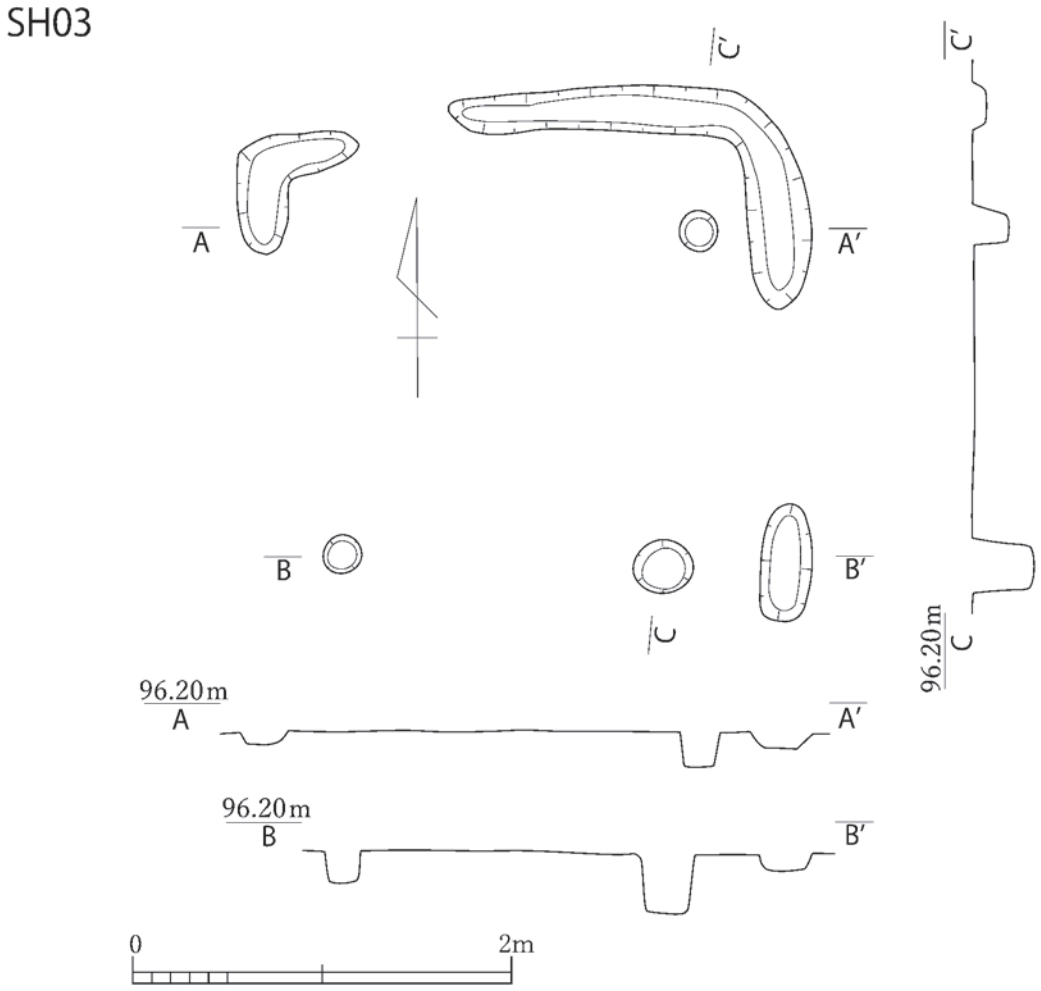


図 23　5 区東半下層遺構図

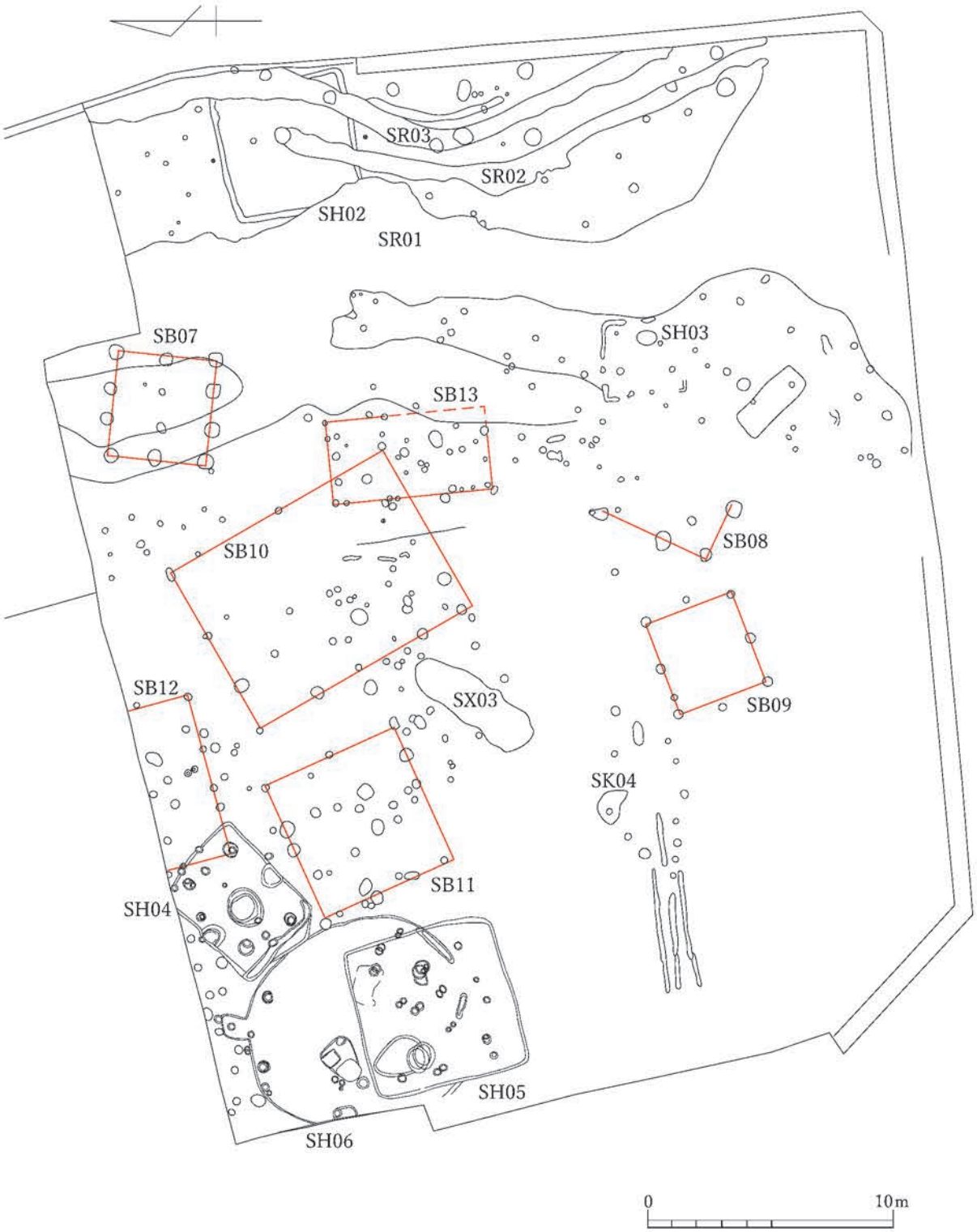
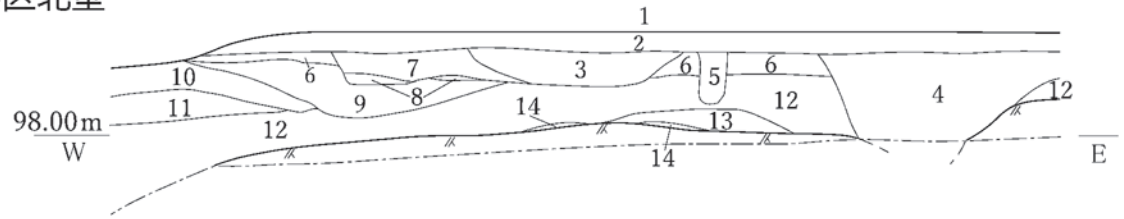

SR03
SR02
SH02
SR01
SH03
SB07
SB13
SB10
SB08
SB09
SX03
SB12
SK04
SB11
SH04
SH05
SH06
0
10m

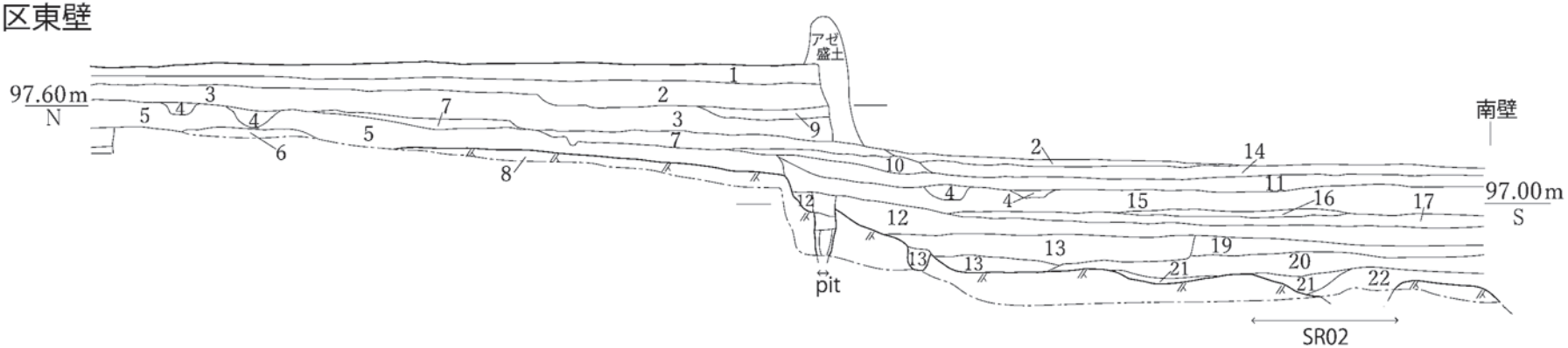
図 24　5 区下層平面図

5区北壁



1　耕土
2　にぶい黄橙（10YR6/4）シルト質極細砂
3　礫層（角礫・円礫混じる）
4　灰黄褐（10YR5/2）粗砂～小礫
5　黒褐（10YR2/2）シルト質極細砂
6　褐（10YR4/4）シルト質極細砂
7　灰黄褐（10YR4/2）シルト質極細砂（灰・小礫含む）
8　灰層（焼土含む）
9　にぶい黄褐（10YR5/4）シルト質極細砂
10　にぶい黄橙（10YR6/3）細砂（小礫含む）
11　灰オリーブ（5Y5/3）シルト質極細砂
12　黄褐（2.5Y5/3）シルト質極細砂
13　暗灰黄（2.5Y5/2）中砂
14　暗灰黄（2.5Y5/2）細砂
15　にぶい黄橙（10YR6/4）シルト質極細砂（地山）

5区東壁



1　にぶい黄橙（10YR6/4）シルト質極細砂　耕土混じり
2　にぶい黄橙（10YR6/4）極細砂
3　灰黄褐（10YR6/2）シルト質極細砂
4　褐灰（10YR4/1）砂礫（角礫）
5　暗褐（10YR3/3）シルト質極細砂（上面にマンガン層）
6　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂
7　黄褐（10YR5/6）シルト質極細砂
8　にぶい黄褐（10YR5/4）シルト質極細砂（マンガン含む）（地山）
9　褐灰（10YR6/1）極細砂
１０　にぶい黄（2.5Y6/4）シルト質極細砂
１１　灰黄褐（10YR4/2）シルト質極細砂（マンガン含む）
１２　にぶい黄褐（10YR5/4）極細砂（マンガン含む）
１３　褐灰（10YR4/1）粗砂（礫多く含む）
１４　灰黄褐（10YR6/2）極細砂
１５　暗褐（10YR3/4）極細砂（マンガン含む）
１６　黄褐（10YR5/6）シルト質極細砂
１７　褐（10YR4/4）シルト質極細砂（マンガン多く含む）
１８　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
１９　暗褐（10YR3/3）細砂
２０　黄褐（10YR3/2）中砂（マンガン含む）
２１　灰黄褐（10YR4/2）粗砂（角礫多く含む。円礫も混じる）
２２　褐（10YR4/4）中砂

図 25　5 区北壁中央・東壁断面図

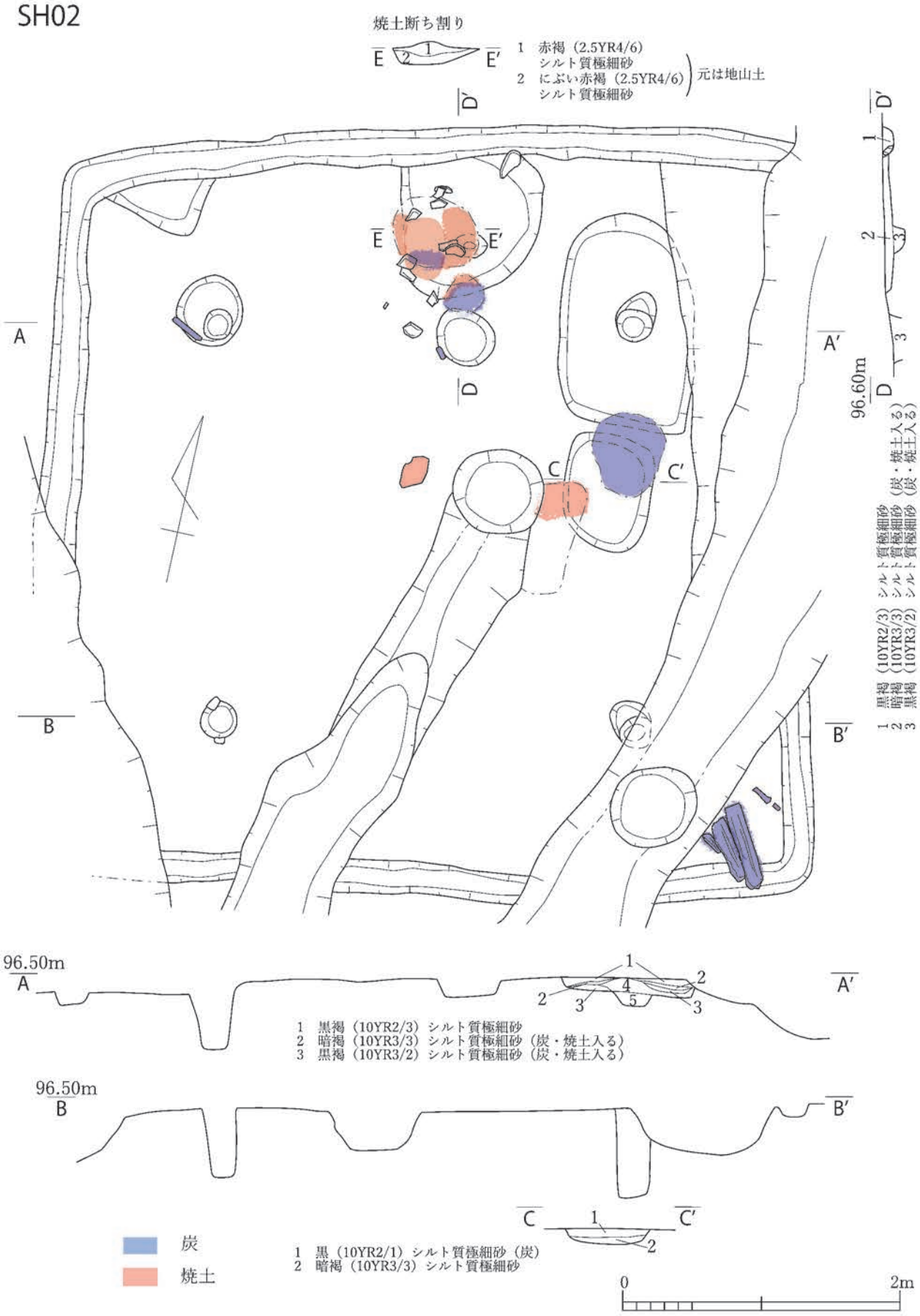


図 26　5 区遺構実測図（1）（SH02）

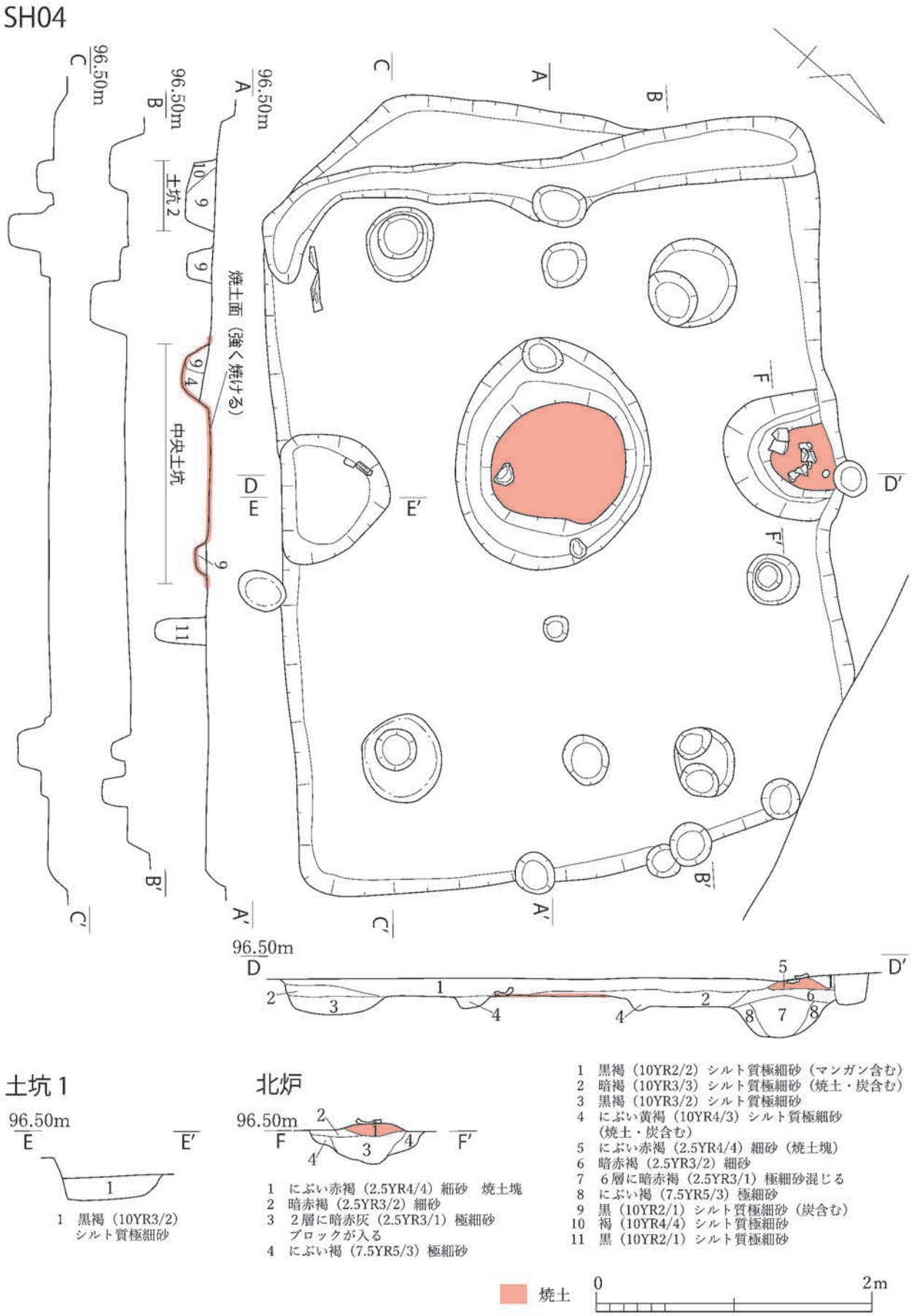
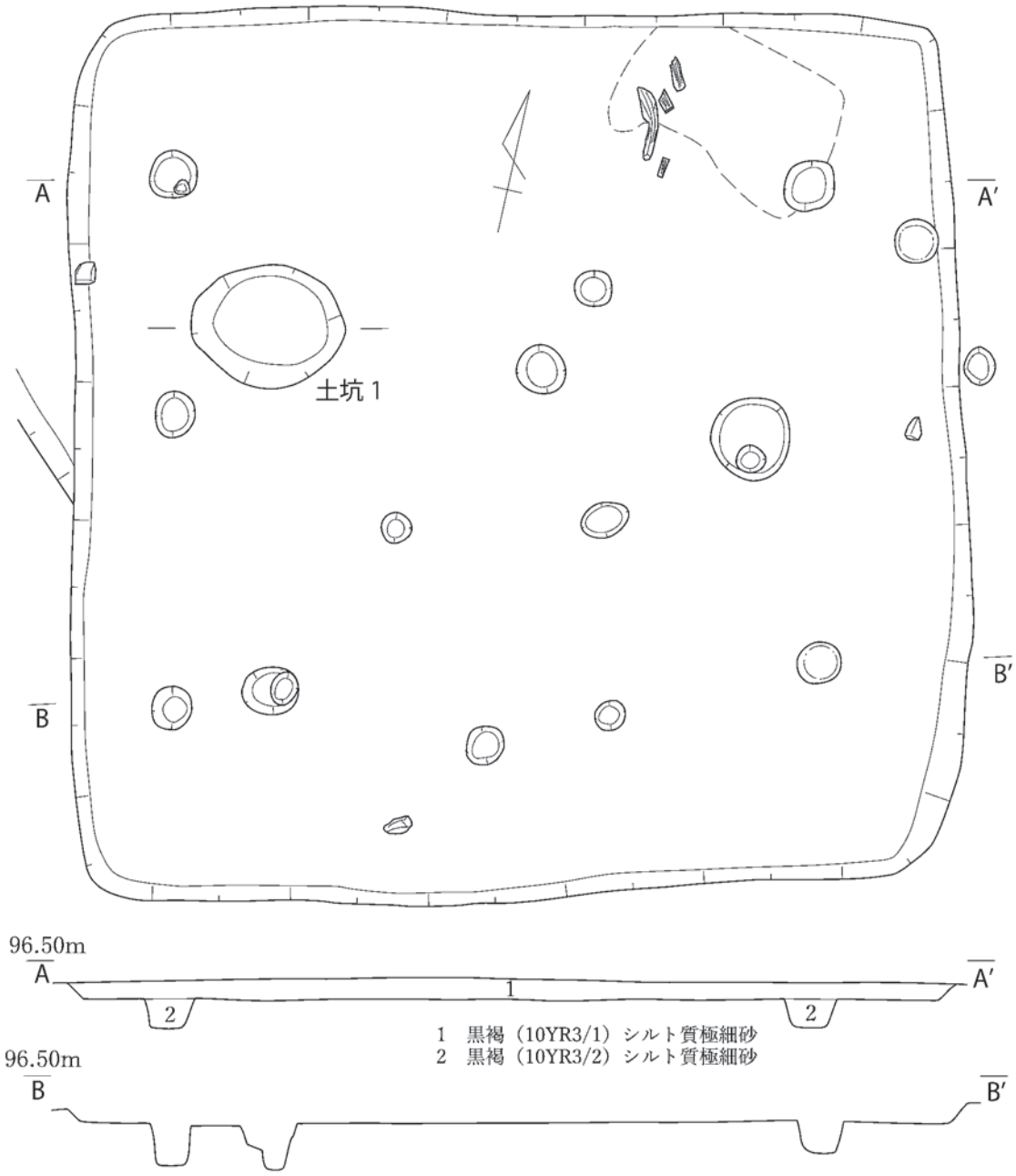


図 27　5 区遺構実測図（2）（SH04）

SH05



土坑 1

図 28　5 区遺構実測図（3）（SH05）

SH06

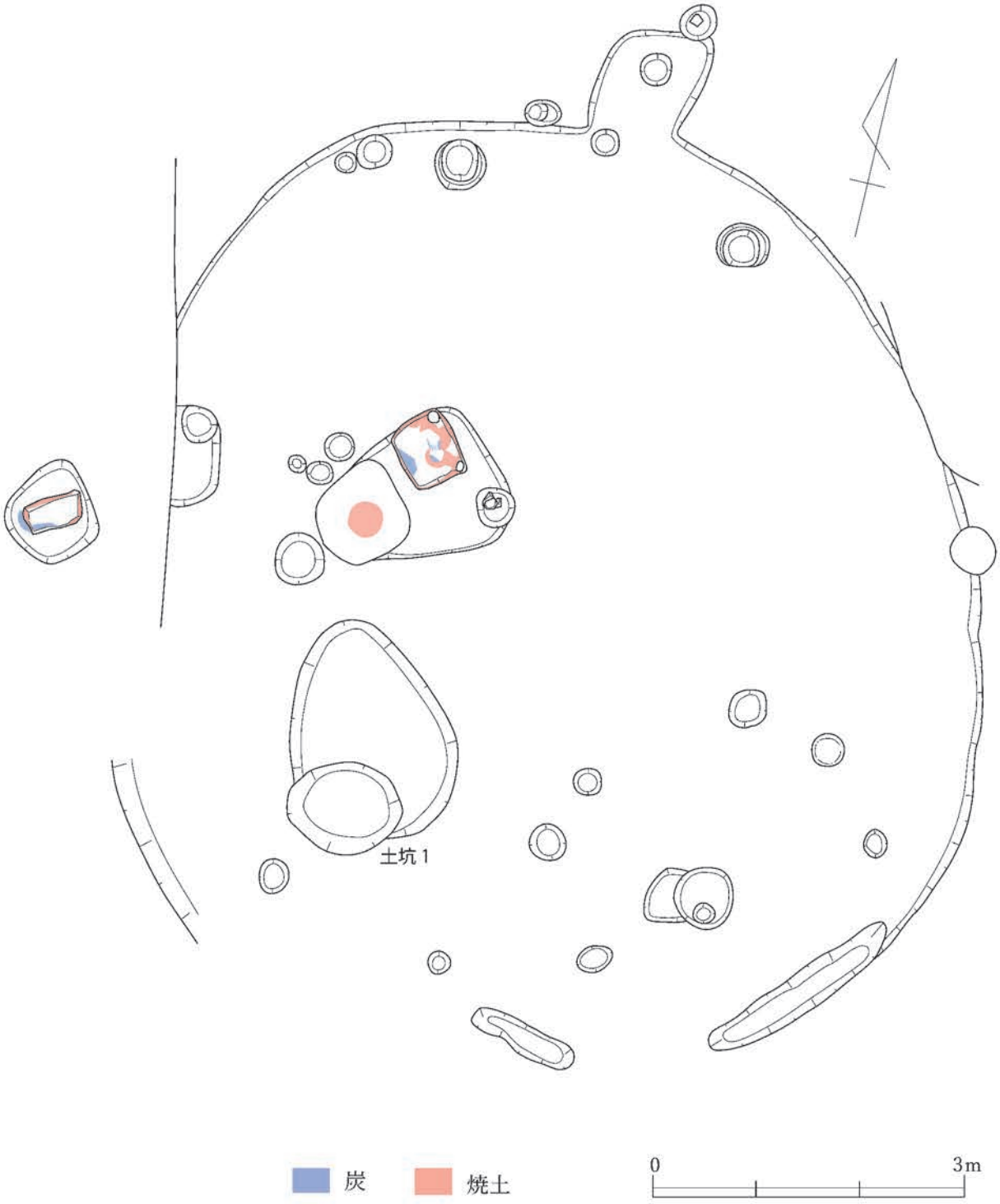


図 29　5 区遺構実測図（4）（SH06）

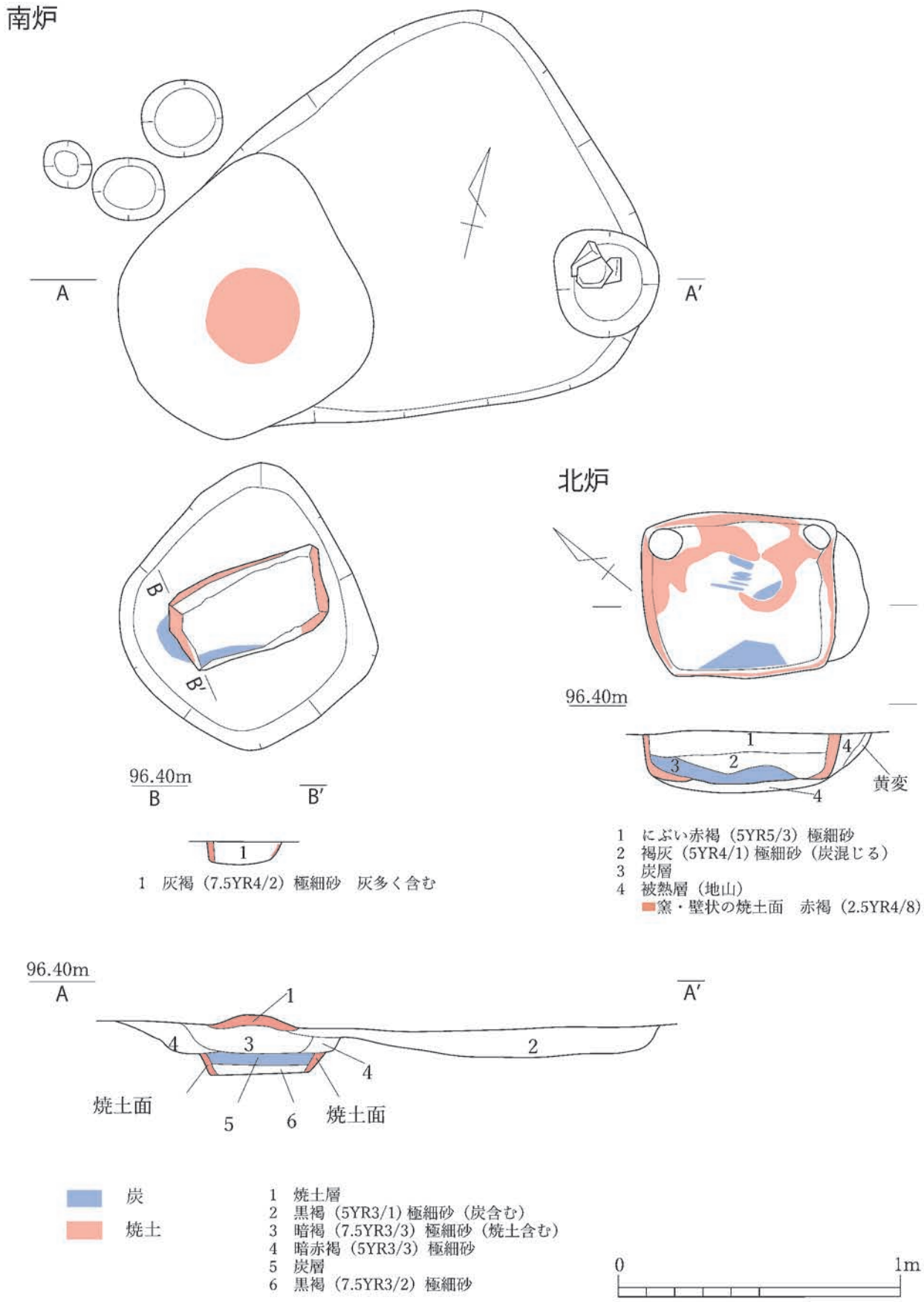
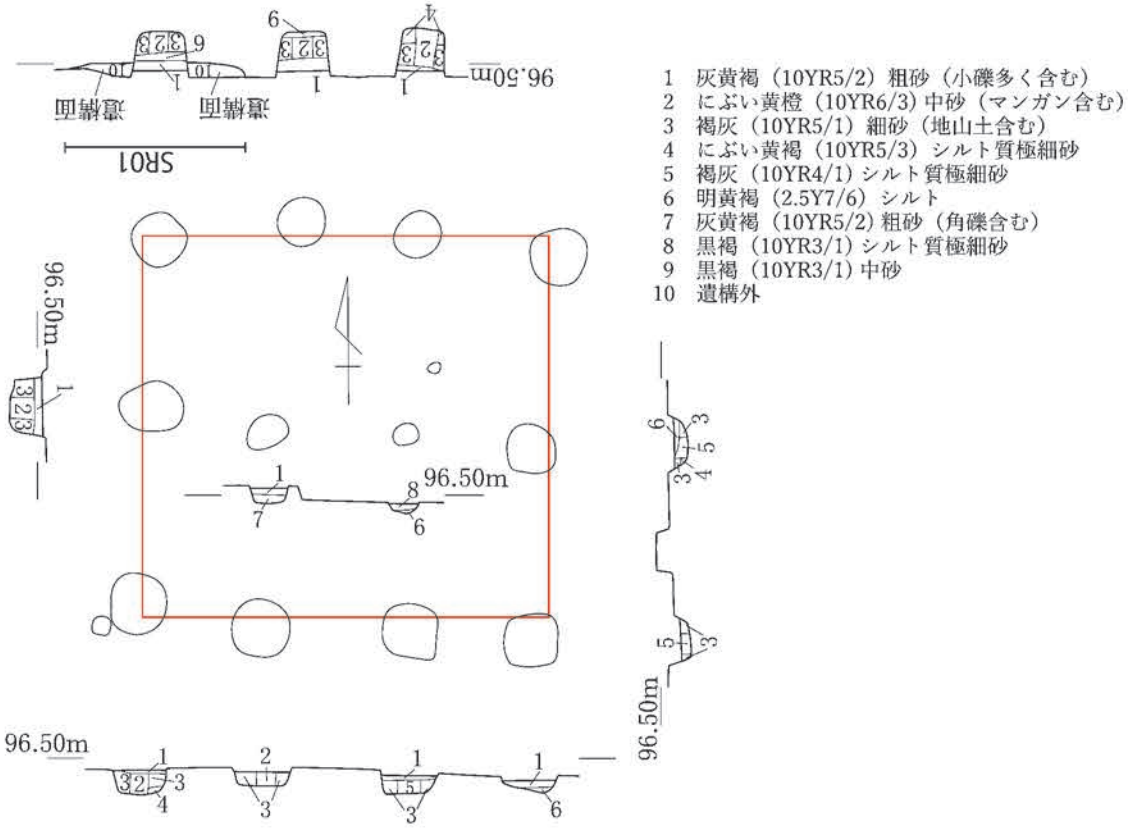


図 30　5 区遺構実測図（5）

SB07



SB08

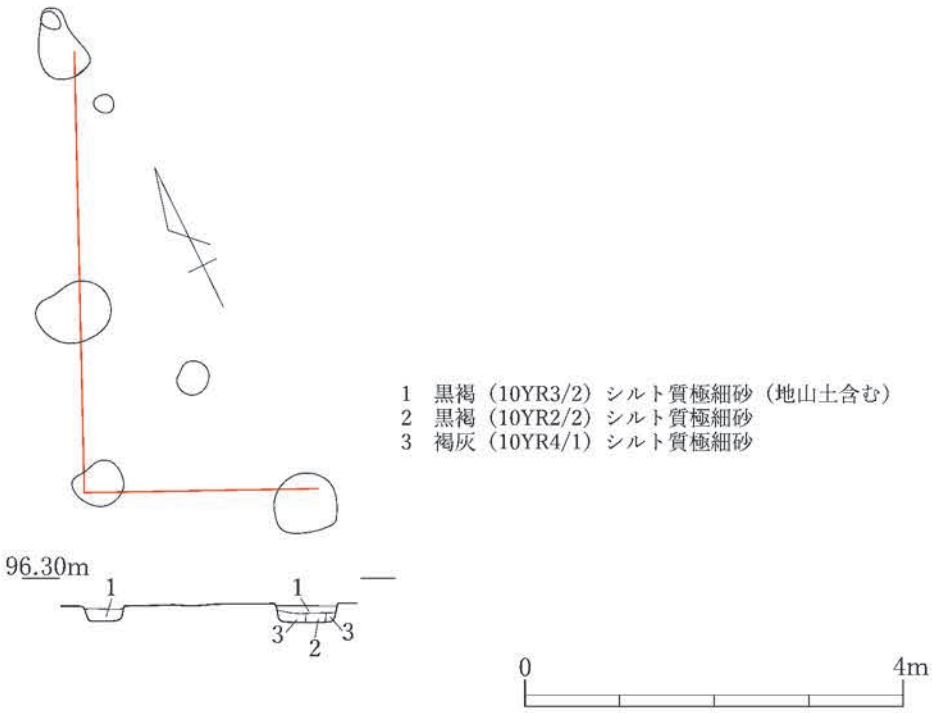
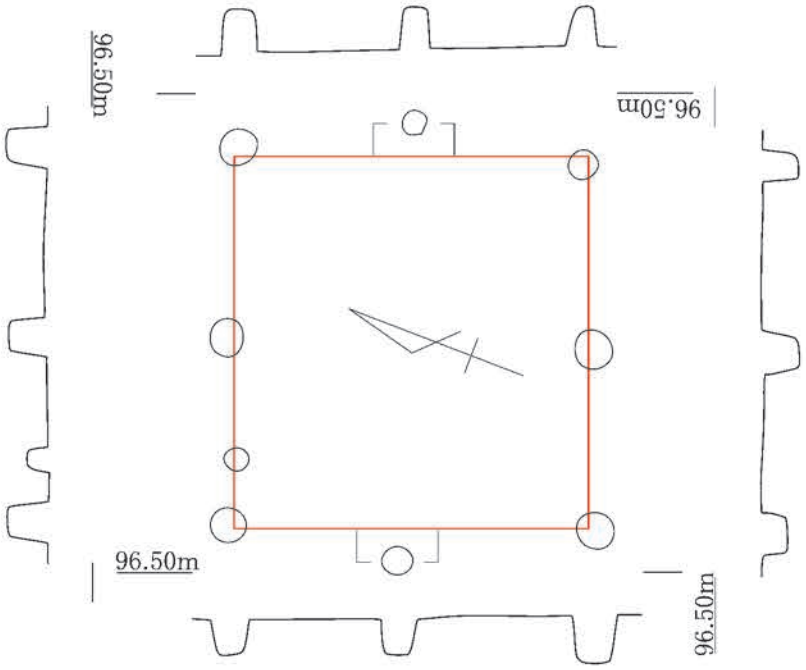


図 31　5 区遺構実測図（6）（SB07・SB08）

SB09



SB11

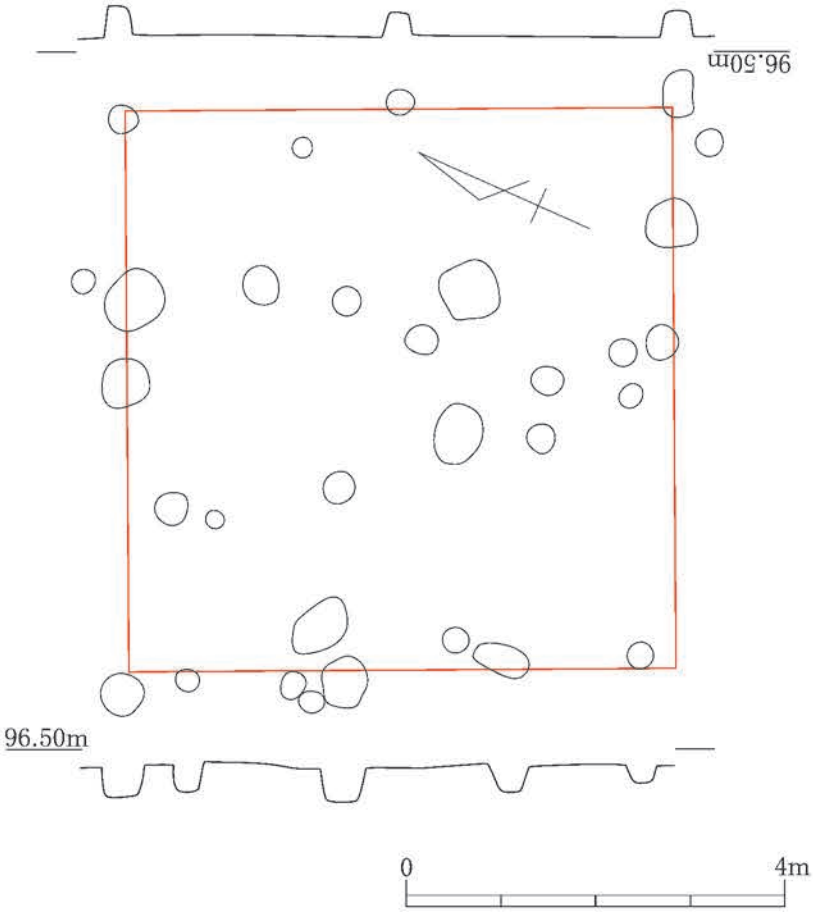
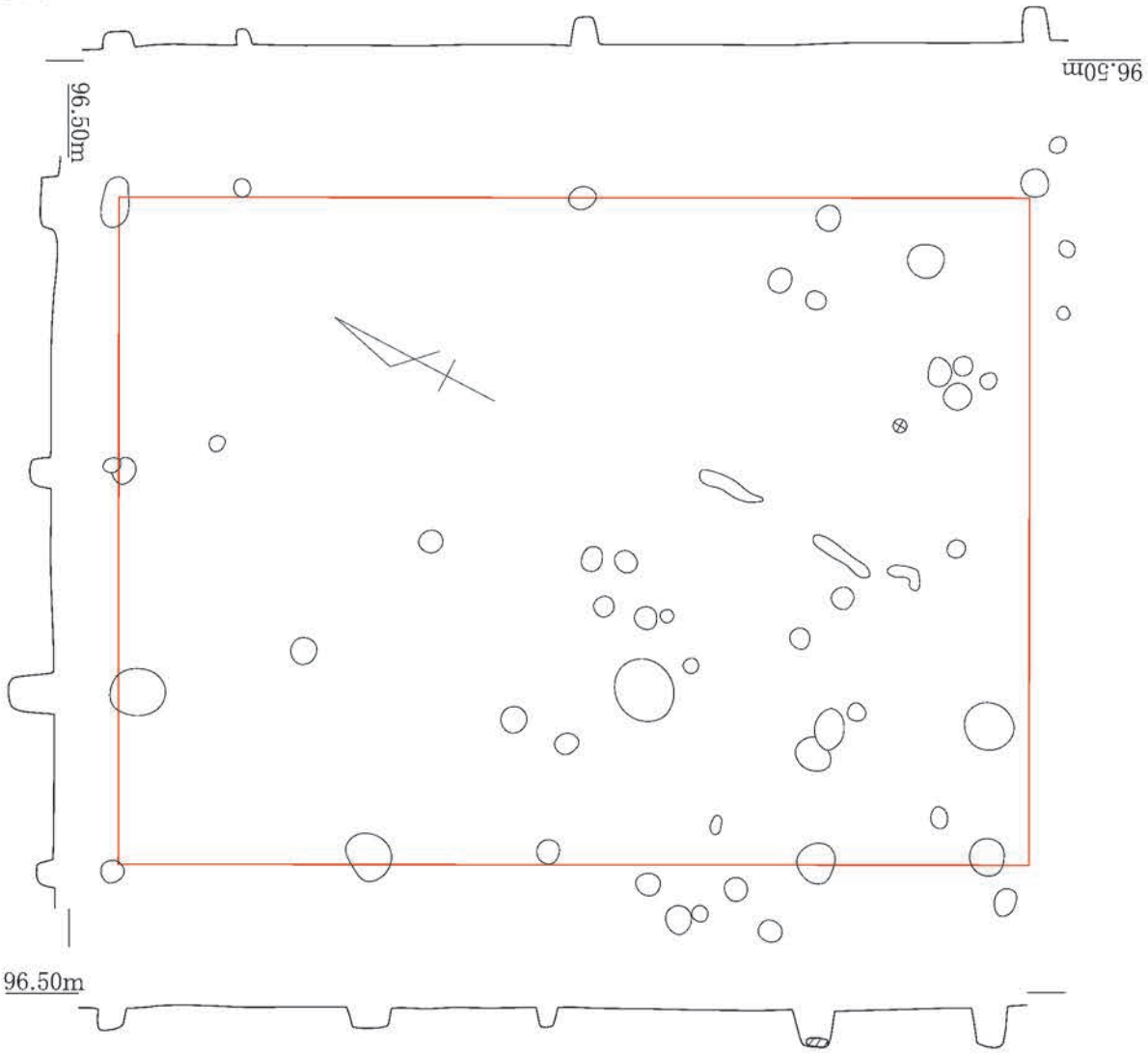


図 32　5 区遺構実測図（7）（SB09・SB11）

SB10



SB12

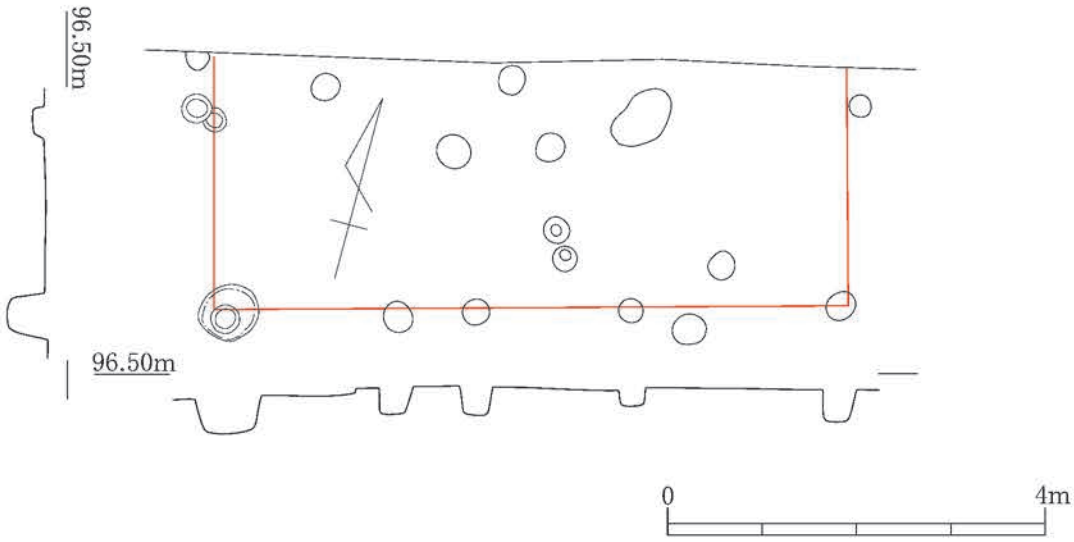


図 33　5 区遺構実測図（8）（SB10・SB12）

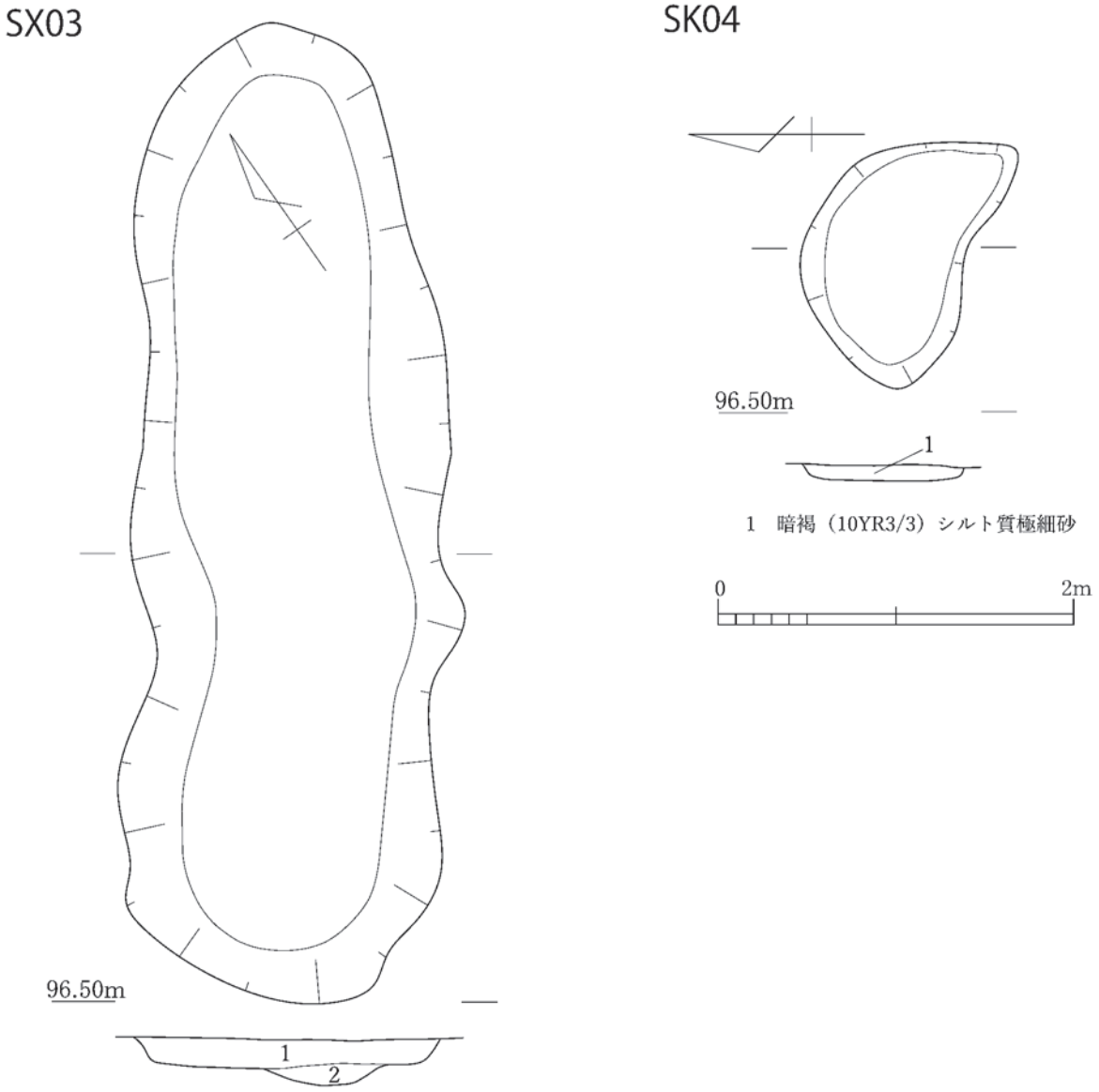


図 34　5 区遺構実測図（9）（SX03・SK04）

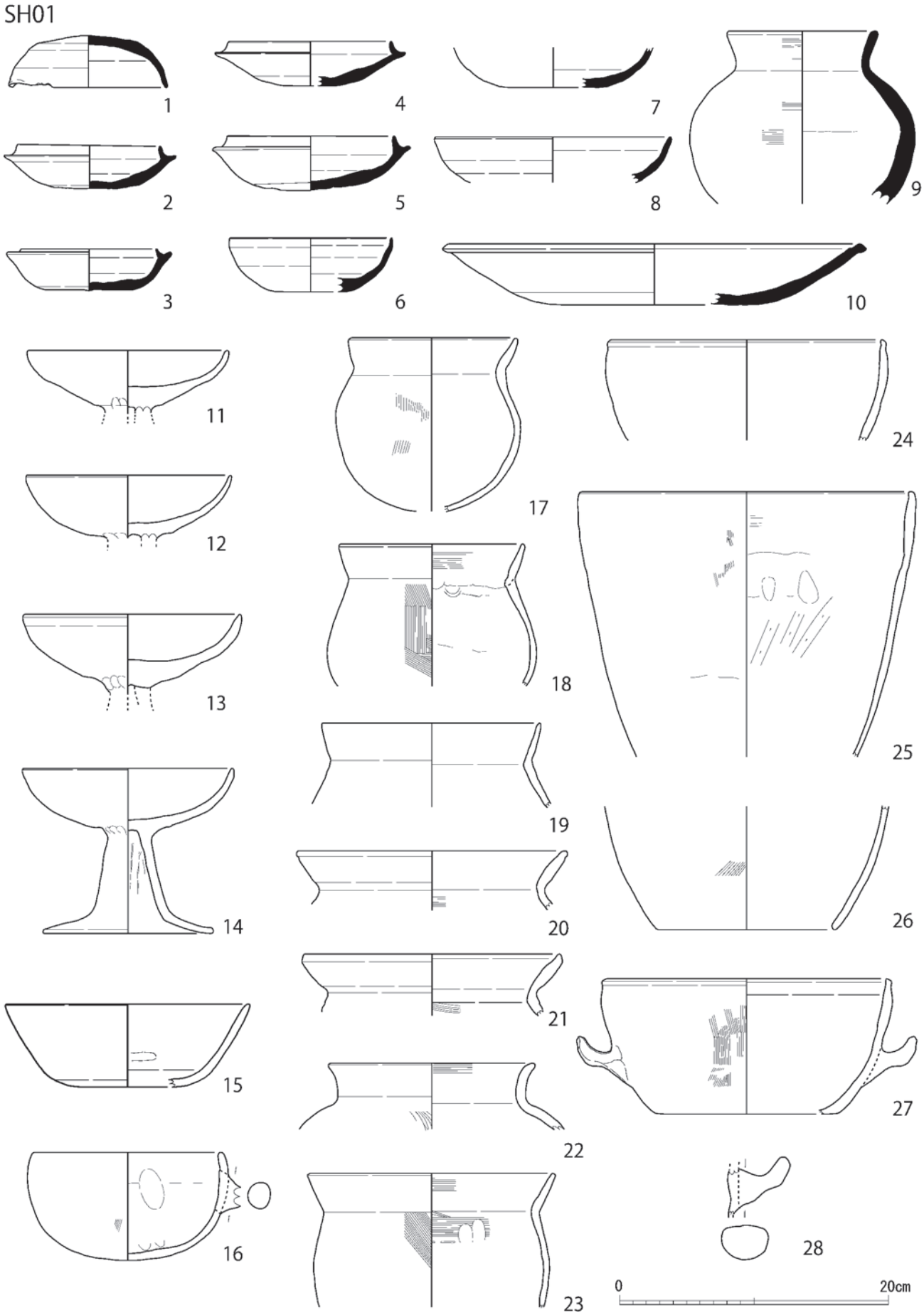


図 35　出土遺物実測図（1）

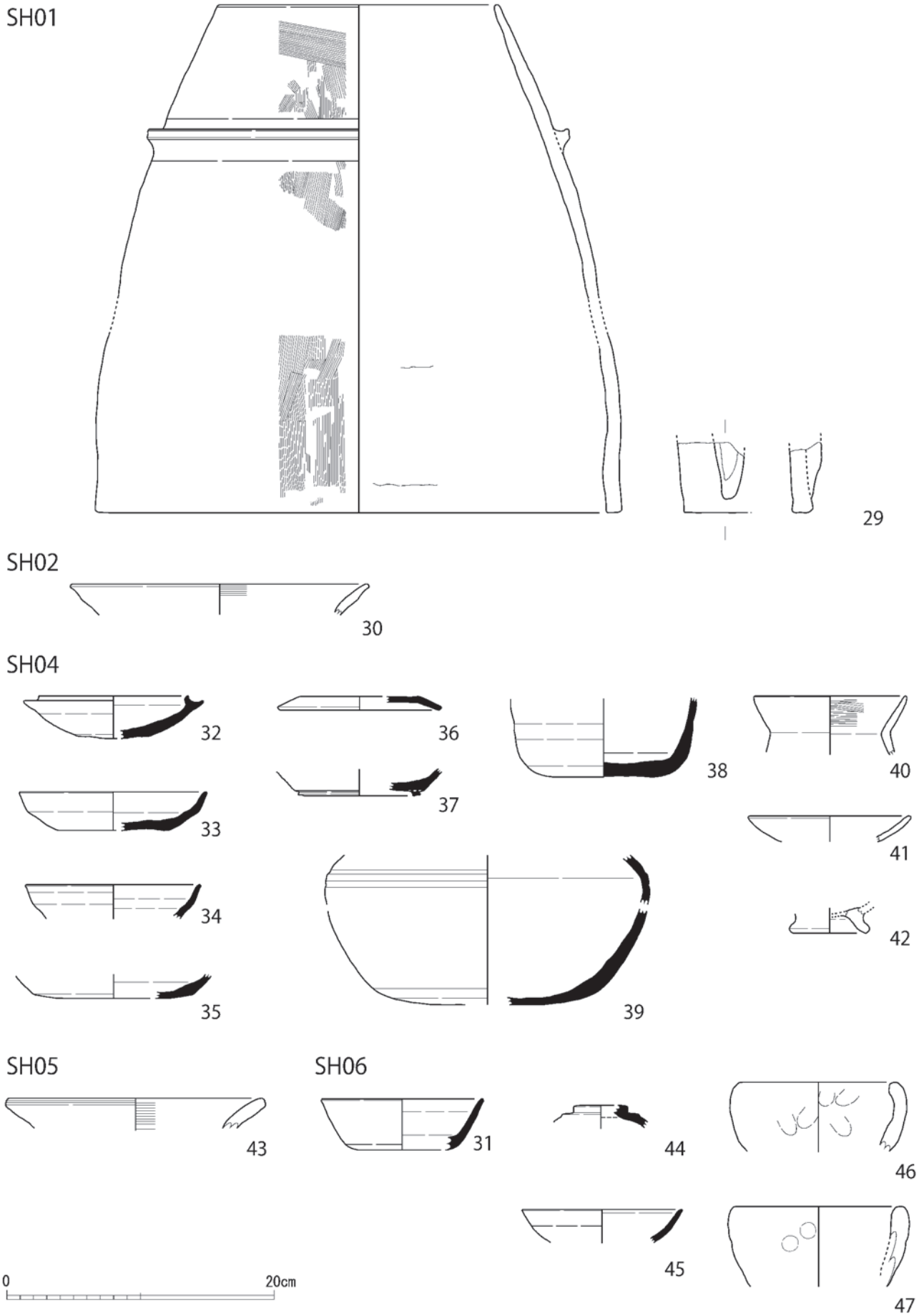


図 36　出土遺物実測図（2）

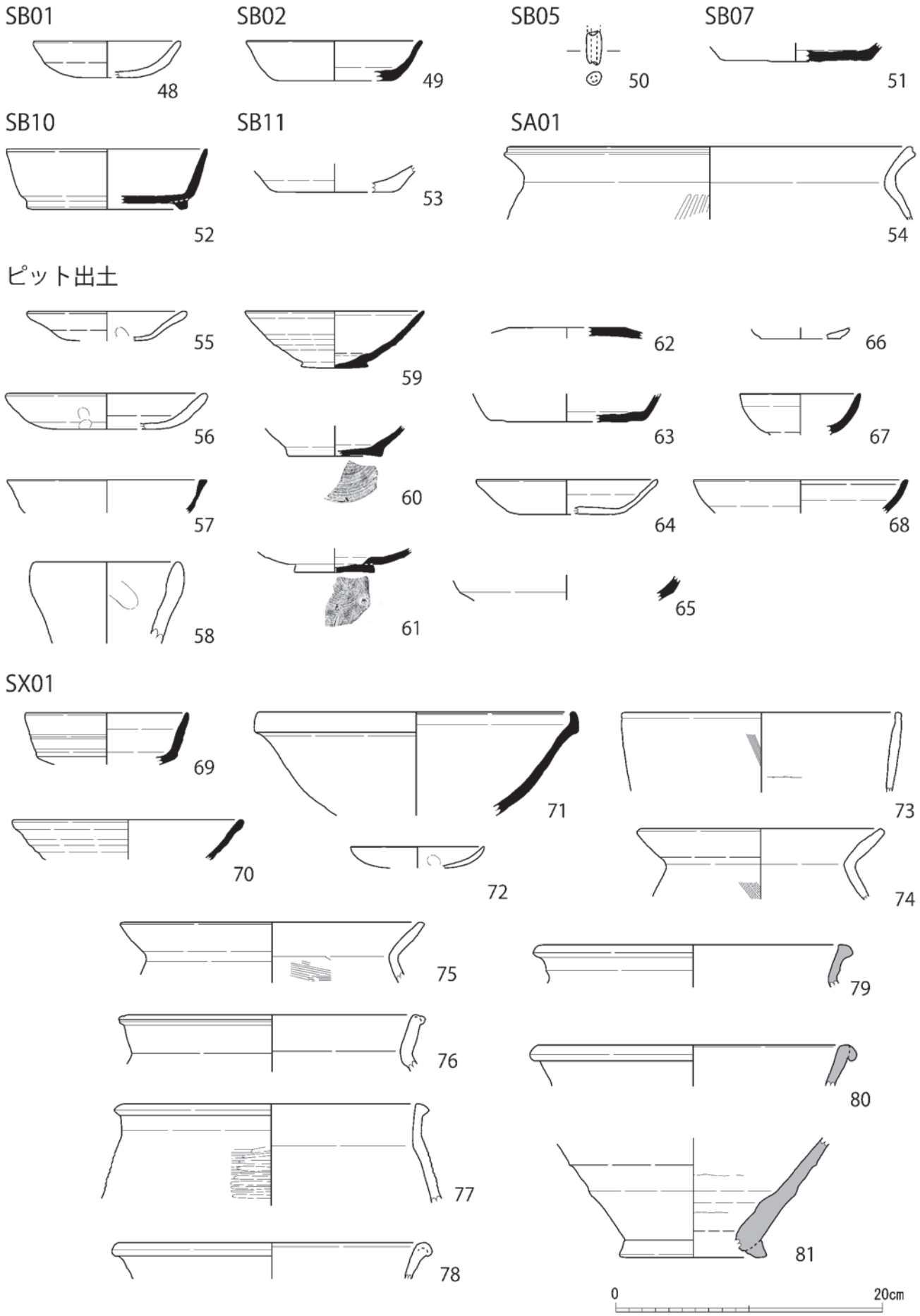


図 37　出土遺物実測図（3）

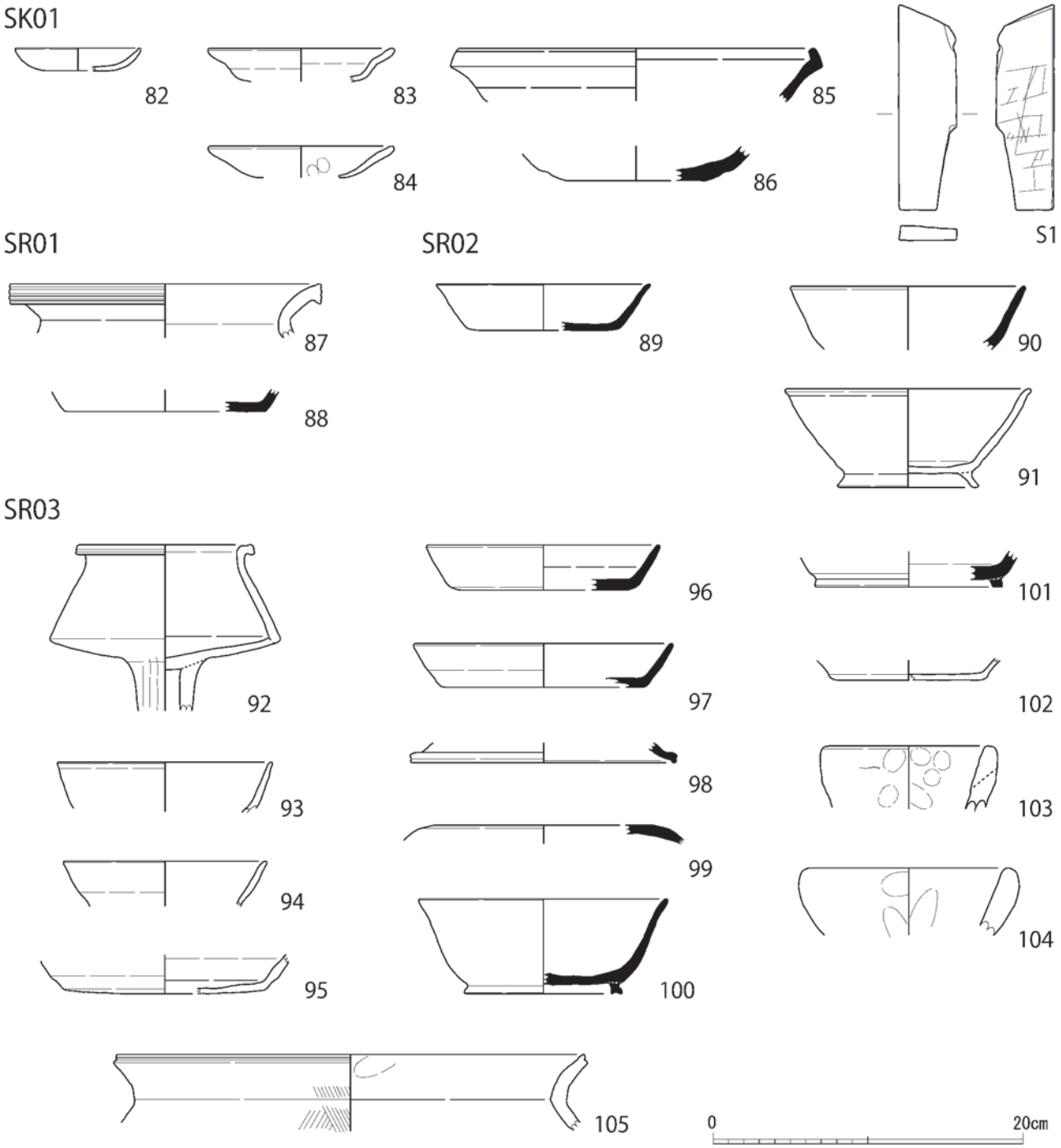


図 38　出土遺物実測図（4）

包含層

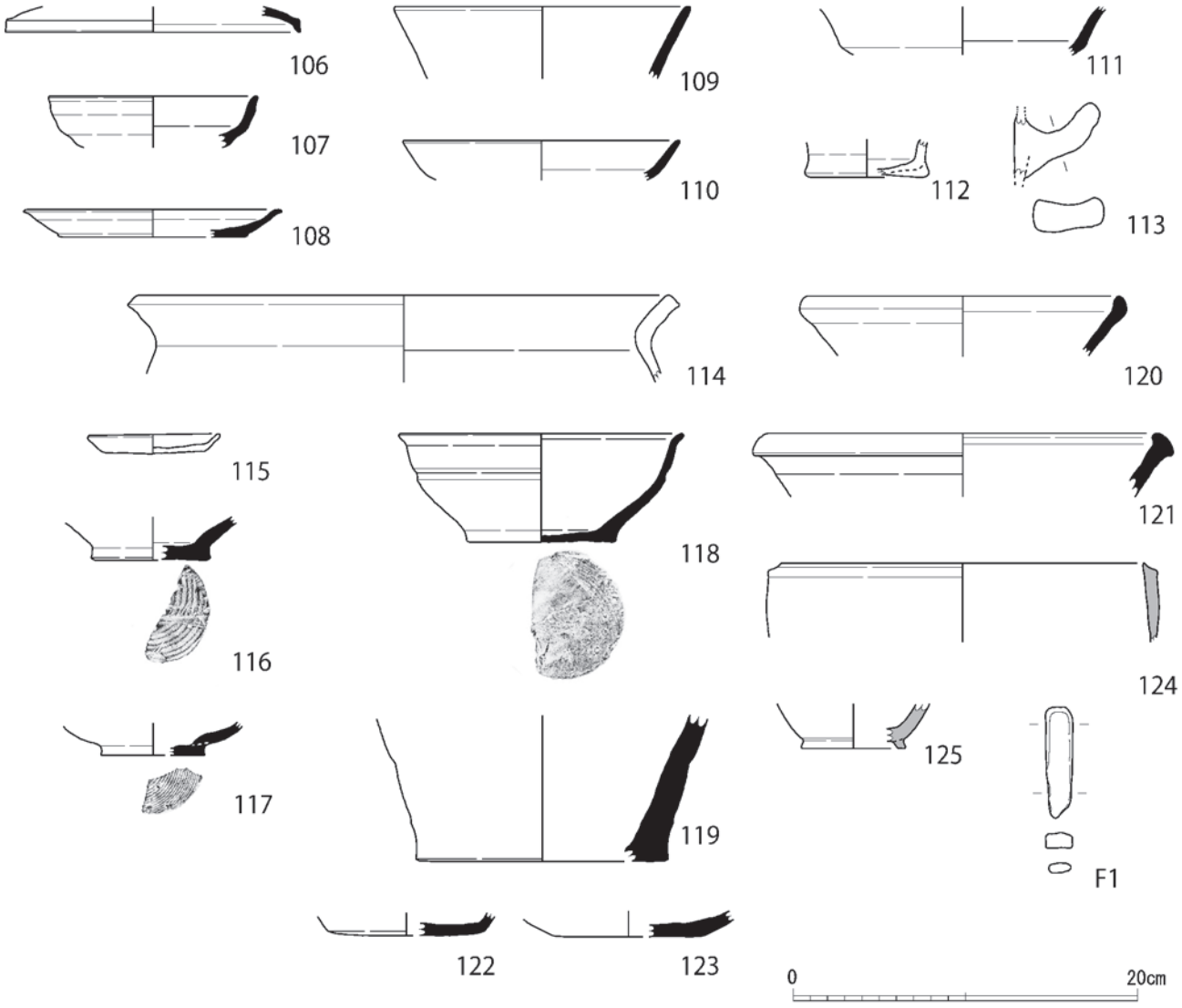


図 39　出土遺物実測図（5）

写真図版

1区空中写真（北上空から）

1区全景（北から）

1区垂直写真

図版 2

1 区

調査前（北から）

1 区全景（南から）

SR01 断面（南から）

SR01 調査風景

SX01 検出状況（南から）

SX01 調査風景

SX01 アゼ（南から）

SX01（南から）

1 区

SX02 断面（南から）

SX02（南から）

SX03・SD01 アゼ（西から）

SX03・SD01 アゼ（西から）

SX03 調査風景

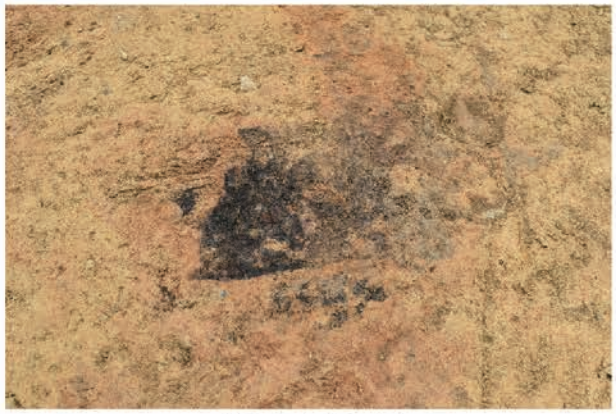
SX03・SD01 アゼ（西から）

東壁北半

東側谷地形断面（北から）

図版 4

1 区



SK01（南から）

SK02 焼土（南から）

SK03（南から）

SK04（南から）

SK05（南から）

SK06（西から）

SK07（西から）

SD01（東から）

2 区

空中写真（西上空から）

垂直写真

図版 6

2 区

北上空から

南上空から

北上空から

全景（北から）

全景（南から）

全景（南から）

調査前（南西から）

埋戻し後（南西から）

2 区

土坑群（南から）

南東部土坑群垂直写真

耕作痕

炭検出状況

SK01 断面（南から）

SK01（南から）

SK02 断面（西から）

SK03 断面（南から）

2 区

SK03（南から）

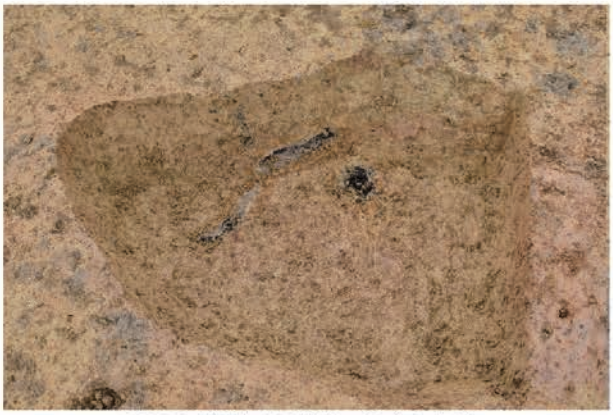
SK03 底ピット断面（南から）

SK04 断面（南から）

SK05 断面（南から）

SK06 断面（南から）

SK07 断面（南から）



SK08 炭検出状況（西から）

SK09 アゼ（南から）

2 区

SK09 底ピット検出状況

SK09 調査風景

SK09・08（南から）

SK09・08（東から）

SK10 断面（南から）

SK10（南から）

SK11（南から）

SK13 断面（西から）

2 区

SK14 検出状況（南から）

SK14 断面（南から）

SK14（東から）

SK14 焼土坑（南から）

SK14 焼土坑断面（南から）

SK14 調査風景

SK15 断面（南西から）

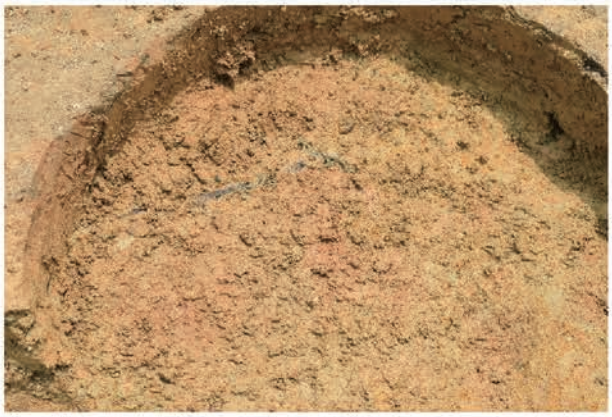
SK16（南から）

2 区

SK17 断面（南から）

SK8・19 断面（南から）

SX01 断面（西から）



SX01（西から）

調査区中央水田溝

北半全景（南東から）

調査風景

調査風景

3 区

垂直写真（1 ～ 3 区）

垂直写真（3 区）

調査前（北西から）

調査前（南西から）

3 区

機械掘削

人力掘削

攪乱 1（南から）

攪乱 2（南から）

丸太材出土状況（南から）

SK01 断面（南から）

SK02 アゼ（南から）

SK02 アゼ（南から）

3 区

SK03 断面（南から）

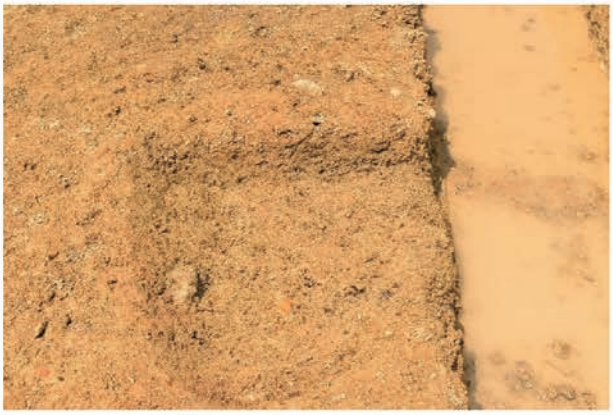
SK03（南から）

SK04 断面（南から）

SK04・05（南から）

SK05 断面（南から）

シート養生



SK06 断面（南から）

SK06（南から）

3 区

SK07 断面（南から）

SK07（南から）

SK08 断面（南から）

調査風景

SK09 断面（南から）

SK09（南から）

SK10 断面（南から）

SK10（南から）

3 区

SK11 断面（南から）

SK11（南から）

SK12 断面（東から）

SK12（南から）

SK13 断面（南から）

SK14 断面（南から）

SK17 断面（南から）

SK17（南から）

3 区

SK18 断面（南から）

SK18（南から）

SK19 断面（南から）

SK19（南から）

SK20 断面（南から）

SK20（南から）

SK21 断面（南から）

SK21（南から）

3 区

SK22 断面（南から）

SK22（南から）

SK24 断面（南から）

SK24（南から）

SK25 断面（南から）

SK225（南から）

SK26（南から）

SK28（南から）

3 区

SK27 断面（南から）

SK27（南から）

SE01 断面（西から）

SE01（西から）

西壁

調査風景

面精査状況

調査状況

3 区

空中写真（東上空から）

全景写真（南から）

全景（北から）

北半全景（東から）

北上空から

4 区

南上空から

西上空から

4 区

東上空から

林谷遺跡上空から東側福崎方面

4 区

垂直写真

4 区

調査前（北から）

調査前（北から）

調査準備（草刈り）

機械掘削

北壁

北壁

調査風景

SK01 断面（南から）

4 区

SK01 内ピット（南から）

SK01（南から）

SP04 土器出土状態

SP04 全掘（東から）

SP05 断面（北から）

調査風景

SK02 断面（東から）

SK02（東から）

4 区

SK02（北東から）

SK02（南から）

SK03 アゼ（南から）

SK03（南から）

全景（南から）

4 区

全景（北から）

SX01 アゼ（南から）

SX01（東から）

SX01（南から）

SX01（北から）

調査風景

SX01 と SK01 の切り合い（南から）

SX02 アゼ（南から）

SX02（南から）

SX02 と SH01（南から）

SX01 と SH01（東から）

調査風景

SH01 アゼ（南から）

SH01 竈出土状況（北から）

SH01　土器（炭・焼土）出土状態

4 区

SH01 土器出土状況

SH01 と SX01・SX02（南東から）

SH01 と SX01・SX02（南東から）

調査風景

調査風景

SH01 床面焼土・炭検出状況

SH01 床面焼土・炭検出状況

SH01 床面焼土・炭検出状況

SH01 床面焼土・炭検出状況

4 区

SH01 内 P3 断面（南から）

SH01 南壁沿い土器出土状態

SH01 竈

SH01 焼土面（中央炉跡）

SH01 全景（東から）

SH01 全景（北から）

SH01（西から）

SH01P3

SH01P4 土器出土状況

SH01P4（南から）

4 区

SH01 北肩部土器出土状態

SH01 北肩部土器出土状態

SH01 北肩部土器出土状態

SH01 北肩部土器出土状態

SH01 竈検出状況

SH01 竈検出状況

SH01 竈断面（東から）

SH01 竈（東から）

SH01 竈（南から）

SH01 竈（南から）

SH01 竈（北から）

SH01 竈調査風景

SH01 中央炉断割り

SH01 南炉断割り

SD01（北から）

SD01（西から）

4 区

SB01（東から）

SB01P1 断面（南から）

SB01P4 断面（南から）

SB01P5 断面（南から）

SB01P8 断面（南から）

SB01 垂直写真

SB02 垂直写真

SB02（南から）

SB03 垂直写真

SB03P17 断面（北から）

SB03P18 断面（北から）

SB03P68 断面（北から）

SB03P70 断面（西から）

調査風景

4 区

SB04（西から）

SB05（西から）

SB04・SB05（南から）

SB04P26 断面（南東から）

SP10 断面（西から）

SP10（南から）

SA01・SA02（東から）

埋戻し

5 区

西半全景（南上空から）

東半全景（東上空から）

5 区

調査前（北東から）

北東部垂直写真

調査風景

北東部鋤溝

北東部鋤溝（西から）

北東部鋤溝（西から）

北東部鋤溝（東から）

東壁ピット

5 区

東壁北半

東壁南半

北壁焼土坑

東上空から

調査風景

南壁東半

南東部調査風景

南東部旧河道弥生土器出土状態

5 区

南東部焼土検出状況（南から）

調査風景

焼土断割り（北から）

南東部焼土検出状況（南から）

炭検出状況（南から）

南東部耕作痕（北から）

東半上面全景（南から）

東半上面全景（北から）

5 区

東半上面垂直写真

西上空から

北上空から

東上空から

南上空から

5 区

東半上面 P2（南から）

東半上面 P7（南から）

東半上面 P2 断割り（南から）

東半上面 P7 断割り（南から）

SA03（南西から）

東半上面 P7 底（西から）

SB06（南から）

SB06 P1 断割り（南から）

SB06 P2 断割り（南から）

SB06 P3 断割り（南から）

東半上面 P4（南から）

SB06 P3 底（南から）

P4 土器出土状態（南から）

東半上面 P4 柱痕跡（南から）

調査風景

調査風景

5 区

SH02 検出状況（南から）

SH02 壁溝ｱｾﾞ（南から）

SH02 検出状況（南から）

SH02 南東炭化材・壁溝（南から）

SH02 焼土・炭検出状況（西から）

SH03 焼土・炭検出状況（南から）

SH02 垂直写真

SH02 甕出土状態

SH02（南から）

SH02 調査風景

SH02（西から）

SH02 土坑 1（東から）

SH02 土坑 1（南から）

SH02 土坑 1（西から）

SH02 土坑 1 断割り（南から）

SH02 土坑 3 アゼ（南から）

5 区

SH02 北西柱穴

SH03（南から）

SH04 検出状況（南から）

SH04 アゼ（北東から）

SH04 土器出土状況（南から）

SH04 土器出土状況（南から）

SH04 土坑 1 断面

SH04 土坑 2 断面（南から）

SH04（南から）

SH04（西から）

SH04 土坑 2（南から）

SH04 炉跡土器出土状態（北から）

SH04 焼土坑（南から）

SH04 焼土坑断割り（南から）

5 区

SH04 炉跡断割り（南から）

SH04 炉跡調査風景

SH05 アゼ（東から）

SH05 土坑 1 断面（南から）

SH05（東から）

SH05（南から）

SH05（北から）

SH05 炭化材（南から）

SH06（南から）

SH06（西から）

SH06（南東から）

SH06（北から）

SH06 北炉跡断面（南から）

SH06 北炉跡（南から）

SH06 北炉跡（西から）

SH06 北炉跡（北から）

5 区

SH06 北炉跡断割り（南から）

調査風景

SH06 南北炉跡（北から）

SH06 南北炉跡（西から）

SH06 南炉跡上部堆積状況

SH06 南炉跡検出状況（南から）

SH06 南炉跡断面（西から）

SH06 南炉跡（西から）

SH06 南炉跡（南から）

SH06 南北炉跡（東から）

SH06 北突出部（南から）

SH06P5 土器出土状態（南から）

SH06P6（南から）

調査風景

シート養生

ドローン撮影風景

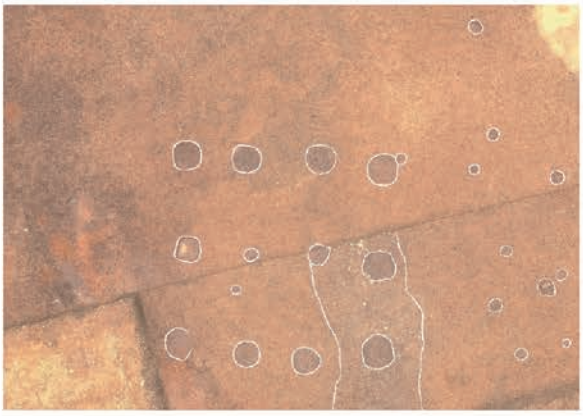
5 区

SB07 調査風景（東から）

SB07（東から）

SB07（西から）

SB07（南から）



SB07 垂直写真

調査風景

SB07P1 断割り（南から）

SB07P2 断割り（南から）

SB07P3 断割り（南から）

SB07P4 断割り（南から）

SB07P5 断割り（西から）

SB07P6 断割り（北から）

SB07P7 断割り（南から）

SB07P8 断割り（南から）

SB07P9 断割り（北から）

SB07P10 断割り（南から）

5 区

SB07P11 調査風景

SB07P11 断割り（北から）

SB07P12 断割り（東から）

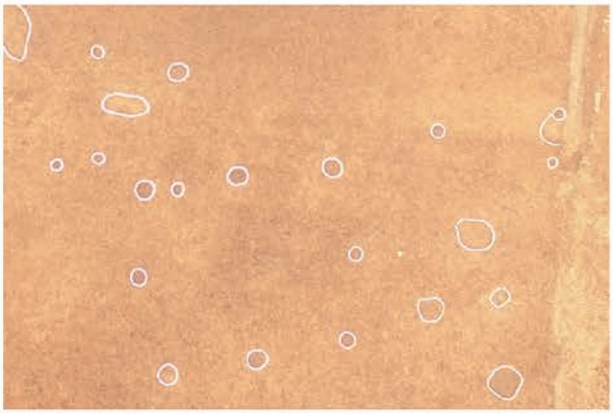
調査風景

SB08（南から）

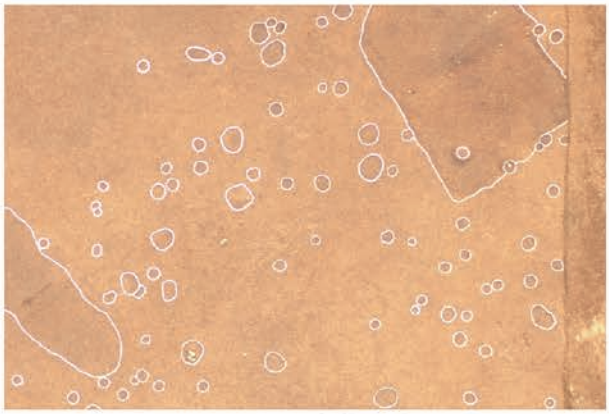
SB08・09（西から）

SB08P48 断割り（南から）

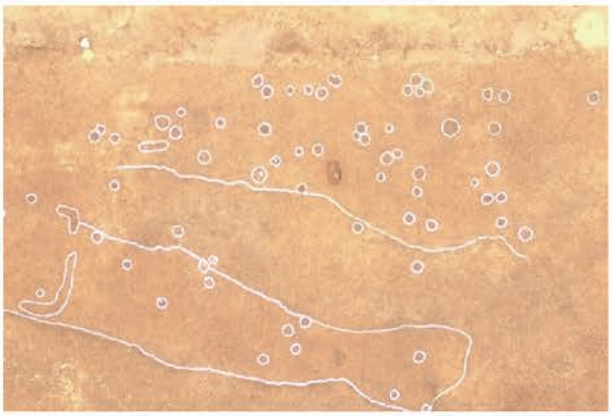
SB08P53 断割り（南から）



SB08・09 垂直写真



SB11・12 垂直写真



SB13 垂直写真

SB11・12（北から）

P61（南から）

SB12P62（南から）

SB12P63（南から）

調査風景

5 区

SX03 アゼ（南西から）

SK04 断面（北西から）

SX03'（南西から）

SR02ｱｾﾞ（南から）

SR03ｱｾﾞ（南から）

SR01 土師器出土状態

SR01 底（南壁）

東半下層全景（南から）

東半下層全景（北から）

東半下層垂直写真

全景（西上空から）

全景（北上空から）

5 区

全景（南上空から）

全景（東上空から）

西半全景（南から）

西半全景（北から）

西半垂直写真

図版 60

5

12

11

13

14

15
18
19
20
21
22

16

17

23
26
28
31
30
25

24

27

29−1

29

29−2

38

50

32
33
34
35
36
37
42
39
40
41

43
44
45
46
47
48
49
51
52
53
54

55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68

69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81

図版 66

82
83
84
85
86
87
88
89
90

91

115

92

93
94
95
96
97
98
99
101
102
103
104
105
100

106
107
108
109
110
111
112
113
114
116
117
120
121
122
123
124
125
119

118

126
127

S1

S2

F1

報告書抄録

ふりがな	はやしだにいせき
書名	林谷遺跡
副書名	高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う調査報告書
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	31
編著者名	渡辺　昇
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280　兵庫県神崎郡福崎町南田原 3116-1　TEL：0790-22-0560
発行年月日	2024 年 3 月 10 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査種別
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒		㎡	
林谷遺跡（はやしだにいせき）	兵庫県神崎郡（ひょうごけんかんざきぐん） 福崎町高岡（ふくさきちょうたかおか） 字宮ノ上（あざみやのうえ） 字社ケ一（あざやしろがいち）	28443	410049	34 度 58 分 11 秒	134 度 44 分 17 秒	2019 年 7 月 1 日～ 11 月 7日 (36日間) 2021 年 7 月 19 日～ 9 月 23 日 (36日間)	2, 560 1, 540	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
林谷遺跡	集落跡	縄文 古墳 奈良	落とし穴 竪穴住居 掘立柱建物 鍛冶炉	須恵器・土師器 須恵器・土師器	

2024 年 3 月 10 日　発　行

福崎町埋蔵文化財調査報告 31

林谷遺跡

ー高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書ー

発　　行　　福崎町教育委員会
〒 679-2280　兵庫県神崎郡福崎町南田原 3116-1
印　　刷　　山野印刷株式会社